

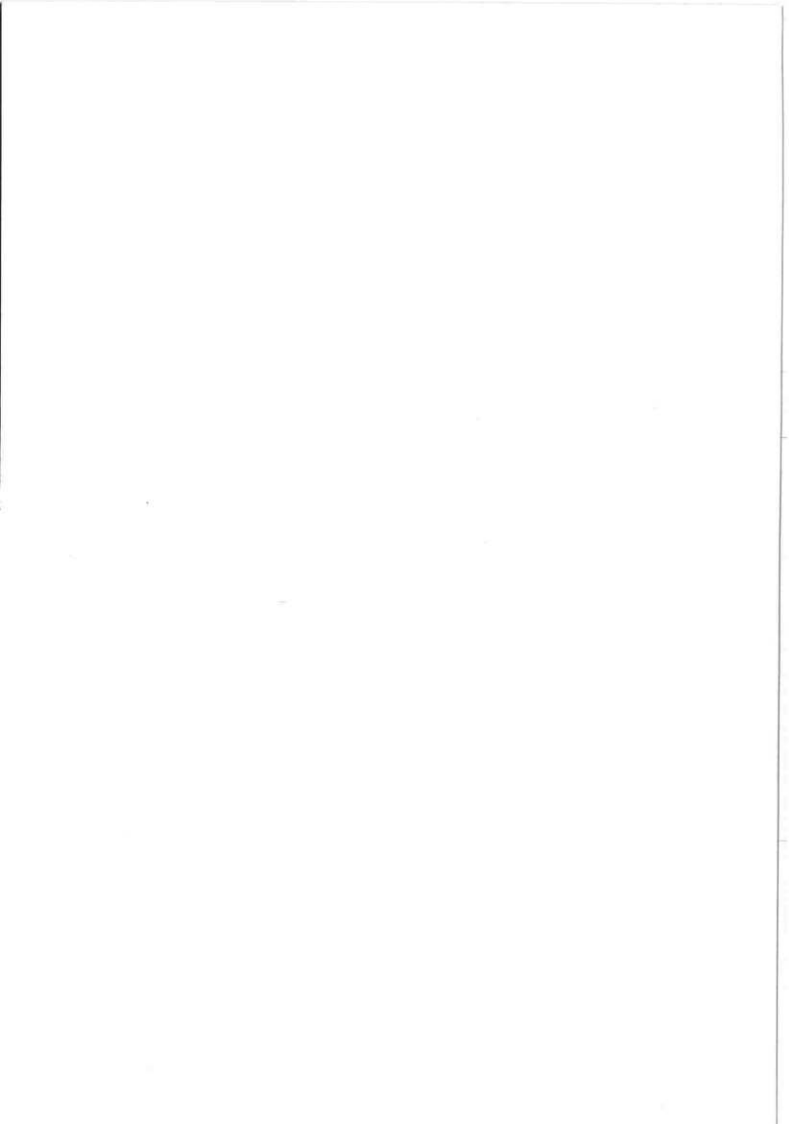
玉名市文化財調査報告 第22集

一般国道208号玉名バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

## 築地池下遺跡

2010(平成22年)

玉名市教育委員会

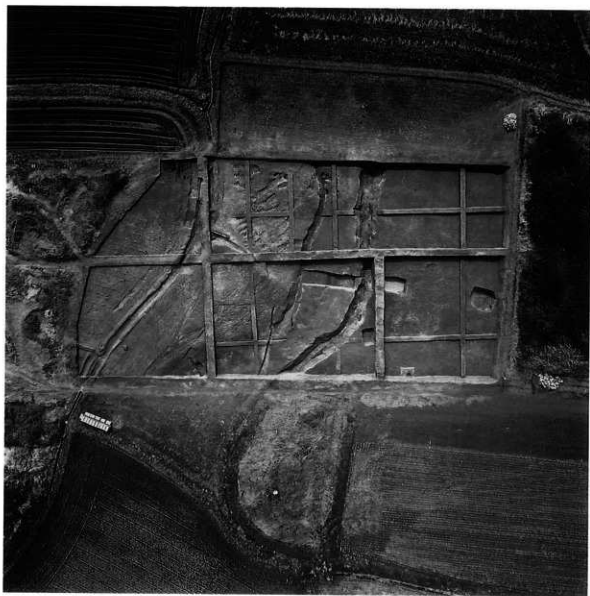




築地池下遺跡 調査区遠景 (南より小岱山方面を望む)



築地池下遺跡 調査区遠景 (西より築地館跡方面を望む)



築地池下遺跡 調査区全景

## ご挨拶

玉名市は熊本県内でも遺跡が多く存在する地域です。そのような中で九州新幹線や国道 208 号玉名バイパスなどの整備、開発が進んでいます。

玉名市教育委員会としましては、その文化財の取扱いについて、事前に協議し、保存できるものについては極力保存に努めていますが、やむを得ず破壊される場合については発掘調査を実施し、記録保存の処置をとっております。

ここに報告する築地池下遺跡は、平成 20 年度に玉名バイパス建設工事に伴って発掘調査を実施したものであります。調査の結果、弥生時代の住居跡や鎌倉～室町時代の溝などと共に土器・石器などの遺物が出土しています。こうした調査結果を報告するにあたり、この成果が少しでも多くの皆様に活用され、文化財保護に役立てられることを願ってやみません。

最後に、埋蔵文化財の発掘調査にご協力いただいた方々に対し、心から感謝の意を表します。

平成 22 年 8 月 31 日

玉名市教育長 森 義臣

## 例 言

- 1 本書は玉名市教育委員会が国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所の委託を受けて実施した、玉名市築地に所在する築地池下遺跡の調査報告書である。
- 2 調査は、平成20年11月19日から平成21年3月17日まで、玉名市教育委員会が主体となって、現場における調査は株式会社九州文化財研究所に委託して行った。
- 3 空中写真撮影は、中世の遺構完掘状況を株式会社九州文化財研究所が行い、調査区全体の完掘状況は、株式会社熊本航空に委託した。
- 4 出土遺物の整理作業及び報告書作成は、平成21年度に萱父雅史、古閑敬士が担当し、玉名市文化財整理室で行った。
- 5 遺物の実測は、古閑敬士、嶋村ひとみ、権藤功が行い、製図は早川イツエが行った。拓本は五野富美子が行った。
- 6 遺物の写真撮影は、萱父が行った。
- 7 挿図に使用している座標値は、世界測地系の第2座標系に基づいており、方位は特に記載がない限り座標北を示す。
- 8 出土遺物は、玉名市文化財整理室で保管している。
- 9 自然科学分析は株式会社古環境研究所に委託した。
- 10 本書の執筆は、第三章の遺物の解説を古閑が、第四章の自然科学分析は古環境研究所の杉山真二氏が行い、その他の執筆と編集は萱父が行った。

## 本文目次

巻頭図版

序文

例言

### 第I章 調査の概要

#### 第1節 調査に至る経緯と調査組織

- 1 調査の契機と経過 ..... 1
- 2 調査の組織 ..... 3

#### 第2節 調査の方法と経緯

- 1 調査の方法 ..... 3
- 2 調査の経過・日誌抄録・協議書録 ..... 6
- 3 遺跡の公開と活用 ..... 12

### 第II章 遺跡の概要

#### 第1節 遺跡の環境

- 1 地理的環境 ..... 14
- 2 歴史的環境 ..... 14

#### 第2節 遺跡の層位と包含層 ..... 20

### 第III章 調査の成果

#### 第1節 弥生時代の遺構と遺物

- 1 遺構 ..... 27
- 2 自然の落ち込み ..... 30
- 3 遺物 ..... 31

#### 第2節 中世の遺構と遺物

- 1 遺構 ..... 37
- 2 遺物 ..... 44

#### 第3節 その他の遺構・遺物

- 1 縄文土器 ..... 52
- 2 古墳時代～古代の遺物 ..... 52
- 3 近世以降の遺構と遺物 ..... 56
- 4 石器・石製品・その他の遺物 ..... 57

### 第IV章 自然科学分析 ..... 60

### 第V章 総括 ..... 84

遺物観察表 ..... 95

写真図版 ..... 104

報告書抄録

## 挿図目次

第 1 図	玉名バイパス路線と調査位置図	1
第 2 図	調査地周辺地籍図	2
第 3 図	調査区位置図 (工事前・工事後)	4
第 4 図	調査区グリッド配置図	5
第 5 図	周辺遺跡分布図	16
第 6 図	土層断面位置図及び土壌分析サンプル採取地点	23
第 7 図	土層堆積状況① (西-東)	23
第 8 図	土層堆積状況②-1 (東-西)	24
第 9 図	土層堆積状況②-2 (東-西)	25
第 10 図	土層堆積状況③ (南北)	26
第 11 図	遺構配置図 (弥生時代)	28
第 12 図	竪穴住居跡 (S001) 実測図	29
第 13 図	自然の落ち込み遺物出土状況図	30
第 14 図	出土遺物実測図 (S001-2層①)	32
第 15 図	出土遺物実測図 (S001-2層②)	33
第 16 図	出土遺物実測図 (S001-1層)	34
第 17 図	出土遺物実測図 (包含層・弥生)	36
第 18 図	遺構配置図 (中世)	38
第 19 図	遺構実測図 (S002)	39
第 20 図	遺構実測図 (S004・S005)	41
第 21 図	遺構実測図 (中世)	43
第 22 図	遺構実測図 (S008)	44
第 23 図	出土遺物実測図 (S002)	45
第 24 図	出土遺物実測図 (S002)	46
第 25 図	出土遺物実測図 (S004・S005)	48
第 26 図	出土遺物実測図 (包含層・中世)	49
第 27 図	出土遺物実測図 (包含層・青白磁)	51
第 28 図	出土遺物実測図 (包含層・縄文土器)	52
第 29 図	出土遺物実測図 (包含層・古墳~古代)	53
第 30 図	出土遺物実測図 (包含層・近世陶磁器)	55
第 31 図	杭出土位置及び実測図	55
第 32 図	出土遺物実測図 (石器)	57
第 33 図	出土遺物実測図 (石器・石製品・その他)	59
第 34 図	築地池下遺跡 A 地点 (中央) における植物珪酸体分析結果	68
第 35 図	築地池下遺跡 A 地点 (南) における植物珪酸体分析結果	69
第 36 図	築地池下遺跡 B 地点における植物珪酸体分析結果	70
第 37 図	築地池下遺跡 C 地点における植物珪酸体分析結果	71
第 38 図	築地池下遺跡 D 地点における植物珪酸体分析結果	72
第 39 図	築地池下遺跡の植物珪酸体 (プラントオパール)	73
第 40 図	築地池下遺跡 A 地点 (中央) における花粉ダイアグラム	80
第 41 図	築地池下遺跡 C 地点における花粉ダイアグラム	81
第 42 図	築地池下遺跡 D 地点における花粉ダイアグラム	82
第 43 図	築地池下遺跡の花粉・胞子	83
第 44 図	築地池下遺跡の時代別遺構配置図 (弥生・中世)	85
第 45 図	中世における大野別府領区域図	88



第 46 図	築地池下遺跡周辺の大野氏城館位置図 .....	89
第 47 図	築地池下遺跡と築地館跡、浄光寺跡の位置図 .....	91

## 表目次

第 1 表	周辺遺跡地名表 .....	17
第 2 表	築地池下遺跡における植物珪酸体分析結果 1 .....	64
第 3 表	築地池下遺跡における植物珪酸体分析結果 2 .....	65
第 4 表	築地池下遺跡における植物珪酸体分析結果 3 .....	66
第 5 表	築地池下遺跡における植物珪酸体分析結果 4 .....	67
第 6 表	築地池下遺跡における花粉分析結果 1 .....	78
第 7 表	築地池下遺跡における花粉分析結果 2 .....	79
第 8 表	築地池下遺跡と大野一族の城館一覽 .....	88
第 9 表	遺物観察表 .....	95

## 図版目次

図版 1	調査前状況、Ⅱ層遺物出土状況、土層堆積状況 .....	104
図版 2	S001 検出状況 .....	105
図版 3	S001 完掘状況 .....	106
図版 4	Ⅳ層遺物出土状況 .....	107
図版 5	S002 遺物出土状況 .....	108
図版 6	S002 土層堆積状況・完掘状況 .....	109
図版 7	S004 検出状況、完掘状況 .....	110
図版 8	S005 完掘状況 .....	111
図版 9	S009 検出状況 .....	112
図版 10	Ⅳ層遺物出土状況 .....	113
図版 11	S014 完掘状況、青磁出土状況 .....	114
図版 12	杭出土状況 .....	115
図版 13	築地池下遺跡出土遺物① .....	116
図版 14	築地池下遺跡出土遺物② .....	117
図版 15	築地池下遺跡出土遺物③ .....	118
図版 16	築地池下遺跡出土遺物④ .....	119
図版 17	築地池下遺跡出土遺物⑤ .....	120
図版 18	築地池下遺跡出土遺物⑥ .....	121

204 214 218

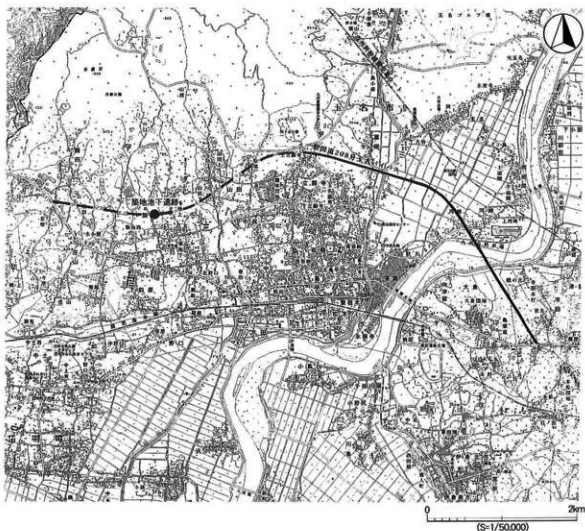
# 第I章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯と調査組織

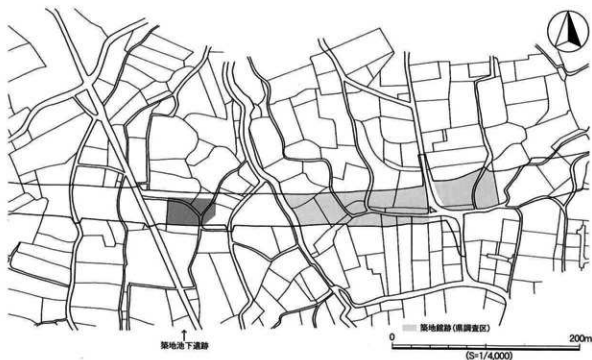
### 1 調査の契機と経過

昭和47年に建設省九州地方建設局熊本工事事務所（現：国土交通省九州地方建設局熊本工事事務所）は、玉名市街を走る一般国道208号線と周辺地域の交通混雑の緩和、交通安全の確保等を目的として、玉名市寺田～岱明町開田まで総延長8.5kmを計る玉名バイパスの建設計画をとりまとめた。これは荒尾・玉名地域間の所要時間短縮と共に地域間交流の活発化、地域経済の活性化に影響し、また、九州新幹線の新玉名駅への主要なアクセス道路としても位置づけられている。

玉名市では、これまでに柳町遺跡、吉丸前遺跡において玉名バイパス建設に伴い路線内の発掘調査を実施しており、その後の工事によって、玉名バイパスは寺田から立願寺までの区間は開通している。そのような中で、国土交通省九州地方建設局熊本工事事務所より、埋蔵文化財の試掘確認調査の依頼が平成19年になされた。それを受けて県教育庁文化課により現地踏査が行われ、その後、平成19年12月17日～20日まで試掘調査が実施された。



第1図 玉名バイパス路線と調査位置図



第2図 調査地周辺地籍図

県文化課による試掘の結果、溝状の落ち込みが確認され、古代の須恵器（坏）が良好な状態で出土した。この試掘調査の結果から、本調査の必要性が協議されるなかで、調査範囲を決定するために、再度、トレンチを設定して、遺構の広がりなどを把握するための追加の試掘調査が平成20年6月に行われた。そして畦畔と思われる遺構、及びそれに伴う溝と推定できる遺構が確認された。これらは遺物（土師器・須恵器）から中世と判断され、このようなことから当遺跡は古代から中世にかけての遺跡と推定された。

そして、当地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲に含まれていなかったが、試掘調査の結果埋蔵文化財が発見されたため、その範囲については「築地池下遺跡」として新たに認定され遺跡地図の変更が行われた。

これらの試掘調査により遺物・遺構を確認したため、今後は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲に含まれるため、工事に先立ち、文化財保護法第94条に基づく通知が必要となり発掘調査が必要となった。

これらの結果をふまえて、県文化課により発掘通知（文化財保護法第94条）は、平成20年9月3日国九整熊工事第267号で実施され、発掘調査を実施する旨が回答された。発掘調査の通知は、平成21年2月16日付教文490号で通知されている。

その後、国土交通省との協議において、発掘調査業務は民間委託することとなり、民間委託の方法については県文化課と協議することとなった。

工事等の設計に合わせて調査面積を1160㎡と決定し、国交省と玉名市と契約して、平成20年11月19日から発掘調査を開始、同年3月17日に調査を終了した。また、翌21年度に出土遺物等の整理作業を開始して、報告書作成にあたった。発掘調査から整理作業に至る組織は以下のとおりである。

## 2 調査の組織

発掘調査（平成20年度）

事業主体：国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所

調査主体：玉名市教育委員会

調査責任者：教育長 菊川茂男

調査総括：文化課長 中山富雄

調査庶務：文化財係長 安田信孝

主任 田中康雄

主事 永野摩美子

調査担当：主任 藪父雅史（監督員）

株式会社 九州文化財研究所（発掘調査業務受託）

発掘調査員：鮫島伸吾・宮崎 拓（九州文化財研究所）

現場作業員：荒木富士子、生森 隆、岩井 由、大森 久、坂口国広、高田由美子、田尻良雄、

鐘 龍介、土山知代恵、中島徹郎、中島明子、野口栄一、本田道男、松村利男、

宮本善治、村本生六、村本多茂美、森川眞男、吉田成文（五十音順）

調査指導：村崎孝宏（熊本県教育庁文化課調査第一係長）、長谷部善一（同参事）、亀田学（同主任学芸員）、

稲葉一文（同文化財保護主事）

整理作業、報告書作成（平成21年度）

事業主体：国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所

調査主体：玉名市教育委員会

調査責任者：教育長 菊川茂男（平成21年11月27日まで）

職務代行者教育次長 前田敏朗（平成22年3月29日まで）

教育長 森 義臣（平成22年3月30日まで）

調査総括：文化課長 中山富雄

調査庶務：文化財係長 安田信孝

主事 永野摩美子

報告書担当：主任、藪父雅史

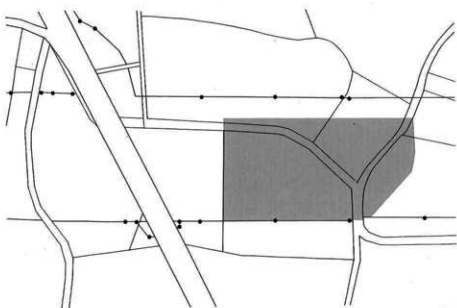
調査員 古閑敬士

整理作業員：五野富美子、権藤 功、嶋村ひとみ、坂崎郷子、早川イツエ

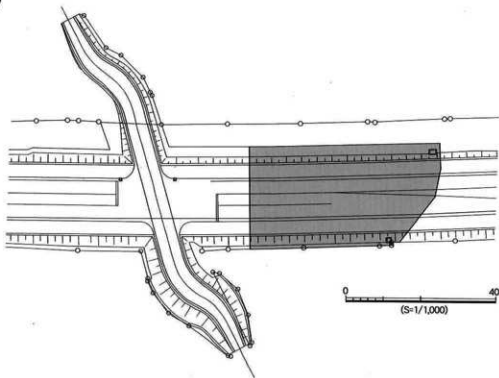
## 第2節 調査の方法と経緯

### 1 調査の方法

今回の調査面積は1,160㎡である。基本的に近現代の耕作土であるⅠ層と、近世の耕作土及び包含層に相当するⅡ層をバックホーによる掘削を行ったが、底面にて遺構が検出される可能性がある場合には、人力で除去を行うこととした。



0 40m  
(S-1/1,000)



0 40m  
(S-1/1,000)

第3図 調査区位置図（工事前・工事後）



第4図 調査区グリッド配置図

特に東側の微高地は、薄い耕作土の直下に遺構面が露出するため、人力により掘削した。また、中世の遺物包含層であるⅢ層以下、及び各遺構については、人力で掘り下げを行った。

グリッドは、公共座標基準点を用い、国土座標に合わせて10m×10mのグリッドを東西方向にA～F、南北方向に1～4の番号を付けて設定した。また、調査区内の現況地形が南西側にかけて傾斜し、何筆かの田畑によって段差があり、土層堆積も複雑である可能性があった。そのため、調査区南北の中央付近と東西二箇所に大ベルトを設定し、このベルトは表土剥ぎの段階から、地表面より残し、土層のつながりを観察するものとした。

遺構と判断されたものは「S001」というようにS番号を付けて遺構掘削、図面作成、遺物取上を行った。実測作業は、全体の遺構配置図を1/500で作成し、それぞれの遺構は、基本的に1/20とし、平面図と断面図を作成した。また必要に応じて1/10で実測を行った。写真撮影は、35mmカメラ、中判カメラを用い、遺構検出状況・土層断面・完掘状況の他、適宜遺物出土状況が必要な箇所を撮影した。空中写真の撮影はラジコンヘリ及び実機のヘリコプターにより撮影を行った。

なお、西側の未買収地においては、平成21年度の12月に確認調査を行い、遺構は確認されなかったが、包含層の続きがある範囲においては、包含層の人力掘削と記録作業を行っている。

## 2 調査の経過・日誌抄録

平成 20 年

- 11月 6日 現地にて文化課職員（安田係長、田中、蟹父）と九州文化財研究所（鮫島、宮崎氏）とで事前協議を行い、調査範囲や排土置場、表土剥ぎ及び以後の工程を確認する。
- 11月 19日 調査前状況の写真撮影及び地形測量。周辺の踏査を行う。
- 11月 20日 表土剥ぎ開始（近世の包含層までを重機により掘削する）～26日まで
- 11月 21日 排水用のU字溝撤去（作業員2名）
- 11月 26日 現場事務所、作業員休憩所、倉庫のプレハブ設置。表土剥ぎ終了。
- 11月 28日 作業員出発式。安全教育のあと、午後から人力掘削開始。調査区壁面の清掃作業。
- 12月 1日 表土剥ぎ後の平面清掃
- 12月 2日 表土掘削の土量計算のための寸法測定。試掘トレンチ埋土の除去。
- 12月 3日 調査区内グリッド杭の設置。東側よりⅠ層掘削
- 11月 28日 午前中、新規入場者安全教育。午後から掘削作業開始、調査区壁面の清掃。
- 12月 1日 調査区東側の平面清掃。調査区の区画は土層観察ベルトによる区画に沿って1～6区とする。
- 12月 2日 表土掘削時の寸法測定。5区・6区は、微高地の基盤層と考えられる。黄褐色粘土層の上層はすべて近現代の耕作土と判断。
- 12月 3日 遺物は近代の陶磁器に混在して、弥生土器、須恵器、中世の土師器など少量確認。
- 12月 4日 5区はⅠ層の掘削をほぼ完了。5区についてはⅠc層（水田床土）の遺物出土状況撮影。遺物は鉄滓、切片が少量出土し、その周囲に焼土粒子が散在。
- 12月 5日 雨により冠水したため、10時まで排水作業。Ⅱ層から近世の陶磁器が出土。
- 12月 8日 雨天のため、掘削作業は午前中のみで終了し、第2回安全教育を行う。
- 12月 9日 午前中、排水作業。2区はⅡ層を完掘。
- 12月 10日 Ⅰ層をほぼ完掘し、6区南端部に土坑と見られる遺構の輪郭をⅠ基のみ確認。
- 12月 11日 6区の清掃の結果、土坑などの遺構Ⅲ基が確認された。上面から弥生土器が出土。
- 12月 12日 E3.E4グリッドの遺構検出部分を1m拡張。
- 12月 15日 D3.D4グリッドのⅠ層掘削。
- 12月 16日 D3グリッドのみにおいてキャクピラ痕による攪乱が著しい。A3～C3グリッドの中央部に土層確認のためトレンチの掘削。
- 12月 17日 西南戦争のものと思われる銃弾や石炭の碎片があり、近代以降の層と考えられる。
- 12月 18日 Ⅱ層から中世の遺物が多く出土しているが、近世の遺物が混在している。
- 12月 19日 E3.E4グリッドの遺構検出。土坑と考えたのは西側がやや広がることが判明。円形もしくは楕円形の竪穴住居の一部と考えられる。
- 12月 24日 B3.C3グリッドにおいて溝遺構Ⅱ本とPit1基を確認。
- 12月 25日 B1.B2グリッドの旧地形は北側が高く、南側が低くなる傾向を確認した。



12月26日 B3.C3グリッドのトレンチ掘削により、溝の断面を確認。年末年始に備えて調査区および事務所の養生。

平成21年

- 1月6日 B3グリッドのⅢb層は完掘。C3.C4グリッドベルトの土層断面を撮影後実測。
- 1月7日 溝遺構の一部を検出に入る。
- 1月8日 溝遺構(S002)検出とS001(竪穴遺構)掘削。S001は調査区東側壁面を約30cm拡張し、平面形が方形であることが判明。須恵器の小破片が1点出土している。S002検出。
- 1月9日 S001とS002の検出およびS002掘削。S002は灰白色砂層と黒褐色粘質土層に分かれている状況が平面で確認。S001は弥生土器と5世紀代の須恵器蓋が混在。
- 1月13日 S002の掘削。埋土1層からは中世の遺物が出土。調査区西側の層序確認の為、試掘トレンチの掘削。下部の灰白色粗砂および礫層から弥生土器・打製石器が多数出土。
- 1月14日 S002掘削。埋土はすべて流水による堆積である。溝の掘り返しが少なくとも2回行われたと考えられる。現在確認される遺構2面はいずれも時期は中世と考えられる。
- 1月15日 S002掘削およびサブベルト土層断面実測。
- 1月16日 S002掘削。埋土1層から13世紀代の土師器小皿ほか、青磁碗出土。
- 1月19日 S002掘削。最下部では粘土層が堆積し、植物依存体を確認。S002の遺物出土状の撮影。残存状況の良いものは、瓦器碗と土師器小皿。龍泉窯系青磁の小片が少量見られる。
- 1月20日 S002を完掘、撮影。C2グリッド-SWにおいて遺構底面より13世紀代とみられる完形の土師器小皿が出土。
- 1月21日 C3グリッドにおいて遺構の輪郭が確認できる。
- 1月22日 Ⅲc・Ⅲd層ともに中世の土師器・瓦器の小破片が主である。雨天により現場作業は午前中で終了。
- 1月23日 Ⅲd層直下において溝遺構(S004)を確認。Ⅲc層掘削。西側になるにつれ遺物の出土量は少なくなる。
- 1月26日 D2グリッドから石鍋、鉄器(刀子)など残存状況の比較的良好な遺物が出土。
- 1月27日 S004の掘削。Ⅲc層掘削により西側の地形が低くなる傾向がみられる。
- 1月28日 Ⅲc層からは12～13世紀の青磁・白磁・土師器などの土器類のほか10cm弱の鉄滓が2点出土。C3グリッド-SEにおいてS004と重複関係にある小穴(S006)を検出。
- 1月29日 雨天のため、現場作業は中止。午後より協議を行う。
- 1月30日 S004掘削と西側のⅢc層掘削。S004は北側にⅢd層をベースとした黒褐色粘土が堆積。瓦器碗が数点確認される。
- 2月2日 S004掘削。S004はやや北側に伸びることを確認。C3-SEにおいてS004と重複する土坑2基を確認。いずれもS004より古いと考えられる。
- 2月4日 排水作業。S004完掘。

- 2月 5日 III e層からは糸切りの土師器小皿が出土。III c層からIII e層にかけて出土土器の時期に大差はみられない。
- 2月 6日 S001-S009～012の掘削、S002・S004のベルト掘削とIII e層掘削。西側(B2・C2グリッド)のPitとして、S009～013を検出。S010は自然の落ち込みと判断し、削除。柱穴とは考えられず、性格は不明。S008から弥生土器の壺口縁部が出土。
- 2月 9日 S001・S004掘削およびPit群の検出・掘削。III e層から鉄滓が出土。1点は椀型滓。
- 2月10日 空撮前の清掃(空撮は明日へ変更)。S001の平面確定。
- 2月11日 調査区清掃の続きを行った後、空中写真撮影。
- 2月12日 A1～C1グリッドをサブベルトに沿って東西トレンチ掘削。空中写真撮影について天候状況の都合から一部のカットの再撮影。
- 2月13日 C2グリッドのサブトレンチ出土の土器はローリングを受けているため自然流路に伴うものか。
- 2月16日 D1グリッドにおいて自然流路と見られる落ち込みから、須恵器の坏が良好な状態で出土。落ち込みの壁際から遺物が多く出土する景行が見られる。
- 2月17日 C2グリッドにおいてV層から土師器鉢形出土。
- 2月18日 自然流路の堆積土として、時期により古代の遺物を包含する層をIV層、弥生時代～古墳時代の遺物を包含する砂層をV層とする。
- 2月19日 C2グリッドの土層検討によりC2～C3グリッドは中世の砂層が複雑に堆積することを確認。
- 2月20日 排水作業。砂層が崩落した箇所がある。C2グリッド試掘トレンチ断面において、溝状の落ち込みが確認。自然流路の流水によるもので人工的なものではない。
- 2月23日 午前中雨のため午後のみ現場作業。明日の現場説明会に備え、排水作業。現場事務所内において案内板設置、遺物展示準備等の作業。
- 2月24日 現場説明会、土壌サンプル採取。土壌サンプル採取は調査区西側の4カ所で行った。B2グリッド西側が壁面崩落のため、中世層のみの採取にとどめ、C2グリッドに地点を変更。現場説明会は午前と午後の2回行い、参加者は約50名。
- 2月25日 雨天のため現場作業は午後のみ。
- 2月26日 C2グリッドIV層掘削。遺物があまり出土していないため、主にスコップで掘削を行う。
- 2月27日 雨天のため掘削作業は中止。調査区壁面の土層断面実測のみ行う。
- 3月 2日 C2・D1グリッドのIV層・V層掘削。遺物の出土はほとんど無い。D1・D2グリッドにおいてS004がさらに深くなるのが判明。
- 3月 4日 午前中雨天のため掘削作業は行わず。協議して遺物・図面整理を午前中に行った。
- 3月 5日 C2区のIV層掘削、東西方向大ベルト・西側南北方向大ベルトの撮影、S001遺物取上を中心に行う。
- 3月 6日 C2グリッド南側からC3グリッドにかけて砂層(III e2～III e5層)の局地的な堆積が確認されている。10世紀代の須恵器碗が出土。平面プランが方形で竪穴住居と考えたが、

西側壁面は立ち上がりが緩やかであるため、土坑と考えられる。

- 3月7日 調査区土層断面実測を中心に行う。
- 3月9日 C3グリッドⅣ層・Ⅴ層掘削。S001は床面はベッド状遺構と見られる段差が西側と東側で確認。
- 3月10日 完形の器台1点のほか甕および脚台付甕の底部が5個体分確認。
- 3月11日 調査区清掃および、S001掘削。S001については、本日で完掘。支柱穴は東西方向に2本確認。C2グリッドにおいて杭2本を検出。いずれも残存長10cm程度である。出土レベルから近世以降の杭と考えられる。
- 3月12日 土層断面図の撮影実測。調査区全体の完掘状況撮影。
- 3月13日 現場作業は土層断面図の加筆。実測作業完了。
- 3月16日 金曜日の大雨により調査区全体が著しく冠水したため、排水作業。明日の空撮および完了検査に備え、崩落の程度の軽い部分のみ清掃。
- 3月17日 現場作業の完了検査。人力掘削土量の計算値は約238m<sup>3</sup>。完了検査後実機による空中撮影。

#### <協議書録>

##### 第1回（平成20年12月12日）

1. グリッド配置について 東西方向にA～F・南北方向に1～4の番号を設定。  
表土剥ぎ時の仮称とした1～6区の区割は遺物取上げでは使用しない。
2. 土層確認のため調査区の西部は10m、調査区中央部は5mごとに土層観察ベルトを設定する。
3. E4グリッドの遺構確認部分は調査区拡張を行う。
4. 調査区中央部、西側の掘削は土質の差異に留意し、1層ごとに掘削を行う。
5. 来週中に東側微高地の遺構検出を行い、その後西側中央部の掘削を開始する。また、調査区中央部の土層断面により確認される溝遺構2基については、今月中の完掘を目標とする。
6. E3・E4グリッドの遺構はサブトレンチにより断面確認を行う。（遺物からの時期確認）
7. II層以下の遺物の取上げは完形土器、特殊遺物を除きグリッド一括で行う。（出土層位は確実におさえる）
8. 日報は調査日報、業務日報ともに1週間分を翌週火曜日に提出する。

##### 第2回（平成20年12月19日）

1. 現状の工程確認。A3・B3グリッドのⅢb層まで掘削。当初Ⅲa～Ⅲb層は中世の遺物包含層と考えていたが、近世以降と考えられる。  
C3・D3グリッドは溝遺構の平面プラン確認に至っていない。今後Ⅲc層の掘削により検出する予定。  
E3・E4グリッドは平面形を検出。来週より掘削予定。
2. 調査区西側の遺構の有無を早めに確認する。（翌年1月20日頃までに確認）
3. C3・D3グリッド溝遺構についてサブトレンチ掘削を行う。（C3グリッド東西方向ベルト北側）

4. 調査区ベルトは掘削せず残す方向で進める。状況による。
5. 調査日報について、デジタルカメラのみの撮影も日誌に記載する。

#### 第3回（平成21年1月9日）

1. 調査の現況は昨日の段階で 近世の包含層掘削を完了し、調査区中央部の溝遺構（S002）を検出し、掘削を開始した。（近代及び近世の切り合いと思われる。）  
S002 完掘後、中世の包含層掘削にかかる予定である。
2. 灰白色粘土層上面が弥生時代の遺構検出面と考えられる。D1～D3グリッドから西側に行くにつれて深くなる。調査区西端部のレベルはまだ確認していない。来週中に西端部の深さを確認し、土量計算を行う。
3. 土量計算の基準とするため、T1・T4を灰白色粘土層を検出するまで掘削する。
4. 今後、包含層掘削の迅速化のため、遺物の少ない層は注意しながらスコープで掘削する。

#### 第4回（平成21年1月16日）

1. 今週は主にS002の掘削を行い、並行して調査区北西部のトレンチ掘削を行った。調査区西端部では、地表面から150～200cmの深さで砂礫層が堆積し、弥生時代の遺物が出土している。
2. 調査区西側を弥生時代の基盤層まで掘削した場合、人力掘削土量の総量が500m<sup>3</sup>を超えることが予測される。
3. S002掘削終了後、直ちに東側（D1～D4グリッド）の遺構検出を行う。
4. 変更契約に関しては、両者話を持ち帰り内容を検討する。
5. 来週の打ち合わせ時に、変更契約の内容を決定する。

#### 第5回（平成21年1月23日）

1. 1月22日時点で作業員人数 約480人を消化している。2月20日頃に契約人数を消化する見通しである。
2. 現在、中世第2面の遺構検出途中である。空撮及び地形測量は、中世第2面完掘時の状況を行う予定である。

#### 第6回（平成21年1月29日）

1. 作業員人数は1月28日時点で547人区消化しており、2月19日頃に750人区に達する見込みである。
2. 発掘調査の難易度が高い現状から、契約期間を3月19日に変更する案が安田氏から提示された。（掘削土量は変更なし）
3. 2の案について、九州文化財研究所は 社内に持ち帰り検討する。
4. 中世の文化面について 2月9日～10日頃に完掘する予定である。西側の遺物包含層の掘削を迅速に行う。

中世完掘時の人力掘削土量は、約 160m<sup>3</sup>の見通しである。今後の工程を考慮し 2 月第 2 週までに中世遺構の調査を完了する。

- 2 月下旬に土壤サンプル採取を行う予定である。中世の調査終了後、A-3N～C-3N グリッドもしくは A-2S～C-2S グリッドに横断トレンチを掘削し、採取地点を検討する。
- 今後層の名称変更が予測されるため、出土遺物の従来番号と新設番号の対応をとる。

#### 第 7 回 (平成 21 年 2 月 6 日)

- 本日の時点で S002, S004 をベルトの一部を除いて完掘。中世の遺物包含層は、来週月曜日までに完掘する見込みである。
- 2 月 12 日空撮予定。撮影内容は調査区全景、遺構部分接写、西側からの遠景 (玉名バイパスとの位置関係)、南からの遠景 (小岱山との位置関係) を基本とする。

#### 第 8 回 (平成 21 年 2 月 13 日)

- 今週は空撮準備を中心に行い、2 月 11 日に空撮を行い、一部を翌日に再撮影を行った。  
2 月 12 日より調査区西半分の トレンチ掘削を行った。中世面直下からは遺物は出土しない。自然流路が蛇行する状況が伺える。自然流路の最下層は、壁面崩落を防ぐため 土壤サンプリング直前まで掘削を見合わせる。
- 住民を対象とした現場説明会は 2 月 24 日に行う。時間は 10:30 と 14:00 の 2 回行う予定である。説明会までの間、遺構の輪郭が失われないよう配慮して掘削を行う。
- グリッドに沿って設定したサブベルトの内、西側は地点による変化が特に見られない為記録後掘削を行う。

#### 第 9 回 (平成 21 年 2 月 20 日)

- 今週は調査区中央部の IV 層及び V 層の掘削を行った。基盤層が東側から黄褐色粘土→灰白色粘土→にぶい黄褐色と変わるため、土層の判断は注意を要する。
- 自然流路の立ち上がり部分から、遺物が多量出土する。出土した遺物は原位置ではないが、磨滅が少なく移動距離は短いと考えられる。周辺の遺跡を考察する資料として考えられる。
- 来週の現場説明会の詳細について、説明会資料の文章内容、体裁の決定を行った。
- 土壤サンプル採取位置は、調査区北西部のトレンチで行う。B2 グリッドー SE 南壁を中心に行う。50 点を予定。2 月 24・25 日の日程。

#### 第 10 回 (平成 21 年 3 月 2 日)

- 先週に引き続き、古墳時代～古代の層 (IV～V 層) の掘削を行っている。水曜日以降は遺物が少なく、掘削深度が深いためスコップを用いている。
- 空撮 (2 度目) は来週前半行う予定。
- 成果品納入前に、図面の仮検査を行う。

4. サブベルトは掘削せず、現状保存する。

#### 第11回（平成21年3月9日）

1. 現状ではC3グリッドのIV層掘削の途中であり、C3グリッド南部を完掘下時点で掘削終了となる。掘削作業は3月11日までの予定。
2. 排土置場を重機で整形することは、設計上困難である。今後対応を検討する。
3. 現場の発掘調査完了検査は、3月17日に行う予定で調整する。
4. 成果品事前検査（図面関係）を3月12日と13日に行う。
5. 空撮（2度目）の日程は3月16日（月）の予定で調整する。

#### 第12回（平成21年3月12日）

1. 完了検査の方法について  
県の方法を玉名市教育委員会が確認し、検討する。その後、平均掘削深度計算又は排土整形土量計算による対応を決定する。

#### 第13回（平成21年3月13日）

1. 完了検査方法について  
調査の完了方法は、平均断面法によるものとする。
2. 空撮について  
3月16日（月）予定の空撮については、3月17日（火）に変更となった。

### 3 遺跡の公開と活用

#### (1) 現地説明会

発掘調査が進むにつれ、遺跡の全容が明らかになっていくが、当遺跡周辺では、築地の集落から四十九池にかけて散歩を行われる市民の方々が多く、調査が開始された当初から現場を見学に来られる回数が増えた。調査後半になって、S001から土器片が多数出土するに至り、時間的にも余裕がなかったが、主に地元住民を対象とした遺跡の説明会を行うこととした。築地地区の区長西川氏に相談したところ快諾され、説明会の日程調整と案内チラシの作成を行い配布することとした。日程は、作業の工程や天候等を考慮し、平日ではあるが平成21年2月24日（火）の午前と午後の二回行うことと決定した。

当日は、午前中がやや小雨模様であったため、プレハブにおいて出土遺物の展示を行った。まず、遺跡の概要をまとめた解説文を配布して、調査に至る経緯や周辺の遺跡、築地館跡、大野氏関連の歴史的な解説を行ったあと、現場へ移動して遺跡の内容、遺構の性格や遺物の出土状況を説明し見学していただいた。現場周辺の方々への案内のみであったが、翌日に改めて児童を引率しての見学者などもあり、合計して約50名の参加があった。

## (2) 遺物の展示公開

調査終了後は、整理作業に入ったが、接合して復元できた土器も数点あり、その状態で改めて展示公開を行うこととした。玉名市立博物館で毎年開催している「たまな発掘速報展」において、築地池下遺跡の遺物を展示した。これに関連して築地地区にスポットをあてるテーマとし、築地における中世以前の遺跡を紹介した後に、中世からは浄光寺跡を中心に築地館跡やその他周辺の中世居館を含めて、築地池下遺跡との関連した展示を行った（期間：平成21年11月13日～12月13日まで）。これについては2回に分けて市の広報誌へ掲載し、市のホームページやチラシの配布等で周知を行った。見学者は約1,600人であった。



現地説明会の様子



発掘速報展の様子

## 第Ⅱ章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡の環境

#### 1 地理的環境

玉名市は、熊本県の北部に位置し、市域の南西部は有明海（島原湾）に面している。市内のほぼ中央部を菊池川が流れているが、当遺跡は水系でいえば友田川の上流域になるため行末川水系に含まれる。以前の主要河川（菊池川）の流路は、市内中心部を經由して、友田川の流路を流れ、行末川と合流するようにして有明海に注いでいたと考えられており、その後、浸食や堆積を繰り返しながら現在の地形になったと推定されている。

築地池下遺跡の立地は、小代山から南側へ延びる低丘陵の裾部に位置し、標高は約22mである。地形の分類によれば行末川低地にあたり、河川の氾濫原であったと考えられる。この地点の地質は、更新世形成の低位段丘堆積物である岱明層上にあり、赤田層との変化地点に近い。岱明層とは、築地菊尾付近が模式地とされ、1～3cmの礫を含む砂礫層とされる。

調査地の東側の川は、『玉名郡村誌』によれば「浦田川」と書かれてあるが、現在は友田川と呼ばれており、この東側の丘陵上には中世の居館と推定されている築地館跡があり、この川は外掘的な役割があったものと想定される。遺跡の北側には、近世の溜池である四十九池が南北方向に2つ並んだ形状で存在する。友田川の流れはこの四十九池の南側の堤に沿って大きく折れ曲がるため、この部分については溜池工事と築堤の際に排水口と合わせて水流が替えられた可能性がある。遺跡一帯の旧地形は北側から南側へかけて緩やかに傾斜しており、北側の四十九池付近と遺跡との高低差は約4mである。現在、周辺はこの傾斜した土地を利用して段状に畑や水田となっている。

#### 2 歴史的環境

ここでは第5図の築地池下遺跡周辺の遺跡を各時代ごとに概観してみたい。なお、築地・山田地区を中心とする。

##### <旧石器時代>

玉名市内における旧石器時代遺跡は、小代山麓など数ヶ所で偶然に表面採集されて発見に至った遺跡がほとんどである。岱明町西照寺の「備中遺跡」からは、以前にナイフ型石器が採集されており、山田の「鎌峯遺跡」、「高岡原遺跡」からは発掘調査によって安山岩製の尖頭器が出土している。築地池下遺跡の西側に位置する「香掛遺跡」は石器などの原石（安山岩）が表面採集することができる地点として知られているが、本格的な発掘調査は行われていないため旧石器時代の遺跡としての詳細は明確でない。これらの原石は、別の産出地から持ち込まれた可能性もある。

##### <縄文時代>

縄文時代になると丘陵端部などに貝塚が点在し、低湿地においても遺跡が確認されている。周辺における貝塚をあげると、「尾崎貝塚」は、現在は専修大学附属玉名高等学校の敷地となっているが、阿高式石器が出土したとされている。「庄司貝塚」、「古閑原貝塚」もいずれも阿高式石器を中心とし、古閑原貝塚



からは、昭和 26 年の調査の際に炭化米が出土したことで知られている。

他に「浜田貝塚」、「保田木貝塚」、「繁根木貝塚」などがあげられる。

また「古閑遺跡」、岱明町の「目倉尾遺跡」からは早期の押型文土器が出土しており、「高岡原 J 遺跡」からは晩期の甕が埋設された状態で出土している。他に「菊ノ尾遺跡」からは縄文時代のものであると思われる凹石が出土している。「西田遺跡」は、以前に磨製石斧数点が出土し、附近からは花崗岩の巨石が 1 基あり支石墓との見方がなされているが詳細は不明である。

#### <弥生時代>

現在のところ弥生時代前期の遺跡は少ないが、天水町の「斎藤山貝塚」からは鉄斧が出土している。弥生時代中～後期になると、丘陵上に多くの集落、墓場が形成されるようになっていくが玉名市内の中でも境川兩岸一帯の丘陵上、特に築地周辺は多く中～後期の遺跡が集中している。

中期では「古閑遺跡」で住居跡と思われる遺構が確認されており、祭祀的な要素の強い土製勾玉や脚部の長い高坏、丹塗土器などが出土している。他に黒鬘式の土器が多数出土し、中期と思われる住居跡が確認されているのは「南出遺跡」がある。

「五郎丸遺跡」は以前に大形甕棺も確認されているが、近年の調査では、後期の住居跡が 3 基検出されていることなどから、弥生時代中期～後期にかけての集落跡と考えられる。

甕棺が出土している遺跡は他に「菊ノ尾遺跡」があり、小児用甕棺が 2 基確認されている。また「東南大門遺跡」からは、石剣を伴う大小 40 基以上の甕棺墓群や大型の木棺墓などが確認されており、それらを囲むような大型の溝からは大量の土器が出土している。また「年の神遺跡」からは、甕棺内からゴホウラ貝製の腕輪が 7 点出土している。

後期になると大小の集落が分布するようになり、「蓮華遺跡」、「築地東遺跡」、「築地市場遺跡」、「下前原遺跡」、「山下遺跡」、「大原遺跡」、「狐ん路遺跡」などから住居跡が確認され、「高岡原遺跡」からは小型仿製鏡が 2 点出土している。

#### <古墳時代>

付近の古墳としては、現在も確実に残存しているのはほとんどないが、「保多地古墳」は 4 基からなる古墳群で、うち 2 号墳は横穴式石室である。出土品は、金銅環 17 個、鉄斧 1 個、鉄鎌 1 個、坏蓋 3 個、碧玉 2 個、メノウ勾玉 1 個、小玉 10 個などがあり、現在、石室は、天井石など失われているが一部が復元され保存されている。

築地池下遺跡に近い「西の山古墳群」は、昭和 35 年の調査では 3 基の古墳が確認されており、うち 1 基は横穴式石室で、あとは箱式石棺であったという。しかし、その後の開墾に伴い古墳は解体され石材等も散逸している。古墳からは須恵器の長頸壺などが出土したという記録がある。「四十九古墳」も昭和初期まで石材が残っていたということが全容は不明である。「山下馬場古墳」も現在、墳丘は消滅している。

「保多地窯跡群」は、保多地古墳に隣接する須恵器窯跡で小岱山から延びる丘陵斜面に 5 基の窯が構築されている。昭和 32 年の調査時には 1～2 号窯は、床面のみ現存し風化が著しく、3 号窯は完全に保



第5図 周辺遺跡分布図

	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
1	築地池下遺跡	築地 池下	弥生～中世	包蔵地	本調査地
2	西の山古墳群	築地 西の山	古墳	古墳	1号竪穴石室か、2号横穴石室か
3	西の山遺跡	築地 西の山	古墳	包蔵地	羨基、内1個蓋付須恵器完形
4	池田遺跡	開田 不馬向	平安期	集落	青磁皿、土鈴、土師器出土
5	西田遺跡	山田 西田	縄文～中世	包蔵地	ぶどう畑開墾で発見
6	四十九遺跡	築地 四十九	縄文～中世	包蔵地	須恵蔵骨器1個出土
7	四十九古墳	築地 四十九	古墳	古墳	現在地点表示主体部不明
8	山田神社門前遺跡	山田	中世	散布地	
9	五郎丸遺跡	山田 下馬場	弥生	包蔵地	微高大地、他の弥生土器も伴出
10	築地那木野遺跡	築地 那木野	古墳	包蔵地	須恵器・土師器類を包含する
11	築地館跡 (田添館跡)	築地 陣内	中世	包蔵地	郡代直ふれの子孫跡に住む
12	八段遺跡	築地 八段	古墳	包蔵地	土師器、須恵器少量
13	狐ん路遺跡	築地 前畑	縄文～中世	包蔵地	平畑遺跡と一連
14	古閑遺跡	築地 古閑	弥生～中世	包蔵地	合口甕棺9基出土、弥生土器散布、鉄器
15	築地東遺跡	築地 東	弥生	包蔵地	石蓋土坑
16	蓮華遺跡・浄光寺蓮華院境内遺跡	築地 南大門	中世	包蔵地	本堂地下住居跡、弥生後期土器
17	浄光寺蓮華院跡閻白塔	築地 南大門	中世	石造物	大五輪塔2基並ぶ(市指定)
18	浄光寺南大門跡	築地 南大門	中世	寺社	寺跡より南約300m布目瓦多量出土
19	南大門窯跡	築地 南大門	古代・中世	生産	南大門付近700地下炉床あり
20	小路遺跡	築地	近世	包蔵地	寛永通宝数400個出土
21	平町遺跡	築地 平町	古代・中世	包蔵地	土師器、須恵器片分布
22	東南大門遺跡	築地 南大門	弥生～中世	包蔵地	弥生後期、土師器多量出土
23	今見堂遺跡	築地 今見堂	古代・中世	包蔵地	土群人骨1、五輪塔、宋銭、青磁、土師皿
24	築地市場遺跡	築地 市場	弥生	包蔵地	弥生土器多数出土
25	大原遺跡	野口 大原	古墳	包蔵地	住居跡4戸確認、箱石棺につく
26	大原箱式石棺群	野口 大原	古墳	埋葬	安山岩箱式石棺13基出土、12基移転復元
27	大原五輪塔	野口 大原	中世	石造物	風・空輪を失う、水輪に像あり
28	玉名平野糸里跡		古代～中世	生産地	
29	貴船遺跡	野口 貴船	古墳	古墳	1基発見
30	貴船東遺跡	野口 貴船	弥生	包蔵地	弥生土器片の1群出土
31	尾崎貝塚	野口 尾崎	縄文	貝塚	専大玉名高々庭、阿高式
32	尾崎遺跡	野口 尾崎	弥生後晩期	包蔵地	須恵器類、完形出土
33	貴船西遺跡	野口 貴船	弥生	包蔵地	弥生後晩期土器少量
34	下前原遺跡	下前原 正林	弥生	包蔵地	昭和32年発掘調査、鉄器をもつ
35	正覚寺跡	下前原 東原		寺社	跡地に千手観音を祀る
36	築地次郎国秀館跡	下前原 中屋敷	中世	包蔵地	大野庄領主居住
37	前原宗因の墓	下前原 陣内	中世	墓	築地国秀館跡内、安山岩自然石銘あり
38	下前原西遺跡	下前原 石町	古墳	包蔵地	須恵器片多数
39	浄幸寺跡	下前原 西屋敷	中世	寺社	跡地に薬師堂あり
40	塚原遺跡	野口 塚原	弥生	埋葬	中期、須玖系3基

第1表 周辺遺跡地名表

存されていたという。4～5号窯は所在のみ確認され内部状況は不明である。また須恵器の壺などが採集されている。

「西の山遺跡」や「八段遺跡」は古墳時代の包蔵地として周知されている他、「蓮華遺跡」からは古墳時代の住居跡が16基確認され、うち6基からはカマドが検出されている。このように集落や古墳が分布しているが、それぞれ古墳の築造時期などは明確ではなく前後関係が不明である。

#### <古代>

古代になると郡司である日置氏により玉名郡衙が整備され、現在の立願寺一帯を中心に官衙施設が造営されるが、山田付近でも郡衙に関連すると思われる遺構や遺物が出土している。また、蓮華遺跡からは古代の重弧文軒丸瓦なども出土していることなどから郡司の官舎（館院）があった可能性も指摘されている。

「四十九池遺跡」からは以前に須恵器の骨蔵器が出土しており、周辺に古代の墓城があったと考えられている。また、「香掛遺跡」一帯は、香掛の字名からも、道路（官道）沿いに香を掛けて休息する駅などの存在も想定されているが（田辺）、県文化課によって行われた発掘調査地（築地館跡）より、道路状遺構（波板状痕跡あり）が検出されており、時期は古代～中世と考えられている。

#### <中世>

平安時代末頃、玉名郡の荘園は、仁和寺領玉名荘、安楽寺領玉名荘、野原荘、伊倉別府、大野別府などが成立するが、それまで郡司であった日置氏は次第に没落していき、変わって勢力を伸ばしたのが紀姓大野氏であった。大野氏は、大野別府を本拠地として、肥後国で勢力を拡大しつつあった菊池氏とも連携していった。鎌倉時代になると、大野氏は地頭に任命され、元寇の際には博多の防衛にも参加していることなどが文書によりわかっている。大野別府の中でも、高瀬は海外貿易港として栄えるが、高瀬には菊池一族が移住し、高瀬氏を名乗るようになっており、そのためか大野氏は、現在の玉名市中から築地一帯を中心にして一族の居館を築いているようである。中でも拠点となったのが山城である「日嶽城」、その支城とされる「古城」であり、台地上には「築地館跡」など親族によって分かれて築かれたと考えられる居館が多く分布している。

「蓮華院浄光寺跡」は、現在の蓮華院誕生寺一帯にあった中世における寺院跡で、南北約350m、東西約250mの範囲を中心として九州地方でも有数の規模をもっていたと考えられている。

『東妙寺文書』によれば真言律宗の恵空により建立されたことあり、真言律宗の総本山である西大寺の末寺帳に肥後国内の寺院8ヶ寺と共に浄光寺も記載されている。

慶長9（1604）年の築地村の検地帳には、浄光寺6町7反の田畑と、塔頭として蓮華院の田畑1町2反弱と、浄堂院、東之坊、西之坊の居屋敷の記載があり、これからも広大な寺院であったことが伺える。

この浄光寺が西大寺系の寺院であった事を示すものに、「閔白塔」（玉名市指定重要有形文化財）と呼ばれる2基の五輪塔があり、現在も寺院跡に残存しているが、いずれも規模が大きく特に西側の1基は高さが2.68mを計り九州最大を誇るものである。真言律宗では、墓塔として梵字を刻まない大型の五輪

塔が特徴であるとして、かつての浄光寺高僧の墓塔であったと考えられている。

また、寺院の南大門も、『肥後国誌』には、門を開閉する音は玉東町の吉次峠まで響いていたと伝えられているため、壮大な門構えであったものと想像されるが、近年の発掘調査によって、南大門跡と推定される付近から鬼瓦が出土している。また、以前の本堂改築工事の際に、小仏像燭台などの鎮壇具が出土している。浄光寺は近世の頃に焼失し、以後荒廃していったものと考えられている。

「今見堂遺跡」は、三池往還沿いに広がる遺跡であるが、昭和29年の道路改修工事に伴って五輪塔の断片が多数出土し、少なくとも二体分の人骨も発見されているが、本格的な調査は行われなかったため詳細は不明である。また、工事現場に駆けつけた田添夏喜氏によって、この他に青磁皿片、土師皿5点、中国銭14点などが採集された。中国銭は「元祐通宝」、「政和通宝」、「天聖元宝」などが確認され、いずれも中国北宋時代に鋳造されたものが出土している(1)。今見堂とは字名であることなどから、当地には中世の頃に、寺院が建立されていた可能性があり、金銅製と考えられる小仏体が近隣の畑から採集されている。

「斧研製鉄跡」は小袋山の谷に位置し、炉壁片、ふいご羽口、鉄滓の散乱が認められ、明確な時期は不明であるが中世と考えられる製鉄跡である。

「狐ん路遺跡」は築地池下遺跡に最も近く、近年の調査で土師器の皿が数点出土している。

また、現在の山田日吉神社を中心に南北へ延びた道路の両側に白山十二坊が配置されている。坊とは寺院内の施設で、白山信仰の修験道が行われており、現在でも12箇所に石造物が残っている。この神社を中心にした十二坊が配置されている丘陵一帯が「山田神社門前遺跡」となっており、これまでに発掘調査の例がないため、明確な遺構などは確認されていないが、近年の確認調査の際に中世の土坑やピットが検出され土師器の皿などが出土している。

## <近世>

四十九池は、四十九池神社の西側にあり、近世に造られた溜池と思われる。

「浮田溜池」は、築地池下遺跡の西側1m先にあり、上ノ池、中ノ池、下ノ池の三段に連結した溜池で、近世に造られた県内を代表する大型の溜池である。坂下手永の総庄屋であった関忠之丞が、文化13(1816)年に中ノ池を造ったのが最初であるとされ、その後、上下が完成し、灌漑区域は15ヶ村となって全体で5千俵の米の増産となったとされている。この溜池への導水路として知られているのが、俗称「百間井樋」といわれる石組の暗渠で、水路の維持管理のため開口部(竪穴)が設置されている。この溜池の排水施設部分の一部が玉名バイパスの路線内にかかるため、工事に伴い平成21年度に「浮田溜池関連施設」として発掘調査を実施している。関連施設として、石畳、石積などが検出されており、これら全体を含めて当時の灌漑施設、土木技術を知る上でも貴重な資料となっている。

## 第2節 遺跡の層位と包含層

築地池下遺跡の立地は、花崗岩からなる小代山より南側へ延びる低位段丘に位置し、標高は約22mである。東側に友田川が流れているが、近世の溜池である四十九池や堤などができる以前は、この川の氾濫原であったと考えられる。よって、地理的には低位段丘上にあっても河川の氾濫原であり、この一帯に限っては低湿地帯に近い状況であったと想定される。

玉名市全体での土壌区分においても、当地は細粒質灰色低地土壌の堆積地帯であり、段丘上などの窪地にみられ、長年にわたり、地下水や湧水など水の影響を強く受けて生成したものとされる。また遺跡周辺の旧地形は北側及び東側から全体的に南側へかけて緩やかに傾斜していくが、今回の調査区では、北側と東側において橙黄褐色を呈したローム土が確認でき、この基盤層は調査区内の南西にかけて落ち込んでいき旧河道のような状況となって、低くなったところでは粘性土と砂層が堆積している。特に砂層は、西側にいくほど厚く堆積する傾向にあり、周辺の地形から、一端落ち込んでから東側において、また立ち上がっていくものと想定される。砂層の下位は礫層であり、川砂利のような小石が流されたように堆積していることなどからも、この窪地が旧流路であった可能性も考えられる。

東側のローム土層上からは、弥生時代の住居跡が確認されたが、上部は削平を受けており、検出面は、本来もっと高かったものと思われる。この弥生時代の面は、西側に落ち込んでいく部分でなくなり、旧流路状の落ち際に弥生土器が多く流れこんで状態で出土している。この流路内にも流れ込みの遺物は含まれるが遺物包含層といえる層は、この流路などが埋没した後から堆積している。

古代～中世の包含層が最も厚く堆積しているが、小片も含め全体的に中世の遺物が多く、古代の遺物は少量で、明確に古代と中世の間を分層できない。粘性が強くなる灰褐色土層にやや古代の遺物が含まれるようである。

これらの包含層は、遺物は磨耗しているものも多く、西側になるにつれて遺物の包含量が稀薄になっていく傾向にあり、やがて層の堆積が薄くなって消えていく。今回、その西端部までを調査した。以下、各層位の特徴をあげ、遺物から時期がわかる範囲までは書いている。

I 層 現代の耕作土。土質の差異により以下のように分層した。

【I a 層】 黒褐色土 (Hue2.5Y3/1) しまりやや強い、粘性強い。粗砂若干混じる。水田耕作土。

【I b 層】 褐灰色土 (Hue2.5Y4/1) ややしまる、粘性強い。粗砂少量混じる。水田耕作土。

【I c-1 層】 灰黄褐色土 (Hue10YR5/2) 固くしまる、粘性弱い。粗砂および2～3mmの小礫混じる。鉄分・マンガン著しく沈着する。床土層。

【I c-2 層】 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/3) 固くしまる、粘性弱い。粗砂および2～3mmの小礫がI c-1層より多く混じる。鉄分・マンガン沈着する。床土層。

II 層 近代の耕作土。土質の差異により以下のように分層した。

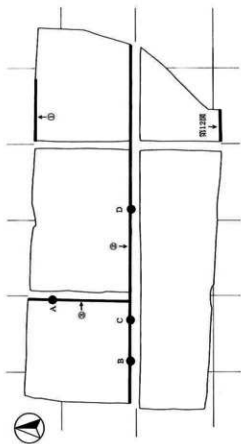
【II a 層】 暗灰黄色粘質土 (Hue2.5Y5/2) 固くしまる、粘性強い。粗砂および2～3mmの小礫中量混じる。鉄分・マンガン沈着する。

【II b-1 層】 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2) ややしまる、粘性強い。粗砂および2～4mmの小礫少量混じる。鉄分・マンガン沈着。

- 【Ⅱ b-2 層】 灰黄褐色土 (Hue4/2) ややしまる、粘性やや強い。粗砂および 2～4mm の小礫少量混じる。炭化物若干含む。鉄分・マンガンやや多く沈着する。
- 【Ⅱ c-1 層】 にぶい褐色土 (Hue7.5Y5/4) 固くしまり粘性やや弱い。土器細片・炭化物少量含む。鉄分・マンガン沈着。床土層。
- 【Ⅱ c-2 層】 暗褐色土 (Hue7.5Y3/3) 固くしまる、粘性中。0.3～3cm の焼土粒子 (橙色 Hue5YR7/6)・炭化物多量混じる。鉄分沈着。マンガン著しく沈着する。
- Ⅲ層 Ⅲ a～Ⅲ b 層は近世～近代の耕作土。Ⅲ c～Ⅲ e 層は砂の自然堆積と考えられる。土質の差異および包含する遺物の時期により以下のように分類した。
- 【Ⅲ a 層】 褐色粘質土 (Hue10YR4/4) ややしまる、粘性強い。土器細片、炭化物若干含む。鉄分・マンガン沈着する。石炭の碎片・鉄礫玉などが出土し、近代の耕作土と考えられる。
- 【Ⅲ b-1 層】 灰黄褐色砂質土 (Hue10YR6/2) 固くしまり粘性弱い。2～4mm の小礫少量混入。マンガン沈着する。近世の耕作土。
- 【Ⅲ b-2 層】 明黄褐色粗砂 (Hue10YR6/6) 固くしまる、粘性弱い。2～3mm の小礫少量混じる。マンガン沈着。近世の耕作土。
- 【Ⅲ b-3 層】 にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR6/4) 固くしまる、粘性やや弱い。2～3mm の小礫少量混じる。マンガン沈着する。近世の耕作土。
- 【Ⅲ c-1 層】 黄灰色粗砂 (Hue2.5Y4/1) しまりやや弱い、粘性弱い。2～5mm の小礫少量混じる。焼土粒子、炭化物少量含む。鉄分・マンガン著しく沈着する。中世の遺物包含層。上面は S002 の検出面。
- 【Ⅲ c-2 層】 褐灰色粗砂 (Hue10YR5/1) しまり強い、粘性弱い。2～5mm の小礫中量混じる。焼土粒子・炭化物含む。鉄分・マンガン著しく沈着する。中世の遺物包含層。
- 【Ⅲ d-1 層】 黒色粘土 (Hue7.5Y2/1) しまり、粘性強い。0.5～3cm の黄褐色粘土のブロック多量混じる。鉄分・マンガン著しく沈着。中世の遺物包含層。IV層をベースとしたブロックが混じっていることから耕作土の可能性も考えられる。
- 【Ⅲ d-2 層】 黒色粗砂 (Hue7.5Y2/1) しまり強い、粘性やや弱い。黒色粘土多量混じる。鉄分著しく沈着する。中世の遺物包含層。上面は S005 の検出面。
- 【Ⅲ d-3 層】 灰褐色細砂 (Hue7.5Y3/2) ややしまる、粘性弱い。2～4mm の小礫少量混じる。鉄分・マンガン沈着する。中世の遺物包含層。
- 【Ⅲ e-1 層】 褐灰色粗砂 (Hue2.5Y5/1) しまり弱い、粘性弱い。灰白色粗砂 (Hue10YR7/1) 多量混じる。鉄分著しく沈着する。中世の遺物包含層。上面は S009・S011～013 の検出面。
- 【Ⅲ e-2 層】 暗黄灰色粗砂 (Hue2.5Y5/2) しまり弱い、粘性弱い。2～7mm の小礫多量混じる。上部にマンガン著しく沈着する。中世の遺物包含層。
- 【Ⅲ e-3 層】 黄灰色粗砂 (Hue2.5Y4/1) しまり弱い、粘性弱い。2～3mm の小礫・黄褐色粘土のブロック少量混じる。マンガン沈着する。上面は S004 の検出面。
- 【Ⅲ e-4 層】 暗黄灰色細砂 (Hue2.5Y5/2) しまり中、粘性弱い。同色の粘土多量混じる。上部にマンガン著しく沈着する。9～10世紀代の土師器、須恵器を包含する。

- 【III e-5 層】 黄灰色粗砂 (Hue2.5Y4/1) しまり弱い、粘性弱い。2～10mmの小礫多量混じる。上部に鉄分沈着する。土師器・須恵器を包含する。
- IV層 古代の遺物包含層で水成堆積による粘土および砂層である。調査区中央部から西側にかけて厚く堆積し、粘土層より遺物が多量出土する傾向が見られる。土質の差異により以下のように分層した。
- 【IV a-1 層】 黒色粘土 (Hue7.5Y2/1) しまりやや強い、粘性強い。焼土粒子・炭化物少量含む。マンガン沈着する。古代の遺物包含層であり、弥生時代の遺物が多量混在する。
- 【IV a-2 層】 褐灰色粗砂 (Hue10YR4/1) しまり弱く粘性弱い。黒褐色粘土多量まじる。マンガン沈着する。古代の遺物を含む。
- 【IV b-1 層】 褐灰色粘土 (Hue7.5Y4/1) しまりやや強い、粘性強い。粗砂少量混じる。鉄分・マンガン著しく沈着する。古代の遺物を含む。
- 【IV b-2 層】 褐灰色粘土 (Hue7.5Y5/1) しまりやや強い、粘性強い。粗砂中量混じる。鉄分・マンガン著しく沈着する。古代の遺物を含む。
- 【IV c-1 層】 褐灰色粘土 (Hue10YR6/1) しまり中、粘性強い。同色の粗砂多量混じる。鉄分・マンガン著しく沈着する。古代の遺物を含む。
- 【IV c-2 層】 にぶい黄橙色粘土 (Hue10YR6/4) しまり中、粘性強い。褐灰色粗砂中量混じる。マンガン沈着。鉄分著しく沈着する。古代の遺物を含む。
- 【IV d-1 層】 褐灰色粘土 (Hue7.5Y4/1) しまりやや強い、粘性強い。粗砂少量混じり、2～4mmの黒褐色粘土ブロック多量混じる。鉄分・マンガン著しく沈着する。古代の遺物を含む。
- 【IV d-2 層】 黒褐色粘土 (Hue7.5Y3/2) しまり中、粘性強い。鉄分・マンガン著しく沈着する。粗砂少量混じる。古代の遺物を含む。土器は小片が大半であるが時期がわかるものについては7世紀代の坏が出土した。
- V層 花崗岩の粗砂および礫を主体とする層で、自然流路の氾濫層と考えられる。調査区西側に厚く堆積する。トレンチ壁面の崩落により記録作業は困難であったが調査区西端では約1mの厚さである。遺物は弥生時代～古墳時代の土器が混在する。土質の差異により以下のように分層した。
- 【V a 層】 灰白色粗砂 (Hue2.5Y7/1) しまり弱い、粘性弱い。一部に黒褐色粘土とのラミナが確認される。南側では粘土層がグライ化により青灰色を呈し、腐植を含む。鉄分・マンガン沈着する。弥生土器、古墳時代の土器を包含する。
- 【V b 層】 黒褐色粘土 (Hue7.5Y2/1) しまり中、粘性強い。2～5cmの黄褐色粘土のブロック多量混じる。鉄分・マンガン著しく沈着する。落ち込みの際の部分のみで堆積が確認される。
- 【V c 層】 礫層 灰白色粗砂多量混じる。A2・B2Gで確認した。自然流路の最深部のみ堆積する。弥生土器を包含する。
- VI層 基盤層。花崗岩風化土による粘土層である。土質の差異により以下のように分層した。
- 【VI a 層】 黄橙色粘土 (Hue10YR7/8) しまり、粘性強い。0.2～2cmの花崗岩礫少量混じる。マンガン沈着する。
- 【VI b 層】 淡黄色粘土 (Hue2.5Y8/4) しまり弱く粘性強い。混入物はほとんど見られない。保水性高く、VI a 層より粘性高い。

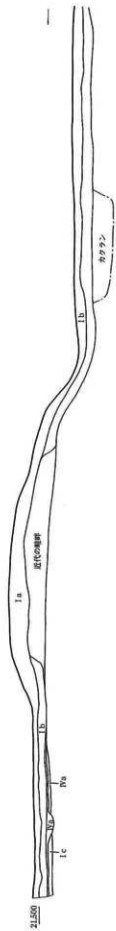




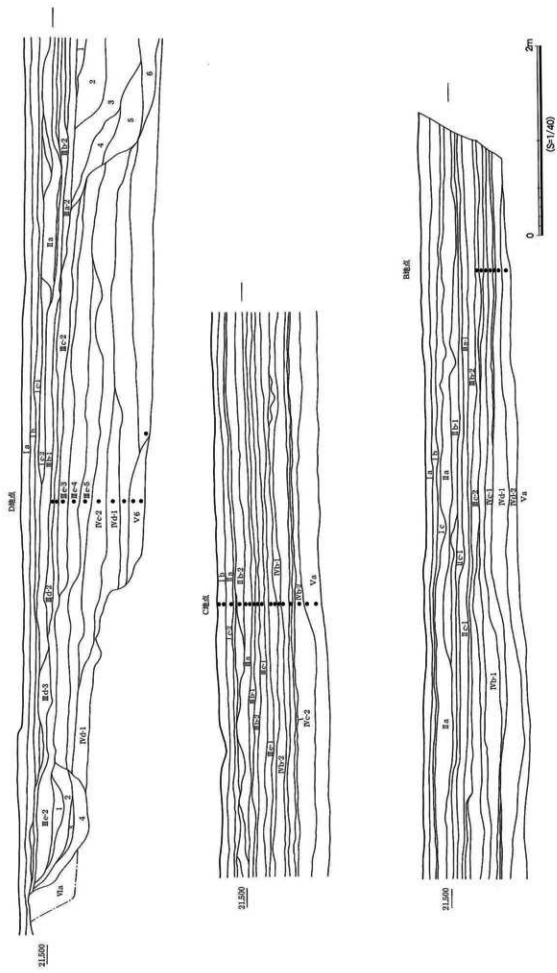
第6図 土層断面位置図及び土壌分析サンプル採取位置



第7図 土層堆積状況①(西-東)



第8図 土層堆積状況②-1 (東-西)



第9圖 土層堆積狀況②-2 (東-西)



### 第三章 調査の成果

#### 第1節 弥生時代の遺構と遺物

##### 1 遺構

###### ①竪穴住居跡(S001)【第12図】

このS001は、調査区東側(E3・E4・F3グリッド)において検出した弥生時代後期の竪穴住居であるが、遺構検出の段階では住居跡とは判断できなかった。当初、黒褐色を呈した層が明確に検出されたため、その広がりを遺構、もしくは落ち込みと認識して掘り下げを行っていった。

この黒褐色土層を1層として扱っているが、本来ならば別の遺構であった可能性もある。しかし、この黒褐色土層を掘り下げたところで、土質や土色の変化に注意していたものの、土層の識別が困難となり、さらに遺物が出土しはじめて、最終的に住居跡であることが判別したといった状況であった。1層と2層が住居跡の埋土としているが、言わば1層は住居跡が埋没した後に攪乱された状態である。この1層の広がりを平面での検出状況を記録から復元したのが第12図の範囲であるが、1層から出土した土器小片が集中した範囲とほぼ重なっている。

また、この1層からは古墳時代と考えられる須恵器の坏蓋が小破片となって、他の弥生土器小片とともに攪拌された状態で出土した。坏蓋は接合してみると、ほぼ完形に復元されたが、須恵器はこの1点のみで、他の弥生土器は、2層及び床面出土の弥生土器と接合できたものもある。このため、住居が埋没した後に上層が攪拌され、須恵器が混入したものと考えられる。

第12図の1層の遺物出土状況からみても、須恵器破片が出土した範囲は、西側の土器集中部に限られているようであり、この付近で割られたか、割れたものが混入したものとみられる。

この住居跡は、さらにS008と重複し、S008よりも古いと考えられる。住居跡のプランは南北長3.15m、東西長4.0mまでを検出し、検出面からの深さは0.3mである。東側および南側は調査区外に広がり、西側は攪乱により失われているため、全体の形状は不明であるが方形を呈していたものと考えられる。

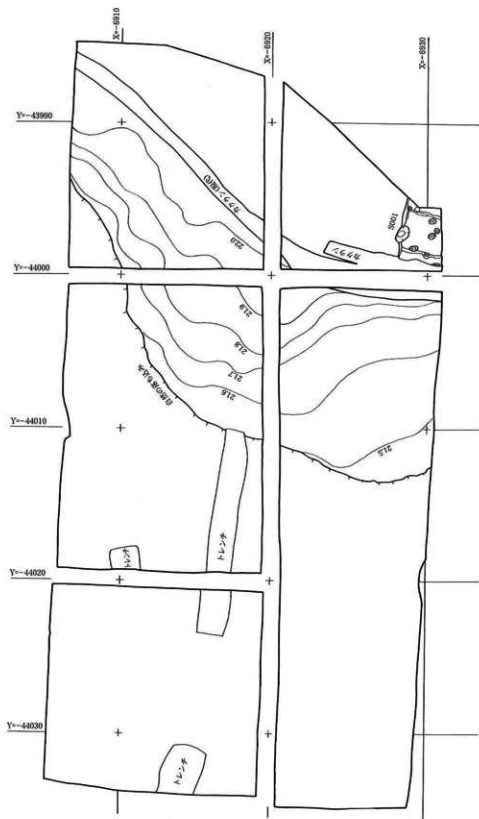
検出面はVIa層上面であり、調査区東側は農地整備により著しく削平されているため、本来の層の堆積は不明である。東側と西側にベッド状遺構があり、支柱穴は2本と考えられる。中央部に浅いくぼみが見られるが、焼土・炭化物はなく、炉穴とは考えにくい。床面はVI層の削り出して貼り床は確認されなかった。また、ほぼ床面上から、弥生時代後期と考えられる甕や壺、脚付甕、ジョッキ型土器、完形の器台などが出土した。破片は1層出土の土器と接合できたものもある。

いわば攪拌層を住居跡埋土の1層として扱っているが、住居埋没の過程において何らかの因果関係も考えられる。しかし、住居廃絶後に時間的空白があることや祭祀的な遺物を含んでいない。古墳時代の時期に住居跡と重なるように攪拌された意図は不明である。

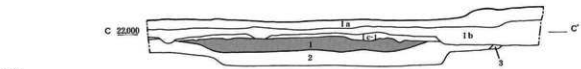
##### 2 自然の落ち込み【第13図】

調査区のほぼ中央から西側にかけては、自然の落ち込みが確認された。この落ち際は、北側ではやや北東へ広がるが、南北方向にあることから現在の友田川の流れとも関係があるように思われる。

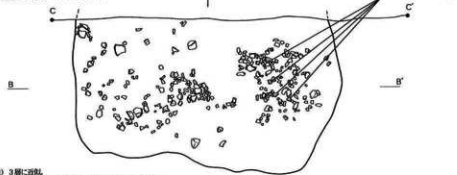
この落ち込み内の下層は、ほとんどが砂層の自然堆積であって、その上層に粘土層が堆積している状況である。自然流路の痕跡である可能性があり、弥生土器などが良好な状態で出土している。



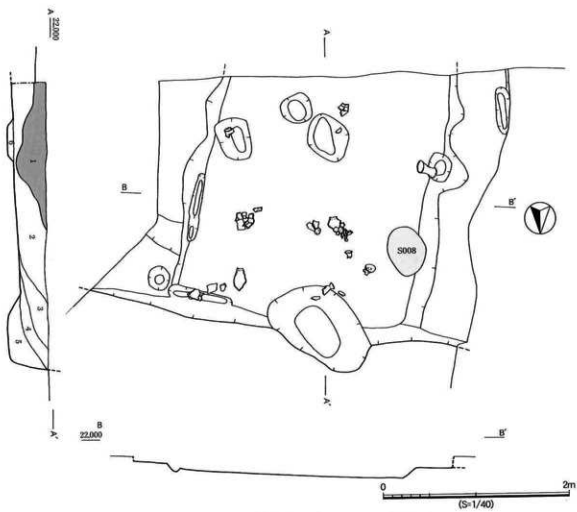
第11図 遺構配置図(弥生時代)



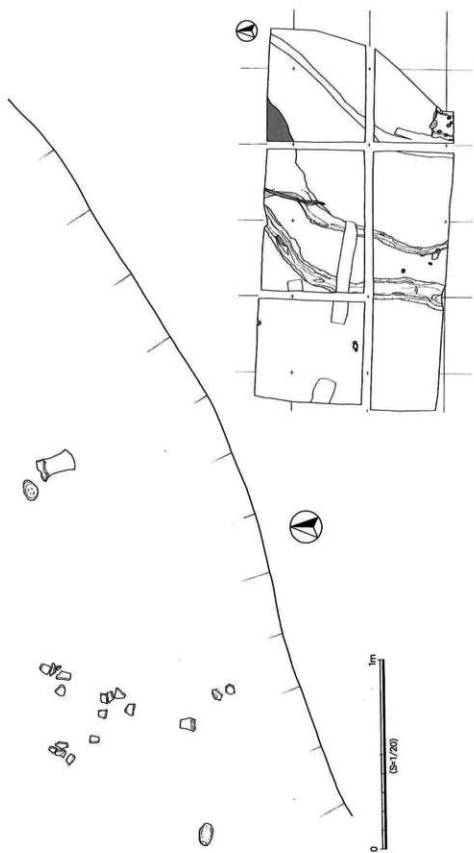
- S001
- 1層 黒色土 (Hb10Y2/1) しまり中、粘性中、下部に黄褐色土 (Hb10Y5/4) が少量混じり、ブロック状で広く、2層に跨る。上部にマンガン沈着する。遺物多量出する。焼土粒、炭化物含む。
  - 2層 黄褐色土 (Hb10Y5/4) しまりやや弱、粘性強、1~3cmの黒色土のブロック多量混じる。マンガン著しく沈着する。遺物出するが、1層と比べて少ない。
  - 3層 黄褐色土 (Hb10Y5/2) しまりやや弱、粘性強、0.5~1cmの黄褐色土のブロック多量混じる。焼分、マンガン沈着する。



- 4層 灰黄褐色土 (10Y8/1) 3層に混じ。
- 5層 黄褐色土 (10Y5/4) しまりやや弱、粘性強、黄褐色土のブロック多量に混入する。
- 6層 黄褐色土 (10Y5/2) しまり弱、やや粘性、黄褐色粘土粒を少量混入する。



第12図 竪穴住居跡 (S001) 実測図



第 13 図 自然の落ち込み遺物出土状況



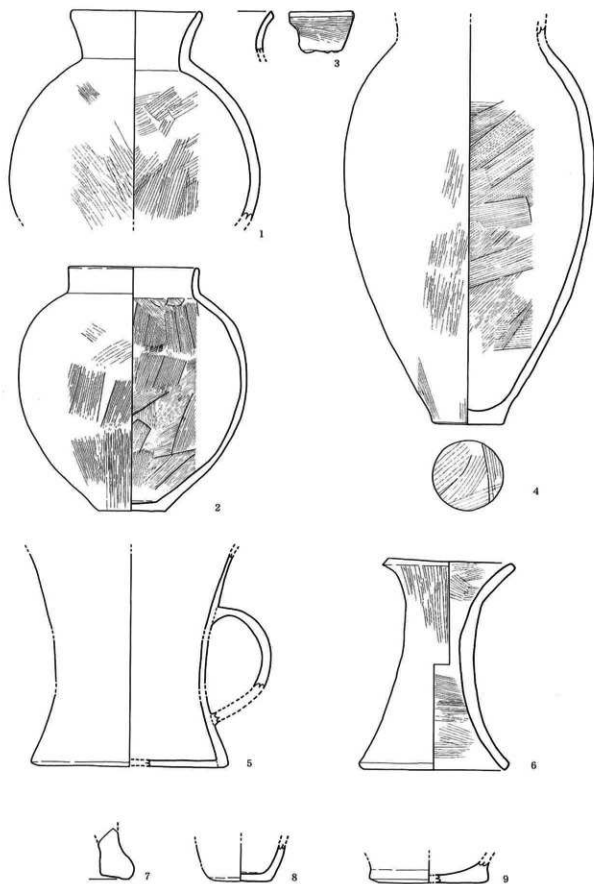
### 3 遺物

#### ①竪穴住居跡（S001-2層・床面出土土器）【第14・15図】

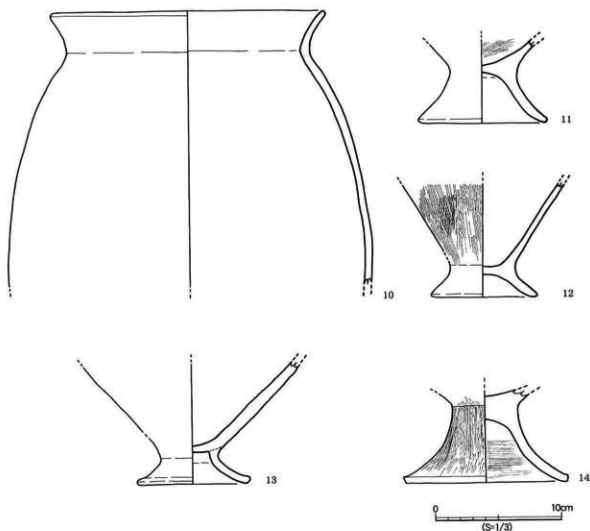
これらは2層より出土した土器で、後に攪乱を受けた1層で検出した土器と接合したものも数点ある。1は球形の体部を持つ壺で、頸部より上はほぼ直立しながら口縁部はわずかに広がる。全体に器壁が厚い。器面は体部で内外器面ともハケメ、口縁部でナデ調整を行っている。2は全体の器形が窺える資料で、平坦な底面から球形に大きく張り出し、頸部で強く屈曲し、短く直立した口縁部となっている。器面は全体にハケメ調整で、外面では部分的にハケメをナデ消している。3は壺口縁部で、外器面では斜め方向にハケメが残る。4はやや長胴で広口気味の壺と見られる。底部は平底。器表面は荒れて一部不明瞭だが、外底面まで含め全面を丁寧なハケメ調整を施している。外器面底部近くには黒斑が残る。5はジョッキ形で、器壁が3mmと薄く、また焼成も不良で脆いため、多くが破片の状態で出土している。ここでは接合した破片を図上復元している。復元底径は15.6cmである。体部ですばまり、底部と同程度の口径となる。幅の広い把手が付けられている。6は完形の器台である。上端は短く、下端へはなだらかに広がり、体部中央よりやや上位でくびれる。軸はわずかにずれるものの、器形には安定感がある。外器面は縦方向ハケメ、内器面は横方向のハケメが残る。7は雙脚台の一部と見られる。8は底径5.2cmの平底土器で、小型の壺と考えられる。全面をナデ調整で丁寧に仕上げている。9は底部資料である。立ち上がりの角度などから壺と考えられる。第15図10は長胴の甕で、頸部は「く」の字に近い屈曲を見せる。器表面の残りがあまり良くないが、全面ナデ調整で仕上げられている。11は甕底部で内底部分にわずかにハケメ調整の痕跡が残る。12は脚付鉢である。体部へは直線的に開いている。13も脚付鉢で体部へは直線的に開くが、12より角度が大きい。鉢底部の器壁が約1cmと厚手の作りである。14は脚部分のみの資料である。基部はなだらかで下部が大きく広がる器形である。底部の作りや体部への角度及び丁寧なハケメ調整から、脚付鉢の可能性が高い。

#### ②竪穴住居跡（S001-1層出土）【第16図】

1層は検出・出土状況でも触れたように弥生土器と須恵器が伴出しており、言わばS001を攪拌している。このため、1層と2層以下の間には時間差があり、少なくともS001埋土1層中にはS001以後の遺物が混じっている可能性があり、注意が必要である。なお、遺物観察表では出土遺構の項目にS001※と表記している。15は甕で、頸部を強く屈曲させている。16は口縁の内側に粘土を貼り付け、突出させている。器壁の厚さや口径の大きさなどから器種は鉢と見られる。17は直口の鉢口縁部である。器面は摩滅等により荒れ、調整は確認できなかった。18は雙口縁部で、外器面はハケメ調整が明瞭に、赤彩の痕跡がわずかに残っている。一方内器面は摩滅し残りは良くないが、ナデ調整と見られる。19は甕で、頸部を「く」の字状に屈曲させている。20は脚付鉢で、脚は低く大きく広がっている。鉢体部は砲弾のような器形を呈し、口縁はほぼ直立すると考えられる。21は脚付鉢である。脚部は直線的に大きく広がり、鉢底部から体部は直立して立ち上がる器形と見られる。22は甕の脚部で、復元脚径は11.1cmと大きい。23も脚径11.2cmで、全体に厚い作りから、器高等も大きな甕になるものと見られる。24は厚手の器台で、外器面に縦方向のハケメが施される。25は高坏である。器壁に厚みがあり、坏部は摩滅しているが、脚部はわずかなハケメ調整の痕跡が確認できる。26は高坏口縁部である。口縁下部で大

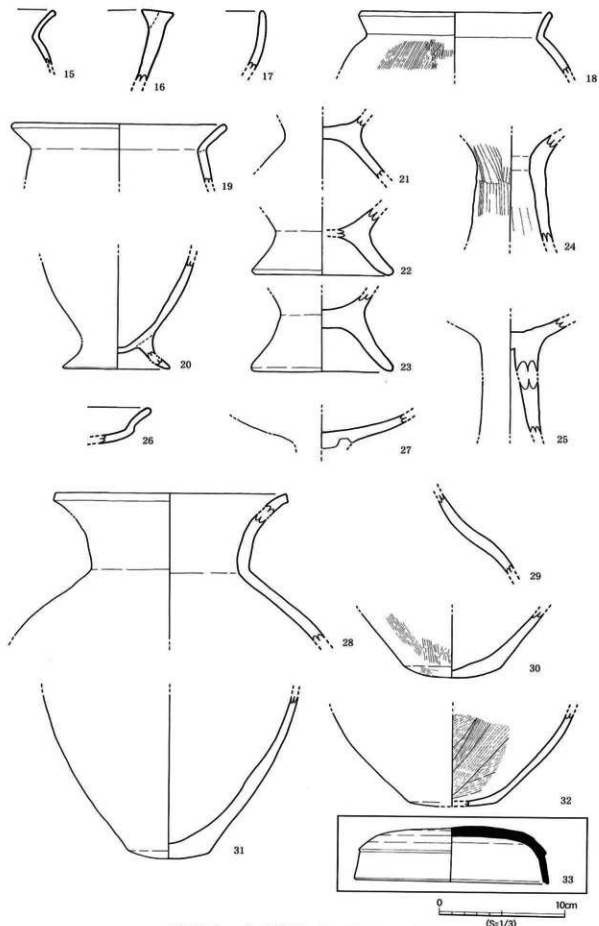


第 14 図 出土遺物実測図 (S001-2層①)



第15図 出土遺物実測図 (S001-2層②)

きく屈曲し、口縁端部は外反している。13は高坏で、下部は脚との接合箇所ではずれており、製作・接着の方法が観察できる。器面の磨滅が著しい。28はS008出土の弥生土器壺である。S008はS001及び埋土1層が埋まった後に掘り込まれたピットであるため、S001由来である蓋然性が高く、ここで扱う。口縁から肩部にかけての半分ほどがピットに埋設されたように2点出土しており接合した。取り上げ時、破損後すぐに埋められたため、破断面が摩耗していない状態が確認されている。肩が大きく張る壺で、頸部は直立し口縁下部から大きく広がる。破片としては大きい器面は摩耗し、調整等は確認できなかった。15はなで肩の壺で、弥生前期土器の特徴に近い器形である。内器面にハケメ痕が残る。16は丸底の底部資料で、器種は壺と見られる。底部と体部の境には区画の稜線がある。17は壺の底部と見られる。体部はなだらかに張り出し、底面は厚く、丸みのある平底を呈す。弥生時代後期末の土器の可能性はある。18は丸底の壺である。全体に器壁が薄く、内器面のハケメが良く残っている。外器面は摩滅しており、調整不明である。19は須恵器坏蓋である。接合によって、かなりの部分を復元できた。器高4.3cm。天井部はほとんど扁平で体部との境に鋭い稜を作り出している。稜から口縁部はわずかに開きながら下がり、口縁端部の内側には明確な段を持つ。調整は天井部外面のヘラケズリが稜近くまで広い範囲に施される。内器面には一部だが同心円状当て具痕が残る。口縁部周辺は回転ナデと見られる。



第 16 图 出土遺物実測図 (S001・1層)

また、焼成が甘く、やや軟質で焼け歪みがある。時期は九州ⅢA期註『牛頭窟跡群 - 総括報告書Ⅰ-』大野城市教育委員会 2008 年。出土状況は、1 層の他の土器と同じように 3～5 cm 程度に割れた十数片が多量の土器に紛れ、散開した状態であった。よって、S 001 の 1 層はこの時期に攪拌されたと見るのが妥当であろう。

### ③包含層出土の弥生時代の遺物【第 17 図】

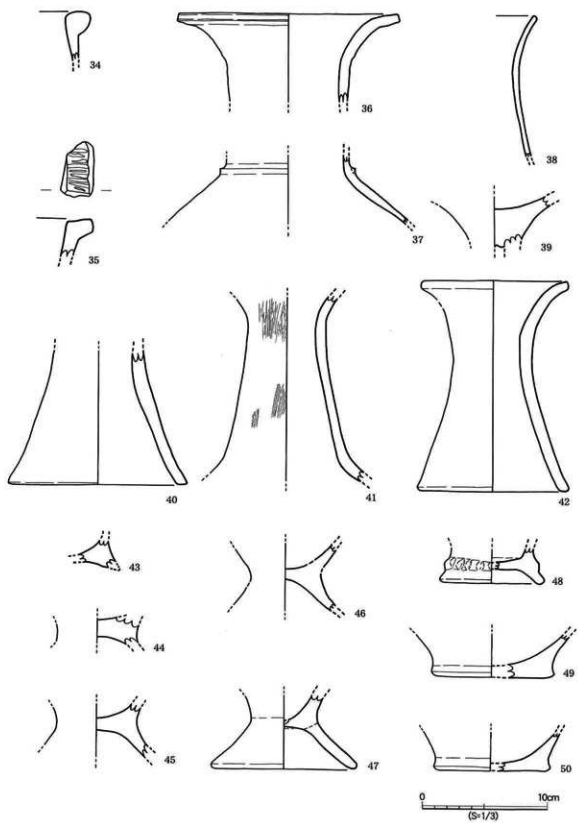
これらは包含層から出土した弥生土器を集めたものである。34 は攪乱層より出土した、甕の口縁部である。器形から弥生中期前半の土器と見られる。35 は弥生土器甕の口縁と見られる。幅広い口縁端部に放射状の沈線（暗文？）を刻む。Ⅲ e 層出土。36 は弥生土器壺の口縁部から頸部で、表土剥ぎ時にⅢ c 層から出たものである。比較的残りが良く、割れ口や器面の丁寧なナデ調整などを観察できる。

37・38 はⅣ c-1 層出土の弥生土器である。37 は壺肩部で、突帯を一条巡らせている。頸部以下、直線的に広がる。38 はジョッキ形土器の一部である。器壁が 0.3～0.5 cm とかなり薄く作られる。39 は高坏と見られる。坏部は肉厚で重みがある。破損して残りが良くないが、脚部分も 1 cm 以上の厚さがある。Ⅲ c 層から出土した。

40～42 は器台である。40・41 はⅠ b 層とⅠ c 層出土資料の接合、42 はⅣ a 層からの出土である。40 は器台の下半部である。Ⅰ 層からの出土であるが、S001 を検出した E 3 グリッドから出土しており、S001 由来の可能性がある。41 は器台体部で、上下の端部を欠く。脚部は中位では緩やかに開き、下端近くで大きく外反する。灰色系の暗い色調を呈する。42 は上端の一部のみを欠く完形の器台である。上端部は強く、下端は緩やかに開いている。くびれ部は体部中位よりやや上に位置する。端部の直径は上下でほとんど変わらない。

43～50 は底部資料である。うち 43～48 は甕脚部、49・50 は壺の底部である。43 は弥生中期土器の甕で、やや上げ底の脚台にも見える脚である。Ⅱ b 層から出土した。44 は甕の脚部である。底面は低い脚台器形と見られる。Ⅲ b-2 層から出土した。45 は後期の甕脚部で、比較的器壁が厚い。Ⅳ a 層から出土した。46・47 はⅣ 層から出土している。46 は内底面をやや広く取ってある。47 は脚部を丁寧なナデ調整で仕上げている。

48 はⅤ a 層から出土したもので、甕と見られる。底部と脚部の境に刻目突帯を一条巡らせている。49 はⅣ b-1 層出土。どっしりとした器形で、安定感がある。50 はⅢ e-3 層出土の底部資料で、器形・調整等から壺としている。



第 17 図 出土遺物実測図 (包含層・弥生)

## 第2節 中世の遺構と遺物

### 1 遺構

#### ①溝(S002)【第19図】

調査区中央部から西側(B3・C1～3・D1グリッド)にかけて検出した溝で、北東から南西方向に延びる。南北とも調査区外に続くものと考えられ、この溝がどこから始まって、どこへつながっていかなど全容は不明である。

調査区内では、長さ25.0mを検出し、最大幅3.4m、最深部の深さは1.1mである。北側でやや北東へ蛇行しているが、空撮写真でも分かるように偶然にも現代の田畑における畦畔と方向が重なっているため旧地形を生かした形状がその後の土地利用にも影響しているものと考えられる。

底面のレベルは北側が高く、南側が低いので、水流があったとすれば北側から流れていたのは間違いない。遺構の検出面はⅢc層上面であるが、南側では検出面からの深さが想定していたよりも深く、C-3グリッドでは120cmに及ぶ。

また、南側(B-3、C-3G)では砂層からなる自然堆積層に掘り込まれているため底面の判別が困難であった。底面は段状になる地点が2箇所確認できるが、これは溝を掘削する際に分担された作業区間の名残りで、作業に関わった人々の個人差によって段差ができてきている可能性も考えられるが、この溝の全容が明らかでないために何ともいえない。

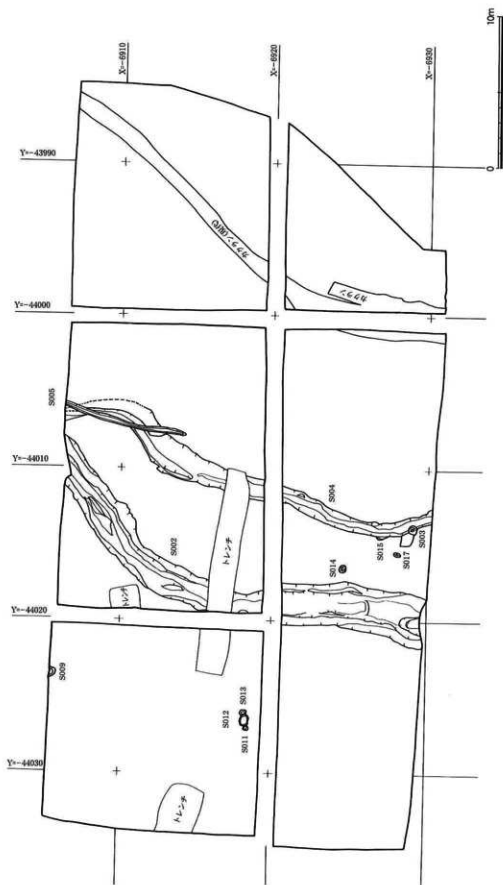
溝の埋土は流水による砂および粘性土の堆積が主である。地点により埋土の土質が異なるため、基本的には以下のように大きく4層に分層したが、各ベルトでは、それぞれの状況に応じてさらに分層している。

- 1層 遺物の出土はほとんどなく、小破片が大半である。
- 2層 土師器小皿が出土し、時期は12C代後半～13Cと見られる。
- 3層 南側で古代の須恵器および弥生土器が出土するが流水によりIV層・V層の遺物を巻き込んだことによると考えられる。
- 4層 底面に小礫が堆積する。C2グリッドにおいて底面近くから土師器小皿が出土し、2層から出土した土師器と時期に大差は見られない。このことから短期間のうちに埋没したと考えられる。埋土の大半は砂の堆積で、流速の速い水流に起因すると考えられる。北側の底面のみにグライ化した粘土層が堆積する。

遺構内から出土した遺物は、弥生時代以降の遺物が含まれ、土師器の皿、須恵器、瓦器碗、龍泉窯系青磁碗などが出土し、須恵器は荒尾産とみられる須恵器が含まれている。また、黒色土器の可能性もある碗も出土している。一部ではあるが上層から土師器皿、青磁が出土し埋土の上位、下位ともに13世紀代の遺物が出土する傾向から、この頃に、溝が埋没してしまっているものと考えられる。よって、溝が掘削された時期は13世紀頃かこの以前と思われる。

#### ②溝(S004)【第20図】

調査区中央部(C2～4・D1～2グリッド)において検出した。北東から南西方向の溝で、南北とも調査区外に延びると思われ全容は不明。調査区内では長さ25.3mを検出し、最大幅2.2m、最大深度1.0m



第 18 図 遺構配置図 (中世)

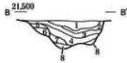
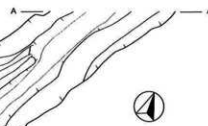


A 21,500



5000230

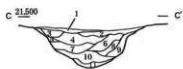
- 1層 1~2mの黄褐色土0ka75YR4/2 若干しまり、粘性も強びる。
- 2層 灰黄褐色土0ka75YR4/2 しまり強く、粘性強い、腐敗物少0ka75YR6/1を含む、植物遺体カーボンを含む。
- 3層 暗褐色土0ka75YR3/2 若干しまり、粘性も強、埋土2層同様、腐敗物少0ka75YR6/1を含む、下部にウミナガシロを呈する。
- 4層 黄褐色土0ka75YR3/2 しまり強いが、粘性強びる、土直下部にては若干は埋土4層色の砂を含む、下部に埋土を強く呈するラニナ層。
- 5層 暗褐色土0ka75YR4/0 しまり、粘性共に強い、部分的にグレイ化した粘土層。
- 6層 1~2mの黄褐色土0ka75YR6/0 しまり強いが、粘性強びる、埋土1層に強い。
- 7層 黄褐色土0ka75YR3/1 しまり強いが、粘性強い、暗褐色腐敗物より10cm以下の小礫多量混じる、粘土粒子少量含む。



5000230

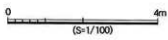
- 1層 暗褐色細砂0ka75Y4/1 しまり強い、粘性強い、2~4cmの小礫混じる、マンガンを著しく含む。
- 2層 灰白色細砂0ka75Y8/1 しまり中、粘性強い、5~8cmの小礫混じる、下部に黄褐色粘土(75YR3/1)がラニナに連続する、マンガンを著する。
- 3層 黄褐色土0ka75YR2/1 しまり強い、粘性強い、4cm以下の粗砂、小礫多量混じる、マンガンを著する。
- 4層 暗褐色土0ka75YR4/1 暗褐色細砂0ka75Y5/1のラニナ層、黄褐色05~3cmの黄褐色粘土のブロック少量混じる、腐敗物少量含む、マンガンを著しく含む。
- 5層 暗褐色細砂0ka75Y4/1 しまり強いが、粘性強い、黄褐色土0ka75Y2/1しまり中、粘性強い、ラニナ層、細砂は下部に比べて粒子が大きくなる、粘土にマンガンを著しく含む。
- 6層 暗褐色土0ka75Y4/1 しまり中、粘性強い、黄褐色細砂0ka75Y4/1しまり強いが、粘性強い、ラニナ層、細砂は5~10cmの小礫少量混じる、粘土は1~2cmの黄褐色粘土のブロック。
- 7層 黄褐色土0ka75Y3/1 しまり強いが、粘性強い、腐敗物少量含む、粘土分著する。
- 8層 灰白色細砂0ka75Y8/1 しまり強いが、粘性強い、下部に比べて粒子が大きくなる、下部に粘土分著しく含む、黄褐色土0ka75Y6/1しまり強いが、粘性強い、腐敗物少量含む、ラニナ層。

トレンチ



5000230

- 1層 東西ノルト1と同じ。
- 2層 東西ノルト2と同じ。
- 3層 暗褐色粘土0ka75YR4/1 ややしまり、粘性強い、腐敗物細中量混じる、粘土、マンガンを著する。
- 4層 黄褐色粘土0ka75YR3/1 ややしまり、粘性強い、腐敗物細中量混じり、下部にラニナが確認される、マンガンを著する。
- 5層 暗褐色細砂0ka75Y4/1 しまり中、粘性中、黄褐色粘土多量混じり、下部になるにつれて比率が少なくなる、下部に粘土分著する。
- 6層 黄褐色土0ka75YR3/1 しまりやや強い、粘性強い、粘土分著しく含む。1)と暗褐色細砂0ka75Y4/1 しまり強いが、粘性強い、1~2cmの黄褐色粘土のブロック多量混じる、ラニナ層。
- 7層 暗褐色土0ka75YR3/1 しまり中、粘性強い、腐敗物細中量混じる、下部に粘土分著しく含む。
- 8層 黄褐色粘土0ka75YR3/1 しまり中、粘性強い、5~10cmの黄褐色粘土ブロック多量混じる、また、暗褐色砂多量混じる。
- 9層 東西ノルト3と同じ。
- 10層 東西ノルト6と同じ。
- 11層 黄褐色細砂0ka75YR2/1 しまりやや強い、粘性強い、5~10cmの小礫、黄褐色粘土多量混じる、粘土粒子中、若干混じる、粘土、マンガンを著しく含む。



第19図 遺構実測図(S002)

である。当初、北側は調査区内で立ち上がると考えていたがIV層掘削により北側も調査区外に延びることが判明した。底面のレベルは北側が深く、南側が浅くなる。遺構の検出面はⅢ e-3層である。S005と重複し、S005より古い。

埋土は概ね3層に大分類されるがいずれも砂粒が主でそれぞれに大差は見られない。また、C2・D2グリッドのみにおいて最上層に黒色粘土の堆積が認められる。遺物の出土は少なく、土師器片のほか、瓦器碗が少量出土した。

北側にⅢ d層をベースとした黒褐色粘土が堆積し、それ以外の部分はほぼ全体に流水による粗砂が堆積している。

#### ③溝 (S005) 【第20図】

調査区北側 (D1～2グリッド) において検出した南北方向の細長い溝で、S004と重複し、S004より新しい。南側は調査区内で立ち上がり、北側は調査区外に延びる。長さ8.3mを検出し、最大幅0.3m、最大深度0.25mである。検出面はⅢ d-1層である。

埋土は1層のみで黒褐色粗砂 (Hue7.5Y3/1) しまりやや強い、粘性弱い。黒褐色粘土および3～5mmの小礫多量混じる。マンガン著しく沈着する。

この溝の性格は明確でないが、S004が完全に埋没した後で、それぞれの検出面の間にも堆積層があることから、直接的な関係はないと思われるが、やはり旧地形からの影響からか、落ち込み際に何らかの理由によって小溝が掘られたのであろう。上層が削平されたとすれば、深さや本来の溝の幅はもっと広がった可能性も考えられる。

#### ④土坑 (S015) 【第21図】

調査区南側 (C3グリッド-SE) において検出した。S004と重複し、S004より古い。長径0.68m、短軸は0.4m残存する。検出面からの深さは0.3mである。

埋土は2層に分類される。1層 下部に鉄分著しく沈着する。2層 上部に鉄分沈着する。

遺物はほとんど出土していないため時期は明確でないが層位的にも中世と考えられる。

#### ⑤土坑 (S016) 【第21図】

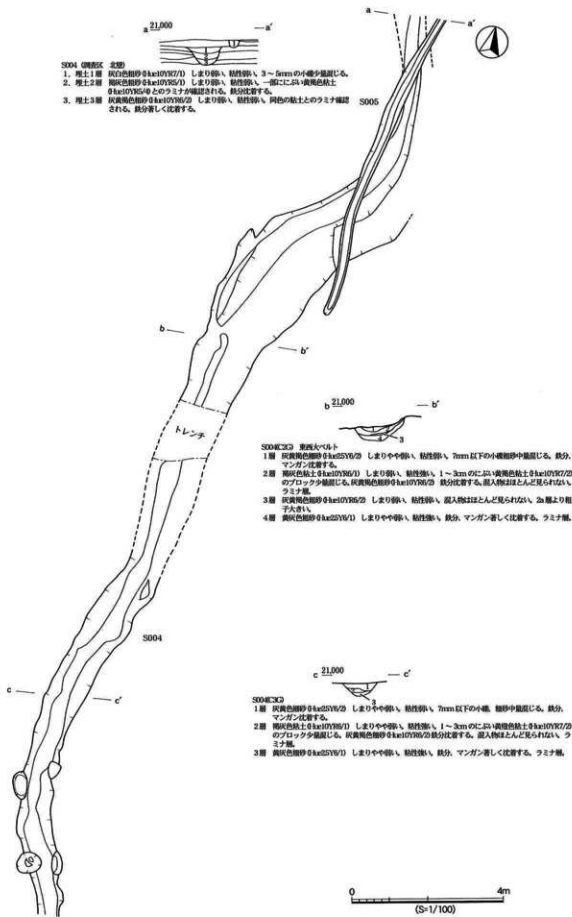
調査区南側 (C3グリッド-SE) において検出した。S004と重複し、S004より古い。大半の部分をS004によって失っているため規模は不明である。検出面からの深さ0.25mである。

遺物はほとんど出土していないため時期は明確でないが層位的にも中世と考えられる。

#### ⑥土坑 (S017) 【第21図】

調査区南側 (C3グリッド-SW) において検出した。他の遺構との重複はない。長径0.46m、短径0.29m、検出面からの深さ0.13mである。埋土は1層のみで焼土、鉄分、マンガンが沈着する。

遺物はほとんど出土していないため時期は明確でないが層位的にも中世と考えられる。



第20図 遺構実測図 (S004・S005)

⑦ピット (S003) 【第21図】

調査区南側 (C3グリッド-SE) において検出した。S004と重複し、S004より新しい。当初、攪乱の一分として認識したため、土層の詳細は不明である。長径0.65m、短径0.58m、深さ0.4mである。検出面はⅢe層上面と考えられる。遺物は土師器の小破片が出土した。

遺物はほとんど出土していないため時期は明確でないが層位的にも中世と考えられる。

⑧ピット (S007) 【第21図】

調査区南側 (C3グリッド-SW～C4グリッド-NW) において検出した。トレンチ削除により上端は削平される。土層断面から径0.75m、深さ0.2mと想定される。他の遺構との重複はない。検出面はⅢe-1層上面である。遺物はほとんど出土していないため時期は明確でないが層位的にも中世と考えられる。

⑨ピット (S011～13) 【第21図】

調査区西側 (B2グリッド-SW) において検出した。掘り込みが浅く、遺構としての認定に疑問が残るが、土質の差が明確であるため遺構として取り扱った。

寸法はS011が長径0.34m、短径0.3m、深さ0.04mである。S012は長径0.42m、短径0.32m、深さ0.04m、S013は長径0.7m、短径0.62m、深さ0.05mである。

3重重複し、S013がS011・S012より古いと考えられる。検出面はⅢe-1層である。

埋土はいずれも黒褐色粗砂 (Hue7.5YR3/2) しまり中、粘性中、黒褐色粘土極多混じる。焼土粒子、炭化物若干混じる。マンガン沈着する。微砂粒を含む。

遺物はほとんど出土していないため時期は明確でないが層位的にも中世と考えられる。

⑩ピット (S014) 【第21図】

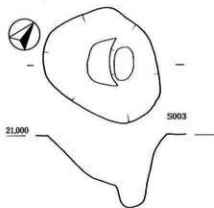
調査区東側 (E3グリッド-SW) において検出した。S001と重複し、S001より新しい。長径0.52m、短径0.41m、深さ0.25mである。検出面はⅥa層であるが農地整備による削平のため本来の層は不明である。時期は不明、中世か。

埋土は2層に分類される。1層 混入物はほとんど見られない。

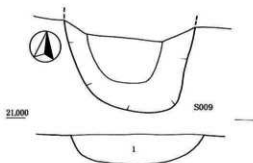
2層から弥生土器の壺口縁部が出土した。本来S001に包含されたものが攪拌されたことによると考えられた。

⑪ピット (S009) 【第21図】

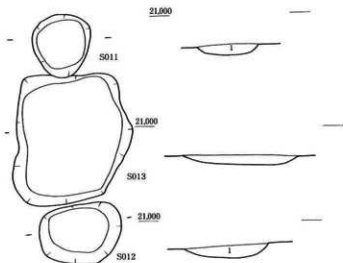
調査区北西部 (B1グリッド-SE) において検出した。北側は調査区外に広がる。東西に0.7mの径を確認できる。深さは0.25mである。他の遺構との重複はない。検出面はⅢe-1層上面である。埋土は1層のみである。褐色粗砂 (Hue7.5YR4/1) しまり中、粘性やや弱い。同色の粘土多く混じる。鉄分・マンガン沈着する。遺物はほとんど出土していないため時期は明確でないが層位的にも中世と考えられる。



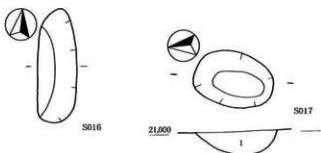
S003  
当区 殿見部の一部として、掘削したため土層は記録していない。S017 とほぼ同様の出土と考えられる。



S009 塚地区 北野  
1層 褐色粘土 (G2)YK3/2) しまりやや強い、粘性やや強い、褐色の粘土層になる。鉄分、マンガンを含有する。

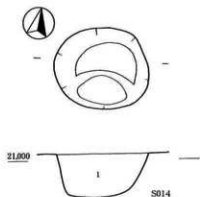


S011  
1層 黒褐色粘砂 (G2)YK3/2) しまり、粘性やや強い、黒褐色粘土、鉄多量層になる。粘土粒子、炭化物を含む。マンガンを含有する。

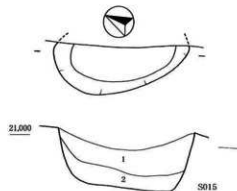


S016  
1層 明褐色粘土 (G)YK3/2) しまり強い、粘性強い、0.5~3mの少量多層になる。マンガンを含有する。  
2層 黒褐色粘土 (G)YK3/2) しまり中、粘性中、下部に0.5~2mの明褐色粘土のブロック少量層になる。

S017  
1層 暗褐色粘土 (G2)YK3/2) しまり強い、粘性強い、褐色粘土層になる。粘土粒子、炭化物を含む。鉄分、マンガンを含有する。



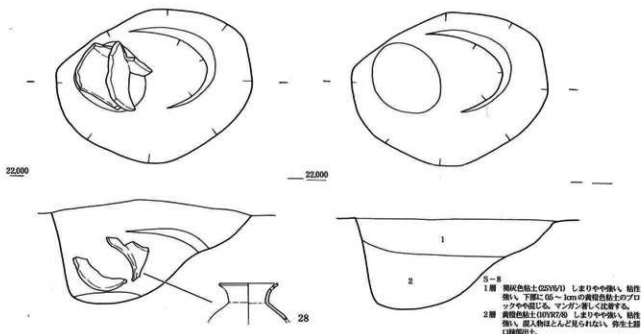
S014  
1層 暗褐色粘土 (G2)YK3/2) しまり、粘性ともに強い、褐色粘土層になる。粘土粒子、炭化物を含む。鉄分、マンガンを含有する。



S015  
1層 黄褐色粘砂 (G2)YK3/2) しまり強い、粘性強い、灰白色粘砂多量層になる。下部に2m少量して成層する。  
2層 灰褐色粘砂 (G)YK3/2) しまり強い、粘性強い、1~3mの黄褐色粘土のブロック多量層になる。上部に鉄分を含有する。



第21図 遺構実測図 (中世)



第22図 遺構実測図 (S008)

⑬ピット (S014) 【第21図】

調査区南側 (C3グリッド-NW) において検出した。他の遺構との重複はない。長径 0.5m、短径 0.43m、検出面からの深さ 0.3m である。

埋土は1層のみである。暗褐色粘土 (Hue7.5YR3/3) しまり強い。粘性強い。褐色灰粗砂混じる。焼土粒子、炭化物含む。鉄分、マンガン沈着する。遺物はほとんど出土していないため時期は明確でないが層位的にも中世と考えられる。

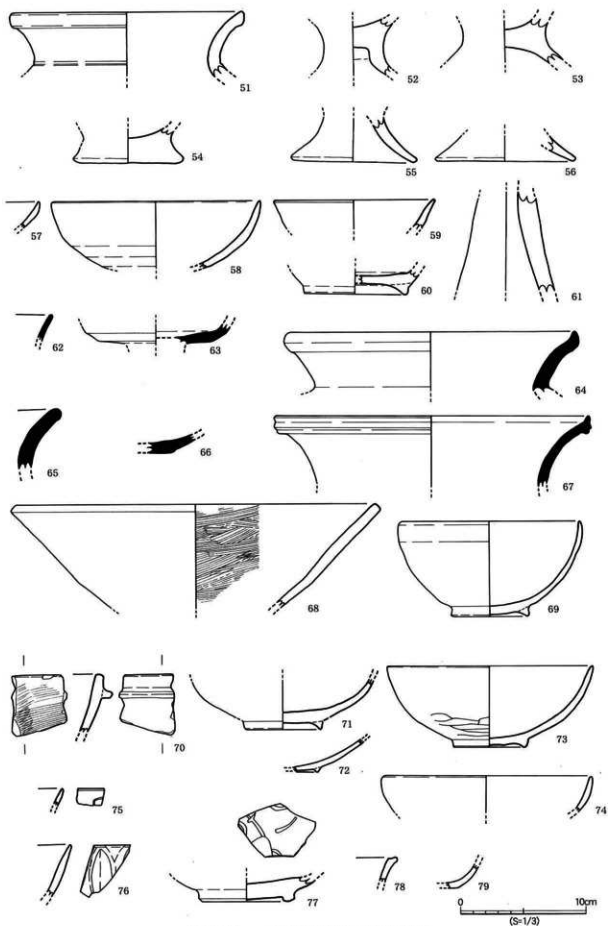
⑭ピット (S008) 【第22図】

調査区東側 (E3グリッド-SW) において検出した。S001と重複し、S001より新しい。長径 0.52m、短径 0.14m、深さ 0.25m である。検出面はVIa層であるが、農地整備による削平のため本来の層は不明である。埋土は2層。2層からは弥生土器の壺口縁部が出土した。本来S001に包含されていたものが攪拌されたことによると考えられる。

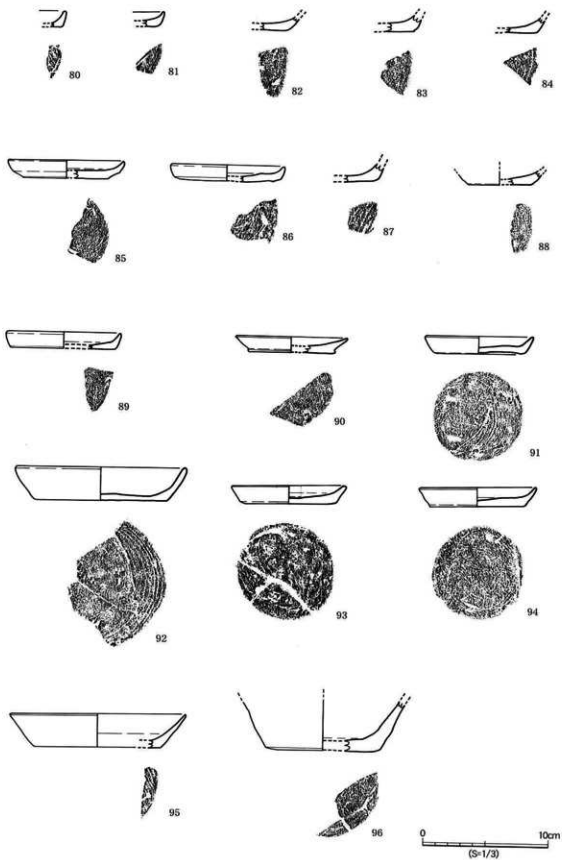
2 遺物

①溝 (S002) 出土 【第23・24図】

第23・24図はS002から出土した遺物の実測図である。51は4層出土の土師器甕の口縁部である。須恵器の甕によく似た器形で、調整も回転台を利用したナデの可能性ある。時期は古代か。52は1層出土、弥生土器の脚付鉢である。脚部は短く強く外反する器形と見られる。53～56はいずれも4層出土の弥生土器甕の脚部である。53は甕底部と比べると脚が大きく開いている。器壁が全体に厚い。54は平底の甕で、内底面が広く取られており、安定感がある。55は器壁が薄い。器表面は摩耗等により胎土中の砂粒が露出している。56は脚径が復元できたものの、全体に摩耗が著しい。57は土師器の坏で、口縁は緩やかに内湾しているように見える。2層から出土。58は焼成や胎土から土師器碗としている。



第 23 图 出土遺物実測図 (S002)

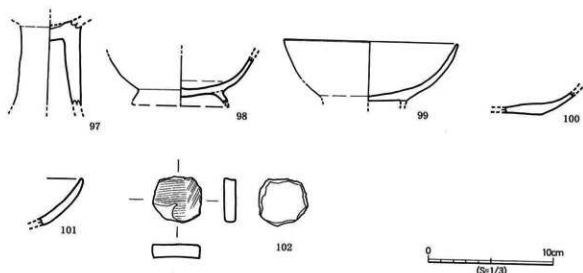


第 24 图 出土物实测图 (S002)



4層出土。しかし、器表面の荒れがひどく、表面の状態は不明。黒色土器の可能性もある。59は1層から出土した土師器の杯で、薄手の口縁部へと直線的に立ち上がる器形と見られる。時期は中世か。60は土師器高台付杯の底部で、断面三角形の高台を貼り付けている。同時代の須恵器に似せて作られている。4層から出土した。61は土師器の高杯と見られる。器厚は最大1.6cmと厚く、脚端部へ広がる器形のようなのである。4層出土。62は1層出土の須恵器杯口縁部で、わずかに外反している。63は須恵器の高杯と見られる。4層出土。外器面には黒色の自然釉が掛かる。64は4層出土の須恵器甕で、口縁は肥厚し内面が凹んでいる。口縁端部がやや尖る。65も4層出土の須恵器甕口縁部で、わずかながら赤味を帯びている。荒尾産か。66は4層出土の須恵器杯で、底面のヘラによる切り離し後の調整がやや粗い一方、内器面は丁寧にナデている。67は須恵器の甕である。口縁外面は肥厚部分の下位に突帯を付し、内面端部近くは凹ませている。4層出土。68は瓦質土器のこね鉢で、口縁の1/6程度が残存している。1層からの出土。注ぎ口の有無は確認出来なかった。内器面は密にハケメを施しており、或いは描目の代用としたものか。69は接合で全体の器形が窺える4層出土の瓦器碗である。高台径が大きく、さらに口縁部も直立気味で、ずんぐりとした印象がある。70は4層出土の中世須恵器（荒尾・樺幡城窯註「荒尾市史 前近代資料集」荒尾市史編集委員会編 2009）の羽釜である。断面長方形の鐶が付いている。内器面はハケメ、外器面はナデ調整を行い、全体に薄手で丁寧な作りである。71は4層出土の瓦器碗で、体部から底部にかけての資料である。高台は低く、高台の断面形状は三角形となる。体部は内湾しており、口縁はほぼ直立する器形と見られる。72も4層出土の瓦器碗で、低い高台を付けている。全体に器壁が薄い。73は2層出土の瓦器碗で、全体の器形が窺える資料である。外面体部下位にはやや幅広で短いヘラケズリを施している。2層出土。74は3層出土の瓦器碗の口縁部で、わずかに内湾している。75は1層出土の青磁碗口縁部である。外器面に蓮弁または雷文と思しき文様がある。釉葉はかなり薄く掛けられている。76は青磁の鎗蓮弁文碗口縁部である。鎗は弱くなっている。2層からの出土。77は青磁碗底部で、見込み部分に片切り彫りの文様が施されている。2～4層出土。78は1層出土の陶器鉢口縁部と考えられる。全体に薄く釉葉が掛けられ、口縁端部がわずかに凹むことから、蓋付きなのかもしれない。79は陶器の壺か。火災などで二次的に熱を受けた可能性がある。3層出土。

80～96は回転台を用いた土師器で、底部調整は糸切り離しである。その大きさから皿（80～91・93・94）と杯（92・95・96）に分けられる。80は3層出土で底部から直立するように短い口縁を作り出している。81は2層より出土しており、かなり浅い。82は4層出土の土師皿の一部で、器表面は摩耗しており、底面の糸切り痕も不明瞭である。83は1層出土の土師器皿で、ローリングを受け、磨滅している。底面に糸切り痕がわずかに残っている。84は4層から出土し、器表面が摩耗し、底面の糸切り痕も不明瞭である。85は4層出土、体部で屈曲させるように立ち上がりの角度を変え、高さを増している。86は3層出土で底部から直立するように短い口縁を作り出している。87は4層出土の土師皿の一部で、器表面が摩耗し、底面の糸切り痕も不明瞭である。88は土師器皿で、ローリングを受け、摩耗している。底面に糸切り痕がわずかに残っている。1層より出土した。89は4層出土で底面は薄い。摩耗しており、糸切りなどの調整はよく見えない。90は4層出土、底部の厚みに比して器高が低く、容量は大変小さいものとなっている。91は1層より出土した、完形の土師皿である。口縁は所々が欠け、内器面などで



第25図 出土遺物実測図 (S004・S005)

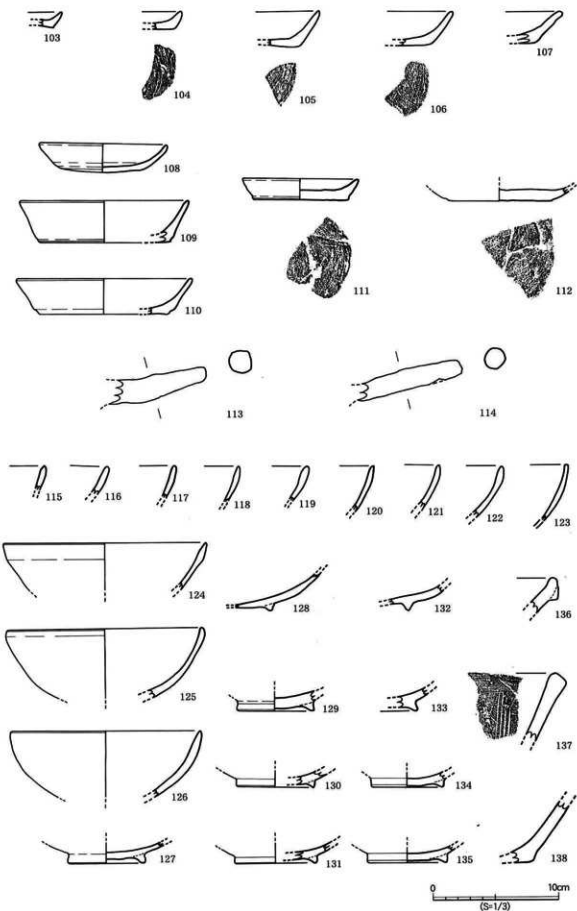
一部摩滅しているが、底面の糸切り痕が良く残る。92は1層出土の杯で、復元口径が13.6cm、器高2.6cmと比較的大きく、器壁は全体に薄い。93は4層出土の3点を接合してほぼ完形に復元できた土師皿で、内外器面には赤彩が施される。94は口縁の一部のみを欠くほぼ完形の土師皿である。4層より出土した。口縁は開き気味で口径9.4cm、底面は黒変している。95は3層出土の土師器の杯である。口縁端部に近いほどその器壁を薄くしている。立ち上がりは直線的だが大きく開く。96は深めの土師器の杯で、底面は糸切りの痕跡がある。底面以外は回転ナデ調整と見られる。2層から出土している。

②溝(S004・S005)出土【第25図】

第25図97～100はS004から出土し、このうち層位不明の99を除く3点は最下層からの出土である。97は高坏脚部で、焼成・色調から土師器と考えられる。器壁が厚く、坏部から直線的に延びている。98は土師器碗である。高台内は丸味を持ち、高台が大きく開いている。体部への立ち上がりは屈曲を作らず緩やかである。99は黒色土師の碗で、高台が外れてしまっている。外器面は体部上位まで、内器面は全体を黒くしている。100は土師器杯で、緩やかな立ち上がりを見せる。内器面に赤彩の痕跡がわずかに残る。101・102はS005の1層出土の土器・土製品である。101は瓦器碗で、焼成が良く堅緻である。102は弥生土器に二次的な加工を加えた土製品である。甕の体部片に四角を意識して加工したものと見られる。

③包含層出土の遺物(中世)【第26図】

第26図の134は土師皿の一部で器高1.2cm、底面は糸切り離しである。Ⅲd層から出土した。135はⅢc層出土の土師皿で、器面や底部の糸切り底が比較的良好に残る。136は土師器糸切り底の杯である。小破片のため径の復元まで至らなかった。Ⅲc層出土。137はⅢc層出土の土師器杯である。底面は糸切り、口縁は底部から直線的に大きく開いている。138はⅢc層から出た土師器杯である。底径に対して口縁が大きく開く器形となっている。139はⅣc-1層から出土した土師器の小皿で口縁の一部を欠くほぼ完形の資料である。口径10.2cmで端正な作りである。140は土師器杯で、全体に摩滅しているため、表面の調整等は不明である。Ⅲc層から出土した。141はⅢe層出土の土師器杯で、底部以外の全面に亘

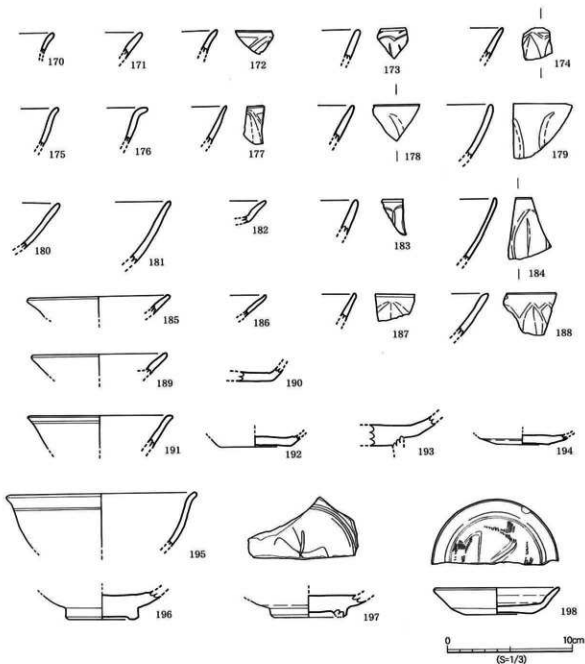


第 26 图 出土遺物実測図 (包含層・中世)

って赤彩の痕跡が認められる。底面は糸切り離しである。142はⅢb層出土の土師器皿である。底面の糸切り底は軽くナデ消されている。143はⅢc層出土の土師器杯である。底部に1cmほど厚みを持ち、安定感がある。144・145はともに焙烙の把手である。焙烙は把手の付いた浅い鍋で、フライパンのような形状をしている。色調は土師器に似るが、硬く焼き締まっている。また、145の基部には煤が付着し、使用の痕跡を留めている。146～166は瓦器碗である。146はⅢc層出土で、色調等の特徴は須恵器に似る。147はⅢc層から出土していて、わずかに内湾している。148はⅢe層出土、色調は須恵器に似るが口縁の内外器面は煤けたように黒い。149・150はともにⅢc層から出土し、口縁下位は内湾気味に曲がり、器壁もわずかに膨らんでいる。151はⅢc層出土、口縁端部内面では0.2cm、外面では1.5cmほどが黒色になっている。152はⅢc層出土で、器壁が薄い。153はⅢd層出土で、表面の摩耗が著しい。154はⅢc層出土、口縁端部は直立気味に立ち上がっている。155～157は口径が復元出来たもので、それぞれ155は16.2cm、156は15.6cm、157は15.2cmである。また、出土層位もⅢc層であった。155は口縁下位で厚みを増し、わずかに屈曲する。156は内外器面ともに口縁部が黒色を呈す。157は口縁から体部中位まで器形や口径は復元できたが、器面の摩滅のため、調整等は確認できなかった。158～166は高台の付いた底部資料で、ほとんどは断面三角形の小さな高台を貼り付け、高台内は丸味がある。158はⅢc層出土の碗底部で、高台径6.1cm、内器面には丁寧なナデを施している。159はⅤ層から出ており、摩滅しているものの外器面にはヘラケズリの痕跡が確認できる。160はⅢe層からの出土で、底面には若干丸みを持つ。161はⅢc層出土で、高台内は丸味を帯び、断面三角形の小さな高台を貼り付けている。162はⅢc層出土で断面三角形の高台を貼り付けている。内器面及び高台内は胎土と同様黒色を呈す。163はⅢc層からの出土で、全体に器面が摩滅している。断面三角形の高台を貼り付けている。164はⅢe層出土で、器面及び素地まで黒色を呈す。165はⅢc層出土である。高台内は丸味を帯び、断面三角形の小さな高台を貼り付けている。166もⅢc層出土の底部で、高台周辺のみ残存している。高台は低くて小さい。167はⅢc層出土の瓦質土器鉢口縁部で、断面を三角形に肥厚させている。口縁部のみ残存していたため、播鉢・こね鉢か判断できなかった。168は瓦質土器の播鉢で、内面はハケメの後に4本単位の播目を入れている。焼成後の色調は須恵器に似た灰色である。Ⅲc層から出土した。169はⅢb-1層から出土した瓦質土器の鉢である。播目は見えないので、こね鉢としている。外器面の体部と底部との境を指あるいは工具等で押さえ、凹ませている。

#### ④包含層出土の遺物（青白磁）【第27図】

第27図170はⅢb層から出た青磁碗の口縁部である。文様の有無は確認できない。171は皿口縁部で、口唇の一部は釉が薄く、剥落している。189と同一個体と見られる。172はⅢc層出土、青磁輪花碗の口縁部である。外面には蓮弁文も施される。173は線刻の蓮弁文碗の口縁部である。蓮弁は勢いのある細い線で表現されている。Ⅲc層から出土した。174はⅢb層から出た青磁蓮弁文碗の口縁部である。小片のため鎊の有無は不明であるが、軸は厚く掛けられ発色も良い。175はⅢc層出土の青磁碗口縁部である。端部がわずかに外反している。176は攪乱層から出た青磁で、無文の小碗または皿と見られる。177はⅢc層出土の青磁鎊蓮弁文碗口縁部で、小片だが鎊が表現してある。



第27図 出土遺物実測図 (包含層・青白磁)

178はⅢc層から出た青磁蓮弁文碗である。蓮弁がやや不明瞭で目立たない。179はⅢa層で出土した、青磁蓮弁文碗の口縁部で、既に鎊は失われ、蓮弁も彫りが浅く弱い。180はⅢc層出土の青磁碗の口縁部で、釉には透明感がない。181は攪乱層より出土した青磁無文碗である。軸は薄く色調にもやや濁りがある。182は青磁皿の口縁部で、軸は薄く掛けられるが、発色は良い。Ⅲc層から出土している。183はⅢc層出土の線刻細蓮弁文碗の口縁部である。173と比べると蓮弁がわずかに太い。184はⅢe層出土、青磁鎊蓮弁文碗である。鎊は弱く、口縁端部でわずかに内湾している。185はⅢc層から出た青磁皿の口縁部で、体部との境となる屈曲より下は破損している。残存していた部分では文様は確認できなかった。186はⅢc層出土の青磁皿で、底部へと屈曲する部分で破損している。灰白色の淡い軸色を呈す。187

はⅢc層出土の青磁蓮弁文碗である。蓮弁の間にわずかに錆が残っている。188はⅢc層から出土した青磁蓮弁文碗で、花卉が密に表現されている。189はⅢd層出土の青磁皿の口縁部で、口唇は軸が薄い。復元口径は10.8cm、171は同一個体と見られる。190はⅢc層出土の青磁皿底部で、平坦な底面と体部下位は一部を露胎させている。191は青磁口縁部で、碗または小碗である。口縁端部を平坦に成形し、全体に厚く軸を掛けている。Ⅲc層より出土している。192はⅡ層から出た青磁平底の皿底部である。釉は色合い、厚さともに薄い。193は青磁碗底部で、削り出しの高台のため器壁が厚い。見込みには体部との境に圏線を入れる。外器面を削って蓮弁の下部を表している。Ⅲc層から出土している。194はⅢb層出土の青磁皿で、見込みは無文とし、外器面は底面及び体部下位まで露胎させている。195はⅢc層出土の青磁無文碗で、軸は薄く掛けられるが発色は良い。196は青磁碗の底部である。削り出しの高台で底面は厚く、見込みも平坦に作られているが無文である。Ⅱ層より出土している。197はⅠ層出土、青磁碗の底部である。見込み部は平坦で草花文が施される。198はⅢc層から出土した同安窯系青磁皿で、およそ1/2が残存していた。平坦にした見込み部には櫛描文を施し、底面は基筒底としている。

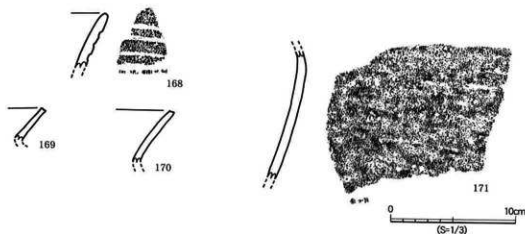
### 第3節 その他の時代の遺構・遺物

#### 1 縄文土器（包含層）【第28図】

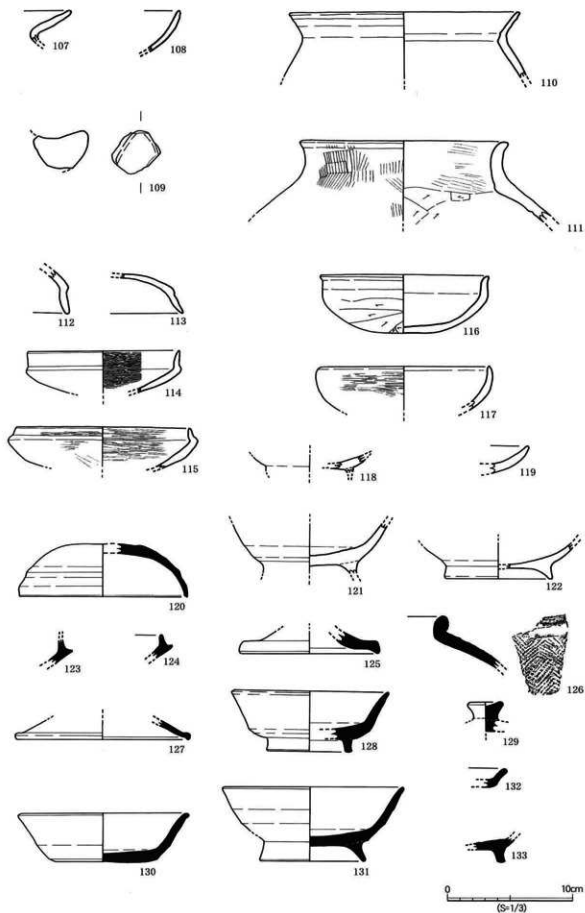
第28図の103は縄文土器深鉢の口縁部である。幅3mmの沈線がほぼ等間隔に3本確認できる。S001西側2層より出土したもので、S001以前の時期に属する資料であることから、遺構が埋没していく過程で混入したものと見られる。104・105はともにⅤa層出土の縄文土器深鉢口縁部で、頸部の屈曲部分までは直線的な器形を呈している。口縁端部には一条沈線を施し、断面では凹んだ形に見える。106はⅤa層出土の縄文晩期の深鉢形土器である。頸部の屈曲は弱い。全体に器面の摩滅が著しく、外器面にわずかに条痕が残っている。

#### 2 古墳時代～古代の遺物（包含層）【第29図】

第29図の107はⅤ層出土、土師器甕の口縁部で、頸部から大きく外反している。口縁端部は上方へ



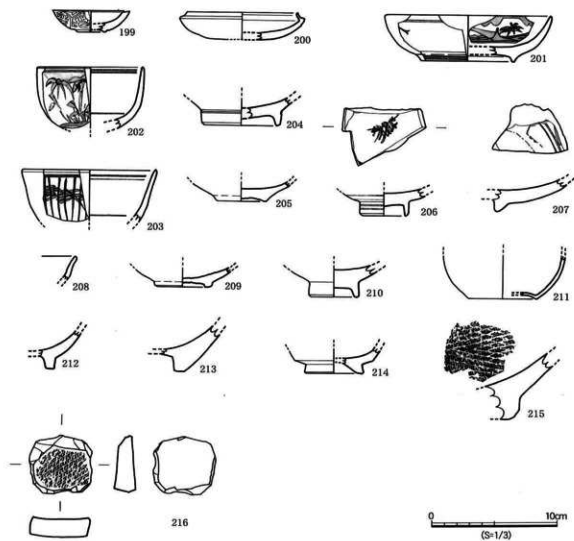
第28図 出土遺物実測図（包含層・縄文土器）



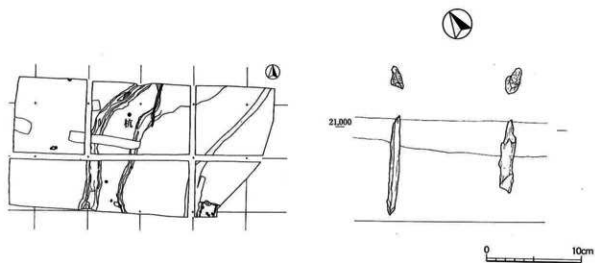
第29圖 出土遺物実測圖 (包含層・古墳～古代)

つまみ上げるようにわずかに尖らせている。108はV層より出土した土師器杯の口縁部で、器形や内器面はミガキ調整が行われていたことから、模倣杯の坯身の可能性がある。109はIV a層出土のやや小ぶりの把手である。古代の甔と見られる。110はIV d層出土、土師器の甔である。頸部で屈曲し、体部は広がっている。器形は概して直線的である。111は土師器甔の口縁～肩部で、口縁はほぼ直立するが端部で鋭く外反する。頸部以下内器面は幅の広いヘラケズリ、それ以外の箇所ではハケム調整を行っている。IV層出土。112はV層から出土した模倣杯の坯蓋である。須恵器の坯蓋に似せて作られている。全面をミガキ調整し、赤彩を施していた痕跡が残る。113は所謂模倣杯の蓋で、体部と口縁部との境界に鈍い稜を作りだしている。天井部は丸味を持ち、口縁部は弱く外反している。V a層から出土している。114はV層出土、模倣杯の坯身と見られる。内面は細かいミガキ、外面は屈曲部分以下にヘラケズリを行っている。また、赤彩の痕跡が残る。115は須恵器の形を真似た所謂模倣杯と呼ばれる土師器で、黒色処理とミガキ調整を施している。外器面では摩滅しているため、黒色の器表面やミガキの痕跡が失われている。IV・IV d層出土の2点が接合した。116は完形の土師器鉢である。丸底気味の底部は屈曲部分近くまで静止ヘラケズリを施している。体部はほぼ垂直に立ち上がるが、口縁端部はつまみ出したように外反させる。この屈曲より上はナデ調整で、内面はヘラケズリのあとにナデ調整を行っている。全体に丁寧で端正な作りである。V層から出土している。117は土師器の鉢で、表面にミガキ調整と黒色処理を行っており、模倣杯の蓋等の可能性がある。IV c-1層から出土した。118は土師器碗としているが、黒色土器A類の可能性がある。中世のものか？復元高台径7.0cmで、III c層から出土した。119はIII c層から出土した土師器の皿で、器形等の特徴から、時期は古代と考えられる。120は須恵器蓋で、外器面の体部と天井部の境に鈍い稜を作り出している。稜より下部、蓋口縁までは丸みがある。口縁端部内面には明瞭な段がある。内器面は丁寧な回転ナデ調整を行っている。S001の埋土1層（上位の遺構）出土須恵器（第16図33）と同様の時期と見られる。V a層より出土した。121はIII c～IVの層名で取り上げられた土師器碗で、高台が大きく開く器形である。122は土師器碗の底部で、器壁が薄く高台は広い。全体に摩滅しているが内器面は黒色を呈すことから、黒色土器A類の可能性もある。これもIII e～IVの層名で取り上げられている。123はIII d層出土の須恵器杯の口縁部である。破損しているが蓋受部は短く、立ち上がりは直立している器形と考えられる。124はIII c層出土須恵器杯で、蓋受け部分は短く、ほぼ直立する。125はIV d層から出土した須恵器高杯の裾部である。やや厚手で、中位で大きく立ち上がる。126は短頸の甔または壺の口縁部で、中世の製品の可能性がある。焼成は良好で須恵質、外器面頸部以下は斜め方向の平行タタキを直交させているため、菱形のタタキ痕跡が残る。127はIII e層から出土した須恵器蓋である。器壁は薄く、蓋口縁部はつまむようにして曲げ、小さなかえり部を作っている。128はIV層出土、須恵器高台付杯である。外面は高台から腰部までヘラケズリ、体部は見込み部まで回転ナデと全体に丁寧に仕上げられている。129は須恵器蓋のつまみ部で、つまみの上面は凹んでいる。つまみの形状から、蓋側のかえりが消失した九州VII A期と見られる。III c層からの出土である。130は須恵器杯で、外底と体部下にヘラケズリ、見込み部には不定方向のナデ調整を行うことから、時期は古代と考えられる。C3-SWグリッドベルトの崩落によって出土したため、層位は不明である。131は須恵器碗である。高台がやや高く、大きく開く。金属器の影響を受けた器形と見ることが出来る。焼成はあ





第30圖 出土遺物実測図（包含層・近世陶磁器）



第31圖 杭出土位置及び実測図

まり良くない。D1-SEグリッドIVa層とIVc-1層の接合資料である。132は須恵器高坏の坏部口縁で、浅い坏部を持つ器形である。脚はまだ低い頃と考えられる。Ⅲc層出土。133はⅢc層より得られた須恵器高台付坏である。高台部分は丁寧に作られている。

### 3 近世以降の遺構と遺物

#### (1) 遺構

##### ①杭

本調査区において杭は2本出土した。いずれもⅢe-5層からの検出で残存長は約10cmである。出土レベルから時期は近世以降のもので畦畔に伴うと考えられる。しかし、この2点のみでは、杭列や畦畔の方向は明確ではなく、土層観察の結果からも水田の区画などは判断できなかった。

#### (2) 遺物(包含層)

第30図の199は肥前系磁器の紅皿で、外面は陽刻の蛸唐草文を刻んでいる。内面は圏線と思われる線がある。内面は全体に施軸するが、外面は口縁部を除き露胎としている。Ⅲa層より出ており、編年では1850年代以降(『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会2000)の生産とされる。

200は攪乱層の出土で、合子の身と考えられる。201は表土はぎ時のI~II層で出土した磁器皿である。内器面は竹と見られる文様が施されている。202・203は攪乱層より出た肥前系の磁器碗で、江戸後期か。204はⅢb-1層出土の磁器碗で、近世の所産と見られる。内器面は薄い透明釉を掛けるが、外器面は無釉で、わずかに白色の釉または化粧土が畳付まで垂れている。205はⅢb-1層より出土した灰色釉を掛けた磁器で、器表面には細かな穴や凹凸が散在する。見込みと畳付に各4箇所の目砂の痕跡が残る。206は攪乱層出土の肥前系の磁器でやはり江戸後期と考えられる。207はⅢb-2層から出土した磁器碗の底部である。見込みは不完全ながら釉を剥ぎ取り、内器面には三種類の釉を使い、描画している。208は小代焼の小碗口縁部と見られる。全体に白釉を施した後、内面に鉄釉を掛けたものか。Ⅱc-1層から出土した。209はⅢb-2層出土の陶器皿で、畳付は釉ごと削り取っている。見込みには目砂の跡が残る。210は黒釉の陶器碗である。釉は薄く掛けられている。攪乱層から出土した。211は陶器の壺と見られる。体部に把手あるいは注ぎ口の痕跡がある。上げ底で大変薄い器形のため、元の器形は小型のものと考えられる。攪乱層から出土した。

212はⅢb-1層から出た陶器碗の底部である。全体に灰釉と考えられる、色調の薄い釉葉が掛けられている。213は陶器壺の底部で、小代焼の赤褐色系の釉を掛けたものと見られる。Ⅲb-1層から出土した。214は小代焼の小碗で外器面は露胎、内器面には白釉と鉄釉が流し掛けられている。Ⅲa層から出土した。

215はIb層出土の陶器播鉢底部片である。播目は斜めに交差するように密に施されている。216は攪乱層より出土した陶器播鉢の二次加工品である。元は底部に近く、厚みに差のある体部下位を加工している。四角を意識した作りで、鈍い角がある。

#### 4 石器・石製品・その他の遺物

##### ①石器（細石器・石鏃）【第32図】

第32図の217・218は黒曜石製の細石刃である。2点とも完全な形で残っているものと見られる。217はS001の2層出土で、長さ1.4cm、幅0.7cm、厚さ0.2cmで先端部までほぼ残っている。

218は長さ1.5cmで、幅は0.9cmとやや広い。V層から出土している。219は黒曜石の二次加工をした剥片で、側縁部に細かい加工をしている。Ⅲd層より出土した。220はS004最下層から出土した黒曜石の石核である。わずかに稜面を残している。目的とする剥片の大きさは細石刃より大きかったと考えられる。

221はS001の1層から出土した石鏃である。黄色の不純物がわずかに入る石材で、先端の一部を欠くが、両面ともに細かい加工を行っている。222はⅢb層出土の小ぶりの安山岩製石鏃である。基部がわずかに凹む。223はS001の1層から出土した石鏃である。基部の一部を欠く。224はⅣ層出土の安山岩製石鏃で、細かい打撃を加え、形を整えている。225はⅢc層から出た安山岩製の小型の石鏃で、基部の一部を欠く。

226はS001 2層出土の黒曜石製の石鏃である。227はS002の3・4層から出た石鏃（凹基無茎鏃）で、先端が欠損している。

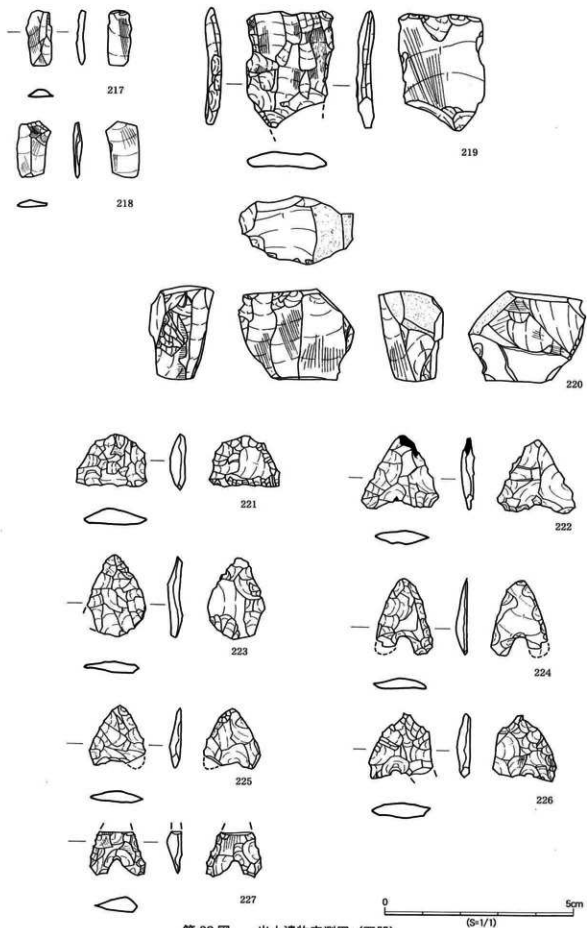
##### ②石器（凹石・石皿）【第33図】

228はS002、4層出土の敲石で、数カ所に敲打痕が残る。また、直接使用したとは考えにくい、中央に窪んだ部分がある。229は凹石で、安山岩製と見られる。表面の一部に敲打痕が残る。Ⅳa層出土。

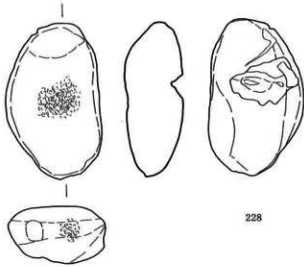
230はⅢe層出土の台石である。上面はわずかに凹み、細かい敲打痕も残る。安山岩製で、長さ・幅はともに20cmを越え、4.65kgと重量もある。231は滑石製の石鍋で、口縁はわずかに内湾し、断面三角形の小さな鈎が巡る。鈎より下には煤が付着している。器面は丁寧にケズリ調整が施される。形態からⅢ-a-2型式、年代は12世紀後半頃と見られる（木戸雅寿「石鍋」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編1995年）。

##### ④その他の遺物（鉄製品・輪）【第33図】

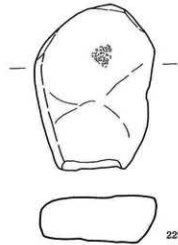
232はS001-1層出土の鉄製用途不明品である。細長い板状の製品で、刃が付けられているようには見えない。233はⅢd層出土の鉄製品である。長辺の片側が薄いことから、刀子と考えられる。234は輪羽口である。Ⅲc層より出土した。小片ではあるが、先端部は被熱の為、暗い紫色に変化している。



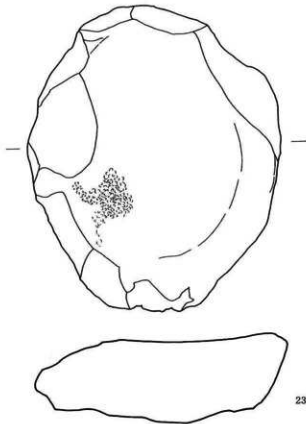
第 32 図 出土遺物実測図 (石器)



228



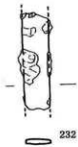
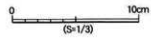
229



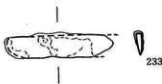
230



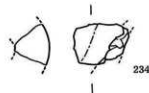
231



232



233



234



第 33 回 出土遺物実測図 (石器・石製品・その他)

## 第IV章 築地池下遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

### I. 築地池下遺跡における植物珪酸体分析

#### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。また、イネの消長を検証することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

#### 2. 試料

分析試料は、A地点、B地点、C地点、D地点の4地点から採取された計50点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

#### 3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を  $105^\circ\text{C}$  で 24 時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約 1g に対し直径約  $40\ \mu\text{m}$  のガラスビーズを約 0.02g 添加 (0.1mg の精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 ( $550^\circ\text{C}$ ・6 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 ( $300\text{W}$ ・ $42\text{kHz}$ ・10 分間) による分散
- 5) 沈底法による  $20\ \mu\text{m}$  以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0 と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位:  $10^{-5}\text{g}$ ) をかけて、単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的に与えることができる (杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

#### 4. 分析結果

##### (1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その

結果を表1および図1～図5に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ムギ類（穎の表皮細胞）、キビ族型、ヨシ属、シバ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）、Aタイプ（くさび型）、Bタイプ

〔イネ科—タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

〔イネ科—その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔カヤツリグサ科〕〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、アワブキ科、その他

## 5. 考察

### （1）稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

#### 1) A地点-中央（図1）

I a層（試料1）～VI b層（試料11）から採取された11試料について分析を行った。その結果、これらのすべての試料からイネが検出された。このうち、I a層（試料1）、I c層（試料2）、II b1層（試料3）、III a層（試料4）、VI b層（試料11）では密度が5,000個/g以上と高い値であり、III b1層（試料5）、IV b2層（試料8）、IV c1層（試料9）でも3,000個/g以上と比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

その他の層準では、密度が3,000個/g未満と比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

#### 2) A地点-南（図2）

IV d層（試料12）とV a層（試料13）の2試料について分析を行った。その結果、IV d層（試料12）からイネが検出された。密度は4,100個/gと比較的高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

#### 3) B地点（図3）

III c2層（試料1）～IV d層（試料7）から採取された7試料について分析を行った。その結果、III

e1 層 (試料 2) を除く 6 試料からイネが検出された。このうち、IV c2 層 (試料 5、6) では密度が 5,000 個 /g 以上と高い値であり、IV b1 層 (試料 3) でも 3,000 個 /g 以上と比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

その他の層準では、密度が 3,000 個 /g 未満と比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

#### 4) C 地点 (図 4)

I a 層 (試料 1) ~ V a 層 (試料 18) から採取された 18 試料について分析を行った。その結果、V a 層 (試料 18) を除く 17 試料からイネが検出された。このうち、I a 層 (試料 1)、I b 層 (試料 2)、II b1 層 (試料 4)、II b2 層 (試料 5)、II c1 層 (試料 6)、III b2 層 (試料 9)、III c1 層 (試料 10)、IV d 層 (試料 16) では密度が 5,000 個 /g 以上と高い値であり、I c 層 (試料 3)、III a 層 (試料 7)、III b1 層 (試料 8)、III e 層 (試料 11)、IV b2 層 (試料 13)、IV c2 層 (試料 15) でも 3,000 個 /g 以上と比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

その他の層準では、密度が 3,000 個 /g 未満と比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

#### 5) D 地点 (図 5)

III d2 層 (試料 1) ~ V b 層 (試料 11) から採取された 11 試料について分析を行った。その結果、これらのすべての試料からイネが検出された。このうち、IV c2 層 (試料 7)、IV d2 層 (試料 9) では密度が 3,000 個 /g 以上と比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

その他の層準では、密度が 3,000 個 /g 未満と比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

### (2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型 (ヒエが含まれる)、エノコログサ属型 (アワが含まれる)、キビ属型 (キビが含まれる)、ジュズダマ属 (ハトムギが含まれる)、オヒシバ属 (シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはムギ類が検出された。

ムギ類 (穎の表皮細胞) は、C 地点の I b 層 (試料 2) と II b2 層 (試料 5) から検出された。密度は 600 ~ 700 個 /g と低い値であるが、穎 (初殻) が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、これらの層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。



なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

### (3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、ネザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ミヤコザサ節型なども認められた。また、樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）なども比較的多く検出されたが、近世より上位では減少している。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある（杉山、1999）。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い（近藤・佐瀬、1986）。おもな分類群の推定生産量によると、多くの層準でイネが優勢であり、D地点のV b層などではヨシ属も多くなっている。

以上の結果から、各層準の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（おもにネザサ節）をはじめススキ属、ササ属（おもにミヤコザサ節）などが生育していたと考えられ、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。なお、照葉樹林は近世以降には減少したと考えられる。

## 6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、古代とされるIV層dより上位の各層では、ほとんどの試料でイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、地山とされるA地点のVI b層、古墳時代とされるD地点のV b層やIV c2層などでも、稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、近世とされるC地点のII b2層などでは、ムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

各層準の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（おもにネザサ節）をはじめ、ススキ属、ササ属（おもにミヤコザサ節）などが生育していたと考えられ、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。なお、照葉樹林は近世以降には減少したと考えられる。

## 文献

- 近藤謙三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体，その特性と応用，第四紀研究，25，p.31-63。  
杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史，第四紀研究，38(2)，p.109-123。  
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール），考古学と植物学，同成社，p.189-213。  
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—，考古学と自然科学，9，p.15-29。  
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—，考古学と自然科学，17，p.73-85。

表1 玉名市、築池地下遺跡における植物遺体分析結果

分類群	地点・試料												
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
イネ科													
Compositae													
<i>Oryza sativa</i>	90	50	77	61	43	7	26	34	34	14	72	41	
ムギ類(葉の表皮細胞)													
<i>Hordeum-Triticum</i> (leaf Epithelial)													
Poaceae type													
<i>Panicum</i>	7												
<i>Phragmites</i>	6												
<i>Zizania</i>													
ススキ属類													
<i>Africanis</i> type	6												
Andropogoneae A type	28	13	7	20	7	21	7	41	14	14	7	14	
Andropogoneae B type													
A type													
B type													
タケ類群													
Bambusoideae													
<i>Pholobolus</i> sect. <i>Nipponocladius</i>	7												
<i>Pholobolus</i> sect. <i>Nipponocladius</i>	76	63	98	61	78	14	46	48	43	7	41	7	
<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.													
<i>Sasa</i> sect. <i>Cristinoidi</i>	55	31	21	7	26	14		27	14	14	14	7	
<i>Phyllostachy</i>													
未分類等	62	44	28	41	26	7	7	20	14	7	22	7	
その他のイネ科													
Husk hair origin	14	19	7	14	7			13	14	7	7	14	14
穂状遺体	62	75	125	61	92	21	72	48	14	50	29	34	
未分類等	248	232	146	162	220	125	190	252	145	179	116	157	22
カヤツリタケ科(スダゲ属など)													
Cyperaceae(Carex etc.)													
榊木超類													
アボケ													
<i>Caricopsis</i>	7	6	14	7	7	55	72	123	69	86	101	48	7
クスノキ科	7												
Laurosteae													
<i>Diospyros</i>	7												
アワビ科	7	19											
Subiceae													
その他の	14	19	7	14	7	28	59	61	55	57	43	62	15
(樹皮付材)													
Sponge spicules													
Total	675	583	537	500	568	305	622	703	531	636	507	568	82
おもな分類群の増産生産量 (単位: kg/dry wt) : 試料の乾比重を1.0と仮定して算出													
<i>Oryza sativa</i>	2.64	1.47	2.25	1.79	1.25	0.20	0.77	1.00	1.01	0.42	2.13	1.21	
<i>Panicum</i>	0.40	0.85						0.83	0.43	0.43	0.90	0.46	0.86
<i>Africanis</i> type	0.08	0.17	0.18	0.09	0.05	0.25	0.60	0.18	0.25	0.60	0.18	0.25	0.09
<i>Pholobolus</i> sect. <i>Nipponocladius</i>	0.08							0.08	0.16	0.08	0.41		
<i>Pholobolus</i> sect. <i>Nipponocladius</i>	0.36	0.30	0.47	0.29	0.27	0.67	0.22	0.23	0.23	0.21	0.03	0.20	0.04
<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.													
<i>Sasa</i> sect. <i>Cristinoidi</i>	0.17	0.09	0.06	0.02	0.11	0.04		0.08	0.04	0.04	0.04	0.02	
タケ類群の比率 (%)													
<i>Pholobolus</i> sect. <i>Nipponocladius</i>	13							15	26	34	23	63	
<i>Pholobolus</i> sect. <i>Nipponocladius</i>	60	76	88	84	66	62	74	49	66	31	44	91	100
<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.													
<i>Sasa</i> sect. <i>Cristinoidi</i>	27	24	12	6	19	38	38	17	12	6	56	9	
<i>Sasa</i> sect. <i>Cristinoidi</i>	73	76	88	94	81	62	100	83	88	94	41	91	100

表2 築池地下遺跡における植物遺体分析結果1

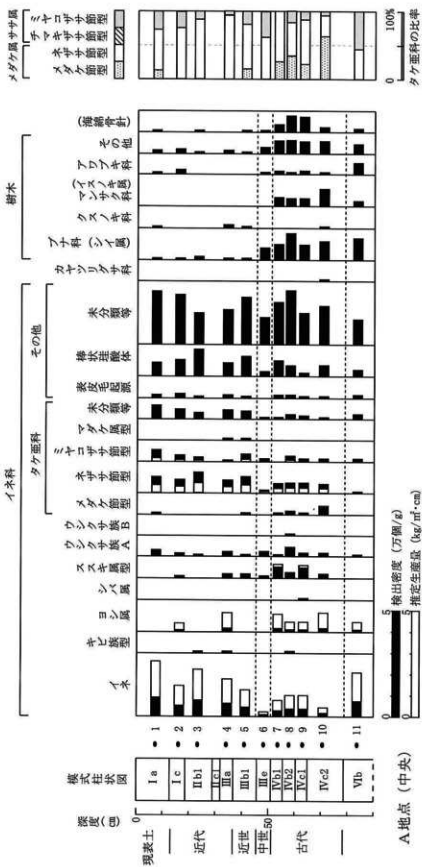
抽出率 (単位: ×100割合)

分類群	学名	種点・試料						
		1	2	3	4	5	6	
イネ科	<i>Oryza sativa</i>	25		34	14	59	63	26
ムギ科(鳩の表皮類)	<i>Alopecurus-Triticum</i> (Bark Psycloth)							7
キツネ草科	Panicum type							7
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	12	7	20	7	20	7	7
シロイロ	<i>Zizania</i>							26
ススキ科	<i>Miscanthus</i> type	12		7	14	26	26	13
ウシタケ草A	Andropogoneae A type	25	21	7	14	7	7	7
ウシタケ草B	Andropogoneae B type							
Aタイプ(くさむし)	A type	6						
Bタイプ	B type							7
タケ草科	Bambusoideae							
メダケ草	<i>Pholidotus</i> sect. <i>Nipponochlamys</i>	6	7	7	7	7	7	13
メダケ草	<i>Pholidotus</i> sect. <i>Nepan</i>	95	21	67	20	33	90	20
チマキ草	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.							
チマキ草	<i>Sasa</i> sect. <i>Cratichneum</i>	6		54				
マダケ草	<i>Phyllostachya</i>							
木防虫	Others	19		40	14	7	7	7
その他イネ科	Others							
炭化毛	Blank hair origin	12	7	27	14	7	21	7
体軟組織	Root-washed	68	7	40	61	65	77	13
木防虫	Others	205	77	215	129	190	181	85
カヤツリタケ科(スダケなど)	Cyperaceae(Cyper etc.)		7					
蕨木	Arborvitae							
ブナ科(シイ科)	<i>Castanopsis</i>	6	91	54	68	65	84	72
クスノキ科	<i>Quercus</i>							7
アザミ科	<i>Asteraceae</i>	6	42	34	7	13	70	20
アザミ科	<i>Helianthus</i>	19	14	27	7	7	20	20
アザミ科	<i>Schizoneura</i>	25	56	67	41	46	63	39
その他	Others	12	21	80	41	20	56	13
腐敗物	Storage residues							
腐敗物	Total	847	357	664	421	556	606	361
お米など分類群の発生率 (単位: % of total) : 試料の発生率を1.0と仮定して算出								
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.73	0.99	0.40	1.72	1.94	0.77	
ヨシ	<i>Phragmites</i>	0.78	0.44	1.27	0.43	1.24	0.44	0.41
ススキ科	<i>Miscanthus</i> type	0.15	0.08	0.17	0.32	0.35		
メダケ草	<i>Pholidotus</i> sect. <i>Nipponochlamys</i>	0.07	0.08	0.08	0.08	0.08	0.15	
チマキ草	<i>Pholidotus</i> sect. <i>Nepan</i>	0.45	0.10	0.32	0.10	0.16	0.43	0.09
ウシタケ草	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.							
ウシタケ草	<i>Sasa</i> sect. <i>Cratichneum</i>	0.02		0.10				
タケ草科の比率 (%)								
メダケ草	<i>Pholidotus</i> sect. <i>Nipponochlamys</i>	13	45	16	45	33		62
チマキ草	<i>Pholidotus</i> sect. <i>Nepan</i>	83	55	64	55	67	100	38
ウシタケ草	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.							
ウシタケ草	<i>Sasa</i> sect. <i>Cratichneum</i>	3		20				
メダケ草	Meadow reeds	97	100	80	100	100	100	100

第3表 築池下遺跡における植物理酸体分析結果2

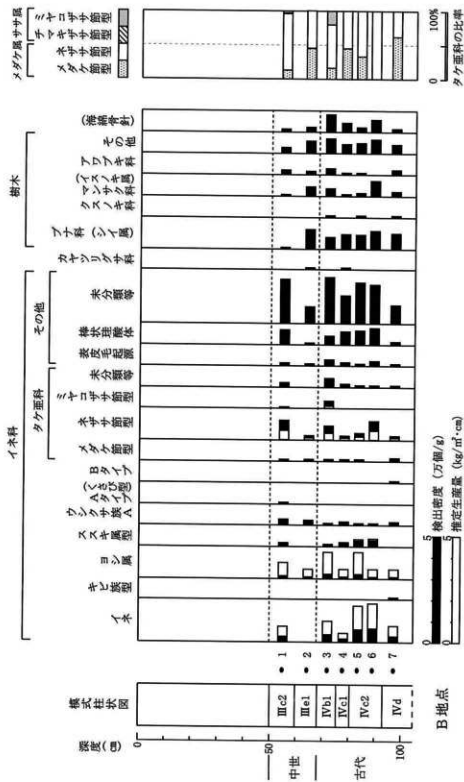






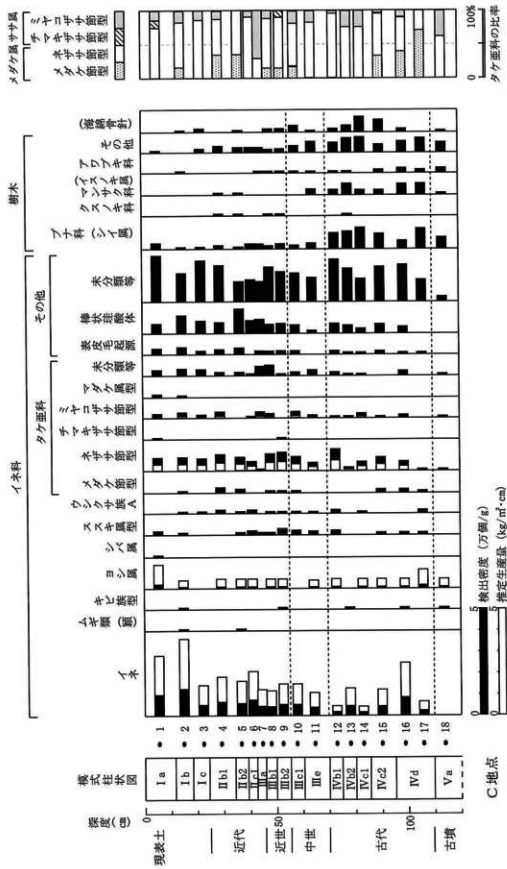
第34図 築地地下遺跡 A 地点 (中央) における植物遺骸体分析結果





第36図 築地池下遺跡B地点における植物珪酸体分析結果





第37図 築地地下遺跡C地点における植物珪酸体分析結果



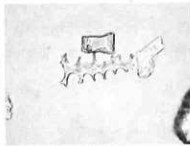
第 39 図 築地池下遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)



イネ



イネ



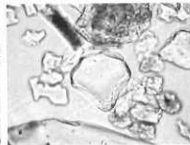
ムギ類 (穎の表皮細胞)



キビ族型



ヨシ属



ススキ属型



メダケ節型



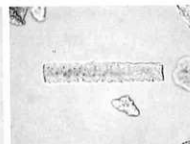
ネザサ節型



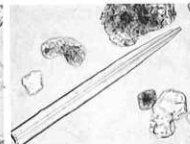
ミヤコザサ節型



表皮毛起源



棒状珪酸体



海绵骨針



ブナ科 (シイ属)



マンサク科 (イスノキ属)



アワブキ科

50 μ m

## II. 築地池下遺跡における花粉分析

### 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

### 2. 試料

分析試料は、A地点、B地点、C地点、D地点の4地点から採取された計50点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

### 3. 方法

花粉の分離抽出は、中村(1973)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm<sup>3</sup>を秤量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加えて15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。

### 4. 結果

#### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉27、樹木花粉と草本花粉を含むもの5、草本花粉26、シダ植物胞子2形態の計60である。また、寄生虫卵1分類群が検出された。分析結果を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

#### (樹木花粉)

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、

サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属-マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属-ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、ウルシ属、モチノキ属、トチノキ、ブドウ属、ツバキ属、グミ属、モクセイ科

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ゴマノハグサ科

[草本花粉]

ガマ属-ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ネギ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンボウグ属、アブラナ科、ベンケイソウ科、ユキノシタ科、ソラマメ、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、ゴマ、キツネノマゴ、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

単条溝胞子、三条溝胞子

[寄生虫卵]

回虫卵

## (2) 花粉群集の特徴

### 1) A地点-中央(図1)

下位のⅥb層(試料11)~Ⅲb1層(試料5)では、花粉がほとんど検出されなかったが、Ⅲe層(試料6)ではソラマメ、Ⅲb1層(試料5)では回虫卵が認められた。Ⅲa層(試料4)~Ⅰa層(試料1)では、草本花粉の占める割合が約70~80%を占める。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)が優勢で、アブラナ科、カヤツリグサ科、タデ属などが伴われる。また、Ⅱb1層(試料3)とⅠa層(試料1)ではソバ属が認められた。樹木花粉では、マツ属複雑管束亜属、スギ、シイ属-マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属などが検出された。また、Ⅰa層(試料1)では回虫卵が認められた。

### 2) A地点-南

Ⅳd層(試料12)とⅤa層(試料13)では、花粉が検出されなかった。

### 3) B地点

Ⅲc2層(試料1)~Ⅳd層(試料7)では、花粉が検出されなかった。

### 4) C地点(図2)

下位のⅤa層(試料18)では、花粉がほとんど検出されなかった。Ⅳd層(試料17)~Ⅲe層(試料11)では、草本花粉のイネ科、ユキノシタ科、樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属などが検出されたが、いずれも少量である。Ⅲc1層(試料10)~Ⅱc1層(試料6)では、草本花粉

のイネ科、アブラナ科、樹木花粉のマツ属複維管束亜属、スギなどが検出されたが、いずれも少量である。また、Ⅲ b2層（試料9）ではソバ属が認められた。Ⅱ b2層（試料5）では、草本花粉が約70%を占める。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）が優勢で、アブラナ科、ヨモギ属、タデ属、ゴマなどが伴われる。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属が比較的多く、スギ、クマシデ属-アサダ、シイ属-マテバシイ属などが伴われる。Ⅱ b1層（試料4）～Ⅰ a層（試料1）では、草本花粉のイネ科（イネ属型を含む）、アブラナ科、樹木花粉のマツ属複維管束亜属、スギなどが検出されたが、いずれも少量である。

#### 5) D地点（図3）

下位のV b層（試料11）、Ⅳ d2層（試料9）、Ⅳ d1層（試料8）では、草本花粉の占める割合が約70～60%を占める。草本花粉では、ユキノシタ科、ヨモギ属、イネ科（イネ属型を含む）が優勢で、セリ亜科、チドメグサ亜科、カヤツリグサ科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属が比較的多く、シイ属-マテバシイ属、ヤナギ属などが伴われる。Ⅳ c2層（試料7）～Ⅲ d2層（試料1）では、花粉がほとんど検出されなかった。

### 5. 花粉分析から推定される植生と環境

#### (1) A地点

下位のⅥ b層（古代時代以前）～Ⅲ b1層（近世）では、花粉がほとんど検出されないことから、植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたこと、土層の堆積速度が速かったこと、および水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが考えられる。Ⅲ b1層（近世）では寄生虫卵の回虫卵が認められることから、人糞施肥の影響も示唆されるが、低密度であることから、集落周辺における通常の生活汚染によるものと考えられる。

Ⅲ a層（近代）～Ⅰ a層（現表土）では、おもに水田稲作が行われており、周辺ではソバ属、アブラナ科などの畑作も行われていたと考えられる。アブラナ科には、アブラナ（ナタネ）、ダイコン、ハクサイ、タカナ、カブなど多くの栽培植物が含まれている。また、遺跡周辺には植林もしくは二次林とみられるマツ類（マツ属複維管束亜属）、スギ、シイ類（シイ属-マテバシイ属）、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）などが分布していたと考えられる。

#### (2) B地点

Ⅲ c2層（古代）～Ⅳ d層（中世）では、花粉が検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

#### (3) C地点

V a層（古墳時代）では、花粉がほとんど検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。Ⅳ d層（古代）～Ⅱ c1層（近代）でも、花粉があまり検出されないこと

から植生や環境の推定は困難であるが、IV d 層（古代）～III e 層（中世）ではイネ科、ユキノシタ科、カシ類（コナラ属アカガシ亜属）、ナラ類など、III c1 層（中世）～II c1 層（近世）ではイネ科、アブラナ科、マツ類、スギなどが生育していたと考えられる。また、III b2 層（近世）ではソバ属も認められた。

II b2 層（近代）では、おもに稲作が行われており、周辺ではアブラナ科、ゴマなどの畑作も行われていたと考えられる。また、遺跡周辺には植林もしくは二次林とみられるマツ類、スギ、シイ類などが分布していたと推定される。

II b1 層（近代）～I a 層（現表土）では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、II b2 層とおおむね同様の状況であったと考えられる。

#### (4) D地点

V b 層（古墳時代）～IV d1 層（古代）では、ユキノシタ科、イネ科、ヨモギ属などの草本類が生育する比較的湿潤な環境が示唆され、周辺では水田稲作が行われていたと考えられる。また、遺跡周辺にはカシ類やシイ類などの照葉樹林をはじめ、二次林とみられるナラ類なども分布していたと推定される。

IV c1 層（古代）～III d2 層（中世）では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

#### 6. まとめ

花粉分析の結果、古墳時代から古代にかけては、ユキノシタ科、イネ科、ヨモギ属などの草本類が生育する比較的湿潤な環境が示唆され、調査地点もしくはその周辺では水田稲作が行われていたと考えられる。また、遺跡周辺にはカシ類やシイ類などの照葉樹林をはじめ、二次林とみられるナラ類なども分布していたと推定される。中世については、花粉がほとんど検出されないことから、植生や環境の推定は困難である。

近世から現在にかけては、おもに水田稲作が行われており、周辺ではソバ属、アブラナ科などの畑作も行われていたと考えられる。また、遺跡周辺には植林もしくは二次林とみられるマツ類（クロマツ、アカマツ）、スギ、シイ類、ナラ類などが分布していたと推定される。

#### 文献

金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集, 60p.

中村純 (1973) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.

中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.

中村純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第 10 号, p.21-30.

中村純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集, 91p.





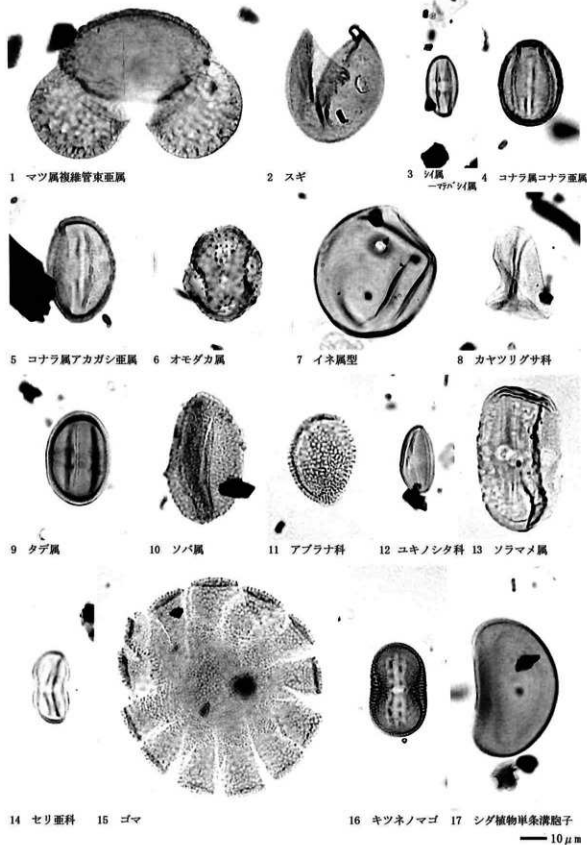








第43図 築地池下遺跡の花粉・孢子



## 第V章 総括

今回、玉名バイパス建設に伴う築地池下遺跡の発掘調査において、弥生時代と中世を中心に遺構や遺物が確認されたが、それ以外の遺物も含め確認された各時代ごとに概観したい。

### 【縄文時代】

今回の調査区において縄文時代の遺構は確認されなかったが、西側で確認した最下位にあたる砂礫層において縄文時代の遺物が出土している。出土状況としては、旧流路と想定される砂層内において小礫石に混ざって流れ込んだ状態であり、やや磨耗を受けた破片が主であるが、中には甕の胴部と判断される破片も含まれている。よって当遺跡の付近、特に上流側（北側）において縄文時代の遺跡があるものと考えられる。遺跡地図では現在、四十九遺跡、西田遺跡が縄文時代に含まれており、これらの遺跡から流れ込んだ可能性がある。西田遺跡は遺跡台帳の調査記録によれば丘陵地の一郭から石斧数点が出土した地点があり、その地点から西約80mのところの花崗岩の巨石1個があり、支石墓の可能性もあるとされているが詳細は不明である。

また、石鏃が数点出土しているが、流れ込みもあるにして周辺の野山にて縄文人たちが狩猟活動を行っていたものと考えられる。

### 【弥生時代】

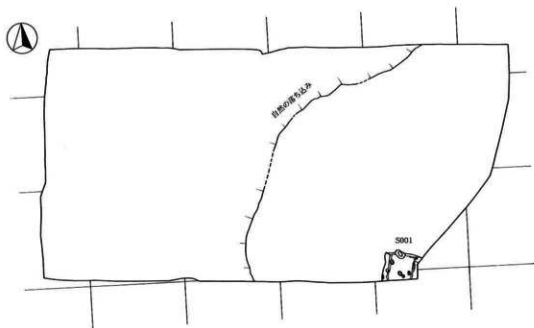
今回の調査区において、1基の弥生時代後期の住居跡が確認された。また他に弥生時代の遺構としてはピットがあるが、東側の丘陵上になるほど住居跡の広がりがあるものと考えられる。

旧地形は北東側になるほど高くなるが、調査区内で検出された自然の落込みは西側にかけて段状に低くなり、河川氾濫に伴う砂層の堆積が確認され旧河道の可能性も考えられる。この落ち込み際には多くの弥生土器が出土しており、完形に近い器台の出土状況などからも、あまり離れていない場所からの流れ込みと考えられる。

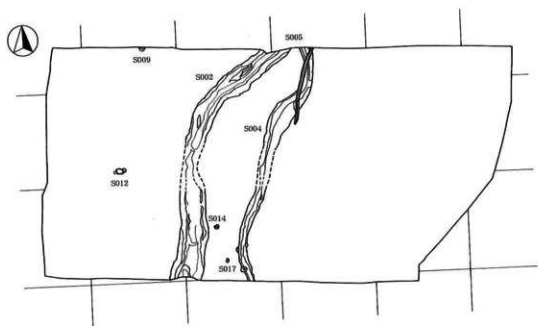
全体的に調査区内における弥生時代の遺構密度に対して弥生土器の出土量からすれば、東側丘陵上には、弥生時代後期の集落があったものと考えられる。今回調査区の東側に位置する同じ玉名バイパスの路線内で平成21年度に行われた果文化課による「築地館跡」の発掘調査においても、弥生時代の住居跡や溝などが検出されており集落の存在が明らかになりつつある。

また、南側約500m先においては、同じく弥生時代後期の「狐ん路遺跡」が存在し、住居跡が確認されているが、当遺跡との高低差は約5mあり距離もあることから別の集落遺跡と考えられる。

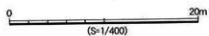
今回確認した竪穴住居跡は1基であり、上位が攪乱や削平を受けていたため全体の形状が明確ではなかったが、ベッド状遺構の段が認められることなどから正方形か長方形のプランを呈していたと考えられる。周辺における同時期の住居跡を見ると、蓮華遺跡や高岡原遺跡、平嶋遺跡などで多くの住居跡が確認されており、そのほとんどがベッド状遺構を有し、中央に炉があってそれを挟むように二本柱という構造となっている。また、北側壁下と東側ベッド下の一部においては壁周溝と思われる凹みが検出され、本来は壁の周囲には溝が巡っていた可能性もある。これも同じように周辺遺跡と関連した構造性を有している。



弥生時代 (後期)



中世



第 44 図 築地池下遺跡の時代別遺構配置図

住居跡の床面出土の土器（2層出土土器）は、数は少なかったが、器種構成は壺、甕、器台、ジョッキ型土器が揃っており、他に脚付甕、脚付鉢と思われる脚台部が出土している。時期はジョッキ型土器や、脚付甕を含むことから弥生時代後期と思われるが、肩が張り胴部が丸味をおびる壺などの特徴から後期の中でも前半期ではないかと思われる。第14図-2は短頸の壺であるが類似した土器が玉名市月田にある前田遺跡で出土している。

ジョッキ型土器は玉名市内では他に東南大門遺跡（築地）、高岡原遺跡・平嶋遺跡（山田）、中北遺跡（伊倉）、岩崎城跡（岩崎）、前田遺跡（月田）などで出土しているが、完形に近い状態の資料が少なく、当遺跡の土器も完全に接合できず図上で復元しているが、形態は胴部中央のクビレが狭くなり、底部もどっしりとしたもので、高岡原遺跡の住居跡出土のものと類似している。また、今回、ほぼ完形の良好な状態で器台が2点出土しているが、その形態は、弥生時代後期の特徴を備えている。出土地点は、住居跡と自然の落ち込みと異なるが同時期の所産であろう。

当遺跡の周辺には、大原遺跡、下前原遺跡（岱明町）などにおいて弥生時代後期の住居跡が出土しており、これらの集落とのつながりがあったものと思われる。隣接する築地館跡においても同時期の住居跡が検出されており、一連の遺跡であった可能性がある。現在の友田川はその間を遮断するように流れているが、これは前にも触れたように築地館が築かれた中世の頃に外堀の役割をもって流れが変えられた可能性もある。それ以前の流路は、前にも触れたように調査区内で検出された自然落ち込みが元の流路であったと考えられるが、対岸側が未確認のため検討が必要である。

#### 【古墳時代】

今回、古墳時代の直接的な遺構は検出されなかったが、S001においては弥生時代後期の住居跡が埋没した後に攪拌された状態で6世紀中頃の須恵器（坏蓋）が出土している。この遺構が攪拌された時期については明確でないが、攪拌層としている1層内の遺物には古墳時代以降の遺物は混入していない。周辺には、すぐ北西側に「西の山古墳群」があったとされ、昭和35年の調査台帳には3基の古墳が確認されている。うち1基は横穴式石室で、あとは箱式石棺であったという。古墳からは須恵器の長頸壺などが出土したと記録されている。また「四十九古墳」も同じように昭和中期以降に開墾に伴い解体され石材も散逸している。古墳が周辺に築造されていたとして、その被葬者は不明だが包含層からも須恵器や模倣土師器など古墳時代の遺物の流れ込みがあり、周辺に生活空間があったものと想定される。遺跡地図では、「築地那木野遺跡」や築地館跡内に含まれる「八段遺跡」が土師器、須恵器などの古墳時代包蔵地となっているため、これらの遺跡からの流れ込みと思われる。

花粉分析の結果からは、古墳時代～古代にかけてはヨモギ属、イネ科など草本類が生育する湿潤な環境が示唆され、周辺において水田耕作が行われていた可能性もあり、遺跡周辺はカシ類などの照葉樹林が分布していたと推測されている。

#### 【古代】

今回、古代に伴う直接的な遺構は確認できなかったが、古代の遺物は土師器、須恵器の高台付坏など



が出土している。周辺からの流れ込みと判断されるが、山田一帯まで玉名郡衙の関連遺構が出土していることや、蓮華遺跡からも白鳳期の重瓦軒丸瓦などが出土しており、瓦葺きの建造物が既にあったと想定され、郡司の官舎である館院跡とも考えられている。これらは、日置氏から大野氏へと権力の移り変わりに関連しているのか明確ではないが、大野一族である築地氏は、平安後期以降に日置氏に替わって玉名郡司を務めている。これらのことから、周辺には官衙的な施設があって、当遺跡まで人の往来があったものと思われる。土壌分析の結果からは当地では水田稲作が行われていた可能性がある。

#### 【中世】

今回の調査区内において、溝が3条検出されたが、いずれも南北方向に延びる遺構である。特にS001とS002は同じ方向でカーブする部分も並行するようにカーブしており、時期は若干の差があるものの、旧地形の名残を反映しているものと思われる。溝の用途としては、周辺の水田等に伴う水路として用排水の目的があったものと考えられる。また、東側の居館と田畑地を区画し、防衛的役割もあつた可能性がある。

また、いくつかの土坑やピットは、その用途は明確でないが、少なくともピットは柱穴と判断できるものはなく、建物等が存在していた可能性は低いものと考えられる。しかしながら、水田跡と判断されるような区画や畦畔等も確認できなかったが、土壌分析の結果からも調査区内及び一帯は田畑の空間であったものと思われ、友田川からの幹線水路としてS002などのやや大きい溝が掘られたのかも知れない。

また、溝内や包含層から青白磁など輸入陶磁器が、単なる田畑跡としてはやや多く出土しており、東側に位置する大野氏の居館と推定される「築地館跡」の存在は大きく影響しているものと考えられる。そこで中世における大野氏について少し触れてみたい。

#### (1) 大野氏について

大野別府は12世紀中頃に成立した荘園の一つであり、本家は京都石清水八幡宮中坊とされる。領家は福岡県の箱崎八幡宮で、旧玉名町・築地・滑石あたりから岱明町にかけて存在した荘園領であった。紀氏(大野)一族は、11世紀頃から玉名郡域において台頭し、肥後国府の在庁官人となった。

紀(大野)国隆の出自等については諸説あるが、弘治3(1557)年の紀宗善の「大野氏由緒書上」(清源寺文書)によると建久4(1193)年、大野別府二十五町の地頭として関東より南向したとされている。この「大野氏由緒書上」は、国隆の嫡男中村太郎時隆の流れをくむ大野一族であり、亀甲一帯に所領を得ていた宗善が子息の源太郎に宛てた文書で、大野氏の研究にとって貴重な資料となっている。(史料①参照)

清源寺は、南北朝期に高瀬へ進出して拠点をのこした菊池氏系の高瀬氏によって整備された寺院で高瀬五山の一つである。この文書のあて先となっている「源太郎殿」は、不明とされるが清源寺に関わりのある人物とされ、大野一族である紀宗善が高瀬より撤退を余儀なくされた大友氏へ対し、自らの地位や大野氏の栄光を強調し、誇張しながら書かれたものと考えられている。



第45図 中世における大野別符領域区域図

No.	遺跡名	所在地	伝城主
1	築地池下遺跡	築地池下	—
2	築地館跡	築地陣内	築地氏(大野一族)
3	日嶽城跡	岱明町開田	大野一族
4	古城跡	岱明町開田	大野一族
5	中村館跡	春出	大野加志麻呂
6	築地次郎国秀館跡	岱明町下前原	築地次郎国秀
7	上村城跡	岱明町上	大野一族
8	高道城跡	岱明町高道	大野一族
—	高岡屋敷跡	山田	大野国隆
—	岩崎城跡	岩崎	岩崎氏
—	中尾城跡・ホカンヤカタ	中尾	不明
—	陣館跡	岱明町三崎	不明
—	下村城跡	岱明町大野下	
—	扇崎北垣右京居館跡	岱明町扇崎	北垣右京

第8表 築地池下遺跡と大野一族関係城館一覧



大野家之次第、無存知候之間、大概書記候、其昔関東ヨリ直二被成御下知候、然者八幡別当紀國隆法名清源御恩地ヲ被下、建久四年卯月二日御教書ヲ頂戴候而、八日関東ヲ被罷立、肥後国玉名郡之内大野二百五十町被給、中尾高岡居屋敷ニテ子ヲ男子三人・女子五人被持候、彼男子三人二八十五町ツ、被讓候、嫡子中村太郎時隆ニハ高瀬中村五十町、二男築地之二郎国秀ニハ築地五十五町、三男大野三郎秀隆ニハ居屋敷五十五丁、是三人同前領地被分、此由ヲ関東江被申上、幕紋迄も別々ニ被申下、中村太郎時隆ニハ三亀甲之内、亀之丸、築地二郎国秀ニハおしたか形葉、大野三郎秀隆ニハ六葉亀甲、男子三人ニハ如此、去而女子五人ニハ入翠ニテ中尾・山田・岩崎・尾崎・河崎・是五人ハ我々幕紋也、大野八名衆与申事ハ、男女八人之分、去二よつて其分ニ申候、然間あたる番候ツ、三男大野惣領職被継候、其ヨリ大野十郎代 申来候、前原・野口・高遠ハ築地之内ニ候歟、西窪、大野庶子分ニ候歟、我等名字之事、本ハ嫡家之流、中村名字ニテ候しかとも、中村被持放候而ヨリ、亀甲之名字ニ候、名字ハ末代ニ相残事ニ候、家々連続不知候而ハ不覚第一、名字しか可取取候、大形之覚分書付進候、仍為後日状如件、

弘治三年己三月吉日  
源太郎殿

亀甲伊豆入道  
紀宗善

これによれば、大野一族により所領が分割されていた様子などが伺えるが、中に築地氏の名がみえる。元寇の際に従軍して、恩賞を授かったという武士の中に、築地諸太郎隆能が居り、この頃から築地氏を名乗っていたことがわかるのであるが、大野氏は、紀氏とも称しており、他に中村氏、築地氏と三系に分かれていたとされている。紀氏は、主に玉名郡西部の大野別府を開発し、中村氏は高瀬や、現在の中、春出地区を中心に支配して「中村館跡」を築いたものと考えられる。

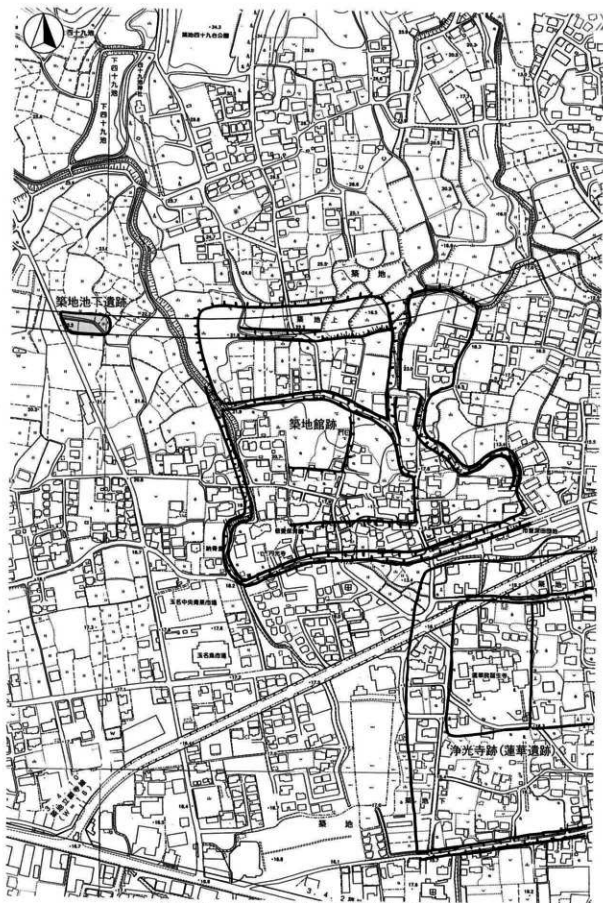
一方で、築地氏は、現在の築地一帯を本拠地として、岱明町の前原や高道、滑石なども勢力圏であって、大規模な寺院であった浄光寺との関連もあったとされる。浄光寺跡から出土した五輪塔地輪の在銘が築地氏と推定される法名ということもあり、このすぐ北西に位置する築地館が大野一族である築地氏の居館と推定されてきた。

## (2) 大野氏の居館「築地館」について

築地尚直の館跡とされ、北西側に掘と土塁が残存する。尚直の子孫と語り継がれる築地家には五輪塔数基を含む歴史墓地があり、また館跡には「平家落人の墓」と称される五輪塔1基や、「勅使墓」という自然石がある。以前からの表採遺物に土師器・瓦器・須恵器の破片がある。

平成14年度の調査では、南東側の掘と考えられる遺構を確認し、中から瓦器が出土している。また、平成20年度の調査では、南北方向に延びる溝状の遺構などが確認されている。

この館跡の全容は不明であるが、現地踏査やこれまでの遺物散布の調査結果などから東西約600m、南北約700mの規模が想定され、春出に存在する大野一族の中村氏居館とされる「中村館跡」に次ぐ広さである。特に地割からみると西側の友田川を端として、北側はパイパス路線とほぼ重なる位置に掘切状の落ち込みがある範囲、東側は、台地が急に段落ちして、谷状に低くなっていき防衛的にも良好な立地だったと考えられる。この範囲の中央部に現在、小さな祠が建つ所があるが、この付近が館の中心(主郭)であった可能性がある。



第 47 図 築地池下遺跡と築地館跡 (推定範囲)

『玉名郡誌』によれば、「夫より築地と申者四神相応之地に而先つ陣之内を築き、前は晒表の一標木を見渡し、則前朱雀也。裏は日嶽城に続き候大池にて（中略）」とあり、これは築地の陣内にあった築地氏の館が、東は青龍で流水、西は白虎で大道、南は朱雀で平地、北は玄武で丘になった四神相応の適地であったことを示すといわれている。

### （3）その他の大野氏の城と居館

日嶽城は、岱明町開田にあり、別名は開田城、鶴城。標高 208 m の山城であり代々大野氏の居城であったが、筒ヶ嶽城主の小代氏と領地境界などをめぐって不和となり、天正 10(1582)年に交戦し、小代氏に滅ぼされる。日嶽の山頂にある楕円形の平地が主郭と考えられ、中央部には花崗岩からなる自然の巨石が数個あり、シンボリックな存在となっている。遺構の状態は不明であるが、山裾には壘堀状の窪地などがみられる。また、南麓の「小城」という字名の小山にも平坦地があり、ここが亀城と呼ばれ、別郭にあたるものと想定される。

高道城は岱明町高道に位置し、大野一族である池松貞胤の居城とされ、天正 10(1582)年に竜造寺氏との戦いに敗れ落城した。この戦いによって、大野氏は滅亡したとされる。

現在、菅原神社が建っている高台が主郭と思われ、以前に整地の際に板碑 1 基と礎石の可能性がある自然石が 3 個出土し移設されている。また、「まつば（的場）」や「きちまる（祈禱丸）」の小字名が残り、祈禱丸は、祭事などを行った場所と考えられる。北西端には、現在も水濤が残存し、西大手口付近には土塁が良好に残存している部分がある。

#### 【今後の課題】

「大野」という別符の名称の由来は「荒野の広がる開発予定地」を意味しているとされ、別符の成立当初は千拓以前であって海岸が入り組み、土地のあり方として肥沃な農業適地ではなく、「開田」という中世期の地名からしても、領主大野氏主導による開発の成果を表しているとされている（小川 2005）。

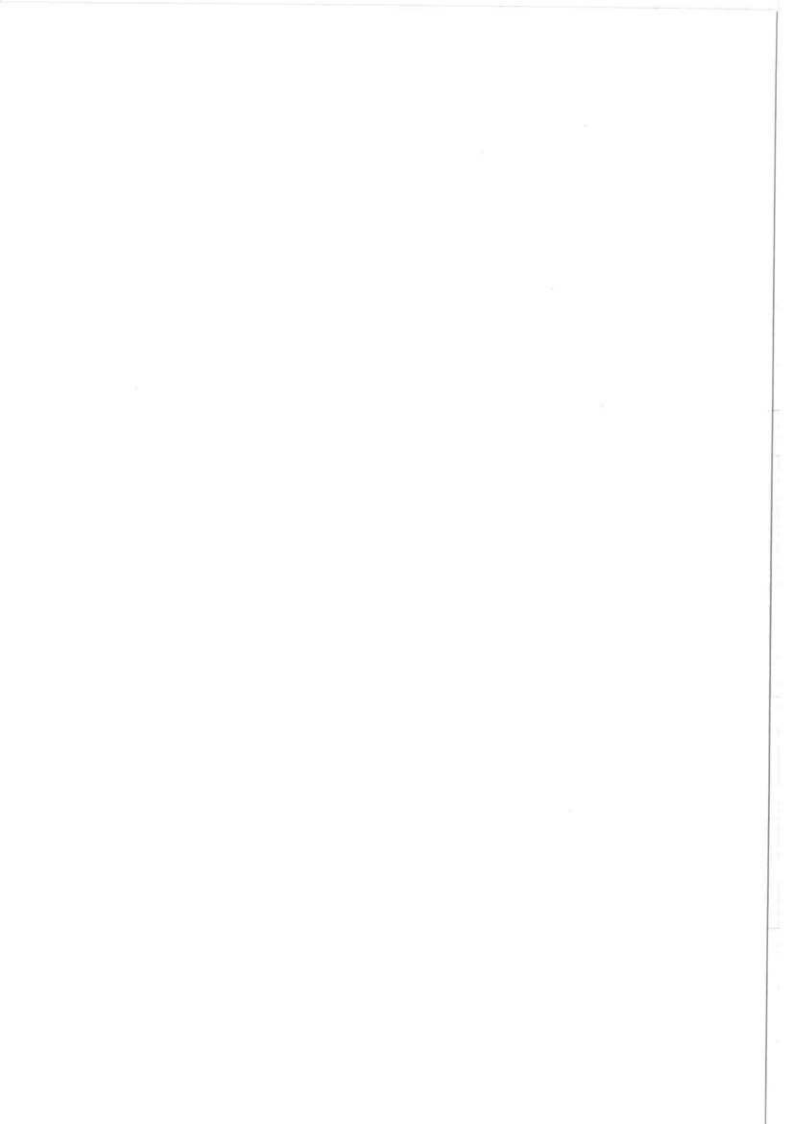
これまで触れたように周辺には大野氏関係の居館が多く残されているが資料も乏しく、発掘調査例も少ないことから不明点が多くある。

築地池下遺跡は、玉名バイパス建設に伴って試掘されて発見された遺跡であるが、友田川の上流域にあって、小代山から湧き流れてくる水流は、大雨などによって時には段丘低地に氾濫をもたらしただようである。しかし、この水源が居館にも必要であり、また大野別府領主として支配下にあったこの築地一帯も、荒地を開発し、田畑を拡大することなどによって民の生活を潤す努力が行われていたであろう。南北方向に残る旧流路などを再利用して何度か水路を掘りかえし、氾濫を避けようとしていたような様子が伺える。

しかし、力不足により十分な調査ができなかったことは反省すべきであり、今後の調査が進む中で新たな事実が解明されるであろう。そのような中で、この遺跡の性格などを見直す必要もある。

## 〈参考文献〉

- 田添夏喜 「浄光寺跡周辺の遺跡各説」『浄光寺跡寺域確認調査』玉名市文化財調査報告第7集  
玉名市教育委員会 1989
- 河原 巧 『開田宮崎八幡宮考証（前編）』『歴史玉名』第29号 玉名歴史研究会 1997年
- 田代 清 『隼峯の今昔』『歴史玉名』第3号 玉名歴史研究会 1990年
- 田中康雄 『東南大門遺跡』玉名市文化財調査報告第8集 玉名市教育委員会 2001
- 末永 崇 『岩崎城跡』玉名市文化財調査報告第12集 玉名市教育委員会 2002
- 末永 崇 『玉名市内遺跡調査報告書Ⅱ』玉名市文化財調査報告第12集 玉名市教育委員会 2004
- 末永 崇 『今見堂遺跡・平町遺跡・蓮華遺跡』玉名市文化財調査報告第10集 玉名市教育委員会 2004
- 末永 崇 玉名市歴史ガイドブック『ふるさと文化財探訪』玉名市教育委員会 2008
- 後藤貴美子 『平嶋遺跡』熊本県文化財調査報告書第204号 熊本県教育委員会 2001
- 熊本県教育委員会編 『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告第30集 熊本県教育委員会 1978
- 岱明町文化財保護委員会 「根小屋式山城日嶽城—中世の山城日嶽城跡・古城跡調査報告」『歴史玉名』  
第16号 玉名歴史研究会 1994
- 門岡 久 『岱明町地方史』岱明町役場 1969
- 門岡 久 「紀姓大野氏への疑問—前原家系に関連して—」『歴史玉名』第12号 1993
- 北野 隆 『稲佐城跡』玉東町文化財調査報告第2集 玉東町教育委員会 1989
- 田添夏喜 『第二篇 原始』『玉名市史』（通史篇・上巻）玉名市 2005
- 田辺哲夫 『第三篇 古代』『玉名市史』（通史篇・上巻）玉名市 2005
- 小川弘和 「古代・中世篇」『岱明町史』岱明町 2005
- 木下 良 「肥後の古代交通路」『火の国の原像』熊本地名研究会 1995
- 田辺哲夫 「玉名の歴史—縄文（二）・弥生時代」『歴史玉名研究会第3号』玉名歴史研究会 1990
- 岡本真也 『前田遺跡』熊本県文化財調査報告書第225集 熊本県教育委員会 2005
- 兵谷有利 『玉名市内遺跡報告書Ⅲ』玉名市文化財調査報告書第15集 玉名市教育委員会 2006





第9表 建物観察表

序号	建物	グッド	取上	法量(m <sup>2</sup> )	用途	外観	色調	内面	外面	内面	外面	断面	備考
14 1	弥生土跡 塼	5001系	(1) 457 (4.3)			淡黄褐色	10YR8/4	黄灰色	2.5Y4/1	ナヅか	ナヅか		断面→2mmの白色砂粒を含む
14 2	弥生土跡 塼	5001系	(1) 419 (5.0)			褐色	7.5YR8/4	黒灰色	10YR5/1	ナヅか	ナヅか		断面→0.5mmの赤色砂粒、断面→1mmの黒色砂粒を含む
14 3	弥生土跡 鉢	5001系	(1) 468 (4.5)			にぶい黄褐色	10YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/4	断面につき不明	断面につき不明		断面→5mm大の白色砂粒を含む
14 4	弥生土跡 塼	5001系	(1) 481 (4.6)	(14.5)		にぶい黄褐色	10YR7/4	灰黄褐色	10YR5/2	ナヅ・ハケム	ナヅか		断面→0.5mmの黒色・赤色砂粒、断面→2mmの白色砂粒を含む
14 5	弥生土跡 塼	5001系	(1) 417 (4.5)	(17.0)		淡黄褐色	10YR8/4	にぶい黄褐色	10YR7/4	ナヅか	ナヅか		断面→2mmの赤色砂粒、断面→3mmの白色砂粒を含む
14 6	弥生土跡 厨付鉢	5001系	(1) 465 (5.0)		(8)	褐色	7.5YR7/6	淡黄褐色	7.5YR8/4	ナヅ	ナヅ		断面→6mmの白色砂粒を含む
14 7	弥生土跡 厨付鉢	5001系	(1) 438 (5.0)		(11)	にぶい黄褐色	7.5YR7/4	褐色	5YR6/5	ナヅ	ナヅ		断面→6mmの白色砂粒を含む
14 8	弥生土跡 塼	5001系	(1) 429 (5.3)		(12)	淡黄褐色	10YR8/4	淡黄褐色	10YR8/4	断面につき不明	断面につき不明		断面→3mm大の白色砂粒を含む
14 9	弥生土跡 塼	5001系	(1) 435 (5.0)			褐色	7.5YR7/6	褐色	7.5YR7/6	ナヅ	ナヅ		断面→3mm大の白色砂粒を含む
15 10	弥生土跡 厨付鉢	5001系	(1) 433 (5.6)			淡黄褐色	10YR8/4	淡黄褐色	10YR8/4	断面につき不明	断面につき不明		断面→3mm大の白色砂粒を含む
15 11	弥生土跡 高坪	5001系	(1) 439 (3.1)	5.4		灰黄褐色	10YR6/2	にぶい褐色	7.5YR7/3	ハケム後ナヅか	断面につき不明		断面→1mmの赤色砂粒、断面→4mmの白色砂粒を含む
15 12	弥生土跡 高坪	5001系	(1) 489 (3.2)			黒色	NZ	褐色	7.5YR6/5	断面につき不明	断面につき不明		断面→2mm大の白色砂粒を含む
15 13	弥生土跡 高坪	5001系	(1) 482 (2.7)			黄褐色	7.5YR8/8	黄褐色	10YR8/6	断面につき不明	断面につき不明		断面→2mm大の白色砂粒を含む
15 14	弥生土跡 塼	5001系	(1) 443 (5.1)	(18.4)		淡黄褐色	10YR8/4	淡黄褐色	10YR8/4	ナヅか	ナヅか		断面→2mm大の白色砂粒を含む
15 15	弥生土跡 塼	5001系	(1) 448 (5.4)			にぶい黄褐色	10YR7/4	淡黄褐色	10YR8/4	ナヅか	ナヅか		断面→2mm大の白色砂粒を含む
15 16	弥生土跡 塼	5001系	(1) 465 (5.1)			褐色	7.5YR7/6	淡黄褐色	7.5YR7/4	ナヅ	ハケム		断面→1mm大の白色砂粒を含む
15 17	弥生土跡 塼	5001系	(1) 447 (3.0)		6.4	にぶい黄褐色	10YR7/4	にぶい黄褐色	10YR8/3	ナヅ	ナヅ		断面→2mm大の白色砂粒、断面→0.5mmの黒色・赤色砂粒を含む
15 18	彌生土跡 塼	5001系	(1) 472 (7.3)			褐色	7.5YR7/6	黒褐色	2.5Y3/2	断面につき不明	断面につき不明		断面→2mmの白色砂粒を含む
15 19	彌生土跡 塼	EFAMU 5001系 5001系	331.35 2,430 15.4			灰色	10Y6/1	灰色	10Y6/1	断面ナヅ・断面 ヘラケズリ	断面ナヅ		1mm大の白色砂粒をわずかに含む
16 20	弥生土跡 塼	5001系 5001系 5001系	(1) 446 (4.6) (2) 515 (4.7) (2) 498	10.4		にぶい黄褐色	10YR6/4	にぶい黄褐色	10YR6/4	ナヅ・ハケム	ナヅ・ハケム		断面→2mm大の白色砂粒を多く含む
16 21	弥生土跡 塼	5001系	(2) 503 (3.2)	(10.4)	5.4	灰黄褐色	10YR5/2	灰黄褐色	10YR4/2	ナヅ・ハケム	ナヅ・ハケム		断面→2mm大の白色砂粒を多く含む
16 22	弥生土跡 塼	5001系	(2) 477 (3.2)			褐色	10YR4/1	にぶい黄褐色	10YR7/3	ハケム	ハケム後ナヅ		断面→2mm大の白色砂粒を多く含む
16 23	弥生土跡 塼	5001系	(2) 481 (3.17)	(19.6)	5.6	にぶい黄褐色	10YR6/4	にぶい褐色	7.5YR6/3	ハケム	ナヅ・ハケム		断面→1mm大の白色砂粒を多く含む
16 24	弥生土跡 ジョッキ	5001系 5001系	(1) 480 (4.7) (2) 497	(16.7)	(15.6)	淡黄褐色	10YR8/3	淡黄褐色	10YR8/3	ナヅか・ハケム	ナヅか・ハケム		断面→1mm大の白色砂粒を少量含む
16 25	弥生土跡 厨付鉢	5001系	(2) 486 (3.7)	10.4	11.9	にぶい黄褐色	7.5YR6/4	褐色	5YR5/5	ハケム・ナヅ/ハ ケム後ナヅ	ハケム・ナヅ		断面→2mm大の白色砂粒、断面→3mmの白色砂粒を含む
16 26	弥生土跡 塼	5001系	(2) 509 (3.7)			褐色	7.5YR6/8	にぶい褐色	2.5YR5/6	ナヅか	ナヅか		断面→2mm大の白色砂粒、断面→3mmの白色砂粒を含む
16 27	弥生土跡 (小皿)	5001系	(2) 402 (2.9)		5.2	淡黄褐色	10YR8/3	淡黄褐色	10YR8/3	ナヅ	ナヅ		断面→2mm大の白色砂粒を多く含む
16 28	弥生土跡 塼	5001系	(2) 510 (3.8)		(8.6)	にぶい褐色	7.5YR6/4	褐色	7.5YR6/6	ナヅか	ナヅ		断面→1mm大の白色砂粒を多く含む

圃地 番号	圃地 番号	圃地 種類	グロッド 通称	圃地 位置	圃地 面積 (㎡)	高さ (cm)	口径 (mm)	色 調			設置位置		備考	
								外壁	内壁	内蓋	外 壁	内 壁		
16	29	弥生土器	S001※ S001通称	1	504 491	216	(220)	透黄褐色	7.5YR8/4	透黄褐色	7.5YR8/6	ナデ	ナデ	黒紺~2m大の白色砂粒をやや多く、細かい赤色、黒色砂粒をまばらに含む
16	30	弥生土器	S001	2	469	(6.5)	102	透黄褐色	10YR7/3	透黄褐色	10YR8/3	ナデ	ハケメ・ナデ	黒紺~1m大の白色砂粒を多く含む
16	31	弥生土器	S001	(2)	508	(30)	84	透黄褐色	10YR8/3	透黄褐色	10YR8/3	ナデ	ナデ	黒紺~1m大の白色砂粒を多く含む
16	32	弥生土器	S001	(2)	507	(9.5)	90	灰白色	10YR8/2	透黄褐色	10YR8/4	ナデ	ナデ	黒紺~1m大の白色、赤色砂粒をやや多く含む
16	33	弥生土器	S001	(2)	506	(7.5)	(13.0)	透黄褐色	7.5YR8/6	にぶい黄褐色	10YR7/4	ナデ	ナデ	黒紺~1m大の白色砂粒を少量含む
17	34	弥生土器	D3	陸奥	51-1	(4.0)		灰白色	2.5Y7/1	にぶい黄褐色	10YR8/3	ナデ	ナデ	黒紺~1m大の白色砂粒を多く含む
17	35	弥生土器	A3NE	lie	54-1	(3.0)		灰黄褐色	10YR4/2	黒褐色	2.5Y3/1	ハケメ	ハケメ	黒紺~6m大の白色砂粒を多く含む
17	36	弥生土器	A2	lie	2	(6.9)	(17.2)	にぶい黄褐色	10YR7/2	にぶい黄褐色	10YR7/2	ナデ	ナデ	黒紺~1m大の砂粒を多く含む
17	37	弥生土器	E1-SW	IVc-10	391	(5.5)		にぶい黄褐色	7YR7/4	にぶい褐色	7YR7/4	ナデ	ナデ	黒紺~3m大の白色砂粒を多く含む
17	38	弥生土器	E1-SW	IVc-10	392	(11.1)		にぶい黄褐色	10YR7/3	灰白色	2.5Y7/2	ナデ	ナデ	黒紺~3m大の白色砂粒を多く含む
17	39	弥生土器	B9-SW	lie	317-2	(4.0)		透黄褐色	7.5YR8/6	透黄褐色	10YR7/4	ナデ	ナデ	黒紺~3m大の白色砂粒を多く含む
17	40	弥生土器	E3-SW F3	ic lb	46 349	(10.9)	(14.3)	褐色	7.5YR8/6	灰黄褐色	10YR6/2	ナデ	ナデ	黒紺~3m大の白色砂粒を多く含む
17	41	弥生土器	E3-SW Ic	lb 349	349	(14.5)		灰黄褐色	10YR6/2	褐灰色	10YR6/1	ハケメ・ナデ	ナデ	黒紺~2m大の白色砂粒を多く含む
17	42	弥生土器	E1-SW	IVc②	397	16.5	11.8	にぶい褐色	7.5YR8/4	にぶい褐色	7.5YR8/4	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	黒紺~2m大の白色砂粒を多く含む
17	43	弥生土器	C3-NW	IIb	123	(2.2)		透黄褐色	7.5YR7/6	褐色	7.5Y7/6	ナデ	ナデ	黒紺~1m大の黒色砂粒、黒紺~3mの白色砂粒を多く含む
17	44	弥生土器	B9-SW	IIIb-2	146	(2.1)		褐色	7.5YR7/6	褐色	5YR7/6	ナデ	ナデ	黒紺~5m大の白色砂粒を多く含む
17	45	弥生土器	E1-SW	IVc③	398	(4.3)		暗赤褐色	2.5YR6/8	褐色	2.5YR8/3	ナデ	ナデ	黒紺~2mの赤色砂粒、黒紺~4mの白色砂粒を多く含む
17	46	弥生土器	C3-NW	IV	397	(5.9)		褐色	2.5YR6/6	にぶい黄褐色	2.5YR6/6	ナデ	ナデ	1~3m大の白色砂粒を多く含む
17	47	弥生土器	C3-NW	IV	397	(5.9)	(11.6)	にぶい黄褐色	10YR7/4	にぶい黄褐色	10YR7/4	ナデ	ナデ	1~3m大の白色砂粒を少量含む
17	48	弥生土器	B9-SW	Va	187	(2.7)	(9.4)	透黄褐色	10YR8/3	透黄褐色	10YR8/3	ナデ	ナデ	1m大の白色砂粒を多く含む
17	49	弥生土器	E1-SW	IVb-1	406	(3.4)	(9.6)	褐色	2.5YR/8	灰黄褐色	10YR6/2	ナデ	ナデ	黒紺~2m大の白色、褐色砂粒をやや多く含む
17	50	弥生土器	C3-SE	IV	372	(3.1)	(9.4)	透黄褐色	10YR8/3	灰白色	2.5Y/2	ナデ	ナデ	黒紺~2m大の白色砂粒を大量に含む
23	51	土師器	S002	4	231	(5.1)	(16.6)	褐色	5YR7/6	透黄褐色	7.5YR6/4	黒紺ナデ	黒紺ナデ	黒紺~5m大の白色砂粒、黒紺~1m大の赤色砂粒を含む
23	52	弥生土器	S002	1	202	(4.5)		透黄褐色	10YR8/3	褐色	7.5YR7/6	ナデ	ナデ	黒紺~3mの白色砂粒を含む
23	53	弥生土器	S002	4	228	(3.9)		褐色	2.5YR7/6	灰白色	10YR8/2	黒紺につま不明	黒紺につま不明	黒紺~2m大の褐色、白色砂粒、黒紺~4m大の赤色砂粒を含む
23	54	弥生土器	S002	4	279	(2.7)	8.8	にぶい黄褐色	10YR7/3	灰黄褐色	10YR6/2	ナデ	ナデ	黒紺~3m大の白色砂粒を大量に含む
23	55	弥生土器	S002	4	240	(3.0)	(10.0)	褐色	5YR6/6	褐色	5YR6/6	ナデ	ナデ	黒紺~3m大の白色砂粒を多く含む
23	56	弥生土器	S002	4	227	(2.1)	(11.2)	にぶい褐色	7.5YR8/4	にぶい褐色	7.5YR6/4	ナデ	ナデ	黒紺~2m大の白色砂粒を多く含む
23	57	土師器	S002	2	197	(2.1)		透黄褐色	10YR6/4	透黄褐色	10YR6/4	ミガキ	ミガキ	黒紺~3m大の白色砂粒をやや多く含む
23	58	土師器	S002	4	223	(5.3)	(16.6)	透黄褐色 褐色	10YR9/3 7.5YR7/6	透黄褐色 褐色	2.5YR7/6 7.5YR8/3	黒紺ナデ	黒紺ナデ	黒紺~2m大の白色砂粒を含む



種別	番号	品名	規格	ブランド	取上	高さ	口径	容量(cm <sup>3</sup> )	口径	底径	外径	内径	色調	外蓋	内蓋	蓋	仕	備考
24	89	土師器	壺	S002	4	239	1.3	(9.2)	(8.4)		7.5YR7/6	7.5YR7/6	褐色	面取ナデ	面取ナデ	面取ナデ	細かい白色砂粒を少量含む	
24	90	土師器	壺	S002	4	230	1.2	(9.0)	(7.9)		7.5YR7/6	10YR7/4	にがい黄色	面取ナデ	面取ナデ	面取ナデ	細かい白色砂粒をばらばらに含む	
24	91	土師器	壺	S002	1	229	1.4	8.6	7.2		7.5YR8/4	7.5YR8/4	透黄褐色	面取ナデ	面取ナデ	ナデか	細かい白色砂粒を含む	
24	92	土師器	壺	S002	1	189	2.6	(13.6)	(10.4)		7.5YR7/4	10YR7/4	にがい黄色	面取ナデ	面取ナデ	面取ナデ	細～5mm次の白色砂粒、黒細～1mm次の赤色砂粒を含む	
24	93	土師器	壺	S002	4	235	1.5	9.2	7.8		5YR7/6	5YR7/6	褐色	面取ナデ	面取ナデ	面取ナデ	細～1mm次の白色砂粒を少量含む	全蓋赤砂
24	94	土師器	壺	S002	4	217	1.5	9.4	7.5		2.5Y7/2	2.5Y7/2	灰黄色	面取ナデ	面取ナデ	面取ナデ	細かい白色砂粒を少量含む	
24	95	土師器	壺	S002	3	341	2.6	(14.0)	(10.2)		10YR8/4	10YR8/4	にがい黄褐色	面取ナデ	面取ナデ	面取ナデ	細かい白色、赤色砂粒を少量、3mm次の白色砂粒をこくわずかに含む	
24	96	土師器	壺	S002	2	326	(4.0)				10YR7/3	10YR7/3	にがい黄褐色	面取ナデ	面取ナデ	面取ナデ	細～1mm次の白色、赤色、黒色砂粒を多く含む	
25	97	弥生土師器	壺	S004	最下層	395	(5.7)				10YR8/2	10YR8/2	灰白色	ナデか	ナデか	ナデか	細～1mm次の白色砂粒を少量含む	
25	98	土師器	壺	S004	最下層	396	(4.0)				5YR7/4	5YR7/4	灰黄褐色	面取ナデ	面取ナデ	面取ナデ	細～1mm次の白色砂粒を少量含む	
25	99	瓦器	壺	S004	—	339	(4.8)	(14.0)			5YR7/4	5YR7/4	オリーフ黄色	面取ナデ	面取ナデ	面取ナデ	細～1mm次の白色砂粒をこくわずかに含む	
25	100	土師器	壺	S004	最下層	396	(1.8)				7.5YR8/6	7.5YR8/6	透黄褐色	面取ナデ	面取ナデ	面取ナデ	細かい白色、赤色、黒色砂粒をわずかに含む	
25	101	瓦器	壺	S005	1	282	(3.8)				5YR7/1	5YR7/1	灰白色	面取ナデ	面取ナデ	面取ナデ	細かい白色、黒色砂粒をわずかに含む	元は弥生土?
25	102	土師器	壺	S005	1	281	3.6	3.5	1.1	17	にがい褐色	7.5YR8/4	にがい黄褐色	ハケム	ナデか	ナデか	1mm次の白色、黒色砂粒を多く含む	
25	103	縄文土師器	壺	S005西側	2	401	(4.3)				7.5YR5/3	7.5YR5/3	にがい褐色	ナデか	ナデか	ナデか	細～2mm次の白色砂粒を多く含む	
26	104	縄文土師器	壺	B2-SE	Va	185	(2.6)				にがい黄褐色	10YR5/2	にがい黄褐色	ナデ	ナデ	ナデ	細～1mm次の白色砂粒を多く含む	
26	105	縄文土師器	壺	B2-SE	Va	187	(4.1)				にがい黄褐色	10YR6/2	灰黄褐色	ナデ	ナデ	ナデ	1mm次の白色砂粒を少量に含む	
26	106	縄文土師器	壺	B2-SE	Va	187	(10.0)				灰黄褐色	10YR6/2	にがい黄褐色	不明	不明	不明	1mm次の白色砂粒を少量に含む	
26	107	土師器	壺	B2-SW	V	358	(2.6)				にがい黄褐色	10YR7/3	にがい黄褐色	ナデ	ナデ	ナデ	細～1.5mm次の砂粒、黒褐色を含む	
26	108	土師器	壺	C2-SW	V	361-1	(3.2)				にがい黄褐色	10YR7/4	にがい黄褐色	ナデ	ナデ	ナデ	細～2mm次の赤色砂粒を含む	
26	109	土師器	壺	D2-NE	Va	368	(3.4)				5YR8/6	5YR8/6	褐色	ナデか	ナデか	ナデか	細～2mm次の赤色砂粒を多く含む	
26	110	土師器	壺	C2-SE	Vd	390	(5.2)	(16.4)			灰白色	10YR8/2	透黄褐色	ナデか	ナデか	ナデか	細～1mm次の白色、黒色砂粒を多く含む	
26	111	土師器	壺	C3-NW	IV	381	(6.3)	(16.6)			褐色	5YR8/6	7.5YR8/3	ハケム	ナデか	ナデか	細～1mm次の砂粒を多く、2～3mm次の砂粒を少量含む	
26	112	土師器	壺	B2-NE	V	359-1	(3.4)				にがい黄褐色	10YR8/4	にがい褐色	ナデ	ナデ	ナデ	細～1mm次の白色砂粒、黒褐色を含む	
26	113	土師器	壺	B2-SE	Va	187	(3.1)				にがい黄褐色	10YR8/3	にがい黄褐色	面取ナデ	面取ナデ	面取ナデ	細～1mm次の白色砂粒、黒褐色を含む	赤砂の混入
26	114	土師器	壺	B2-NE	V	359-2	(3.3)	(12.2)			褐色	2.5YR6/6	褐色	ナデ	ナデ	ナデ	細～2mm次の白色砂粒をわずかに含む	
26	115	土師器	壺	C2-SE	Vd	380	(3.1)	(13.6)			黒褐色	10YR3/1	黒褐色	ナデ	ナデ	ナデ	細～1mm次の赤色砂粒を含む	赤砂の混入
26	116	土師器	壺	C2-SW	Vd(0)	366	4.5	13.4			にがい褐色	7.5YR6/4	にがい褐色	ナデ	ナデ	ナデ	細～1mm次の白色砂粒を多く含む	
26	117	土師器	壺	C2-SE	IVc-1	364	(3.4)	(13.6)			褐色	7.5YR4/1	にがい褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	細かい白色砂粒をわずかに含む	黒色砂混
26	118	土師器	壺	D2-NE	IIIc	252-3	(1.4)				にがい黄褐色	10YR7/3	黄灰色	面取ナデ	面取ナデ	面取ナデ	細～1mm次の砂粒、赤色砂粒を含む	黒色土混

種類 番号	品名	グリッド 変換	加工 番号	法 量 (mm)	色 質		特 異 部 寸		備 考	
					外 観	内 観	外 観	内 観		
26 119	須賀砂	変	A3NE	IIIc	300-2 (22)					潤滑～2mmの白色砂粒を含む
26 120	須賀砂	変	C3NE	Va	409 4.2	にぶい黄褐色	10YR7/4	ナナ	ナナ	潤滑～2mmの白色砂粒をまばらに含む
26 121	須賀砂	変	C3SE	IIIc-IV	403 (3.9)	灰白色	N6/	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～2mmの白色、赤色砂粒を少量含む
26 122	須賀砂	変	C3NE	IIIe-IV	398 (2.9)	にぶい褐色	10YR8/4 10YR7/3	潤滑ナナか ナナ	潤滑ナナか	潤滑～1mm次の白色砂粒をまばらに含む
26 123	須賀砂	変	D2-SW	IIIId	279-3 (1.9)	灰白色	N7/	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～1.5mmの白色砂粒を含む
26 124	須賀砂	変	C3-SE	IIIc	250-2 (1.8)	灰白色	2.5Y7/1	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～3mm次の白色砂粒を含む
26 125	須賀砂	変	C3NE	IVd	385 (1.7)	灰白色	2.5Y4/1	潤滑ナナ	潤滑ナナ	1mm次の黒色砂粒をわずかに含む
26 126	須賀砂	変	E2	概丸	45-1 (4.1)	灰色	N6/	ナナ・タナキ	ナナ	潤滑～2mm次の砂粒を含む
26 127	須賀砂	変	A3-SW	IIIe	355-2 (1.5)	灰黄色	2.5Y7/2	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～0.5mmの黒色砂粒を含む
26 128	須賀砂	変	E1-SW	IV	375 4.7	灰色	5Y6/1	潤滑ナナ	潤滑ナナ	1mm次の黒色砂粒を少量含む
26 129	須賀砂	変	B3NE	IIIc	274-2 2.3	灰白色	N7/	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～2mmの黒色砂粒を少量含む
26 130	須賀砂	変	C3-SW D1-SE D1-SE D1-SE	- IVc-IVd IVa IVa	413 3.8 393 5.8 389 3.8 289-1 (1.5)	にぶい褐色 褐色 褐色	10YR8/3 10YR7/3 10YR7/3	潤滑ナナ・不足 方面のナナ	潤滑ナナ	潤滑～3mmの白色砂粒をわずかに含む
26 132	須賀砂	変	D2-SW	IIIc	268-1 (1.5)	黄灰色	2.5Y6/1	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～3mmの白色砂粒、潤滑～1mmの黒色砂粒を含む
26 134	土師砂	変	E1-SW	IIIId	276 1.2	にぶい黄褐色	10YR7/4	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～1mmの白色砂粒を含む
26 135	土師砂	変	D2-SW	IIIc	253 1.4	濃黄褐色	7.5Y8/6	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～0.5mm次の白色砂粒を含む
26 136	土師砂	変	C3-SE	IIIc	250-1 2.8	にぶい黄褐色	10YR7/4	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～1mm次の白色、赤色砂粒を含む
26 137	土師砂	変	B3-SE	IIIc	317-1 2.7	褐色	5YR7/5	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～0.5mm次の白色砂粒を多く、1～2mm次の砂粒を含む
26 138	土師砂	変	B3-SW	IIIc	316 2.5	褐色	5YR8/6	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～0.5mm次の白色砂粒を多く、1～2mm次の砂粒を含む
27 139	土師砂	変	E1-SW	IVc-IVd	389 2.3	にぶい褐色	5YR8/4	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～1mm次の白色砂粒を多く、潤滑～0.5mmの黒色砂粒をまばらに含む
27 140	土師砂	変	D2-SW	IIIc	304-2 3.3	濃黄褐色	10YR8/4	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～3mm次の砂粒、潤滑～1mm次の赤色砂粒を含む
27 141	土師砂	変	C1-SE	IIIe	300 2.8	褐色	2.5Y8/8	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～1mmの白色、赤色砂粒を含む
27 142	土師砂	変	A2-SE	IIIb	323 1.7	褐色	5YR8/6	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～0.5mm次の白色砂粒を多く、0.5～2mm次の砂粒をまばらに含む
27 143	土師砂	変	B2-SW	IIIc	304-1 (1.1)	褐色	5YR8/6	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～0.5mm次の白色砂粒を多く、0.5～2mm次の砂粒をまばらに含む
27 144	土師砂	変	E2	概丸	45-2 (2.9)	褐色	2.5Y7/6	ケスリ	ケスリ	潤滑～1mm次の赤色砂粒を少量含む
27 145	互磨 土師砂	変	E2	概丸	45-2 (2.9)	褐色	2.5Y7/6	ケスリ	ケスリ	潤滑～1mm次の赤色砂粒を少量含む
27 146	互磨	変	A3NE	IIIc	318-1 (1.9)	灰色	N6/	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～1mmの黒色砂粒を含む
27 147	互磨	変	A2NE	IIIc	300-1 (2.2)	灰白色	N7/	潤滑ナナ	潤滑ナナ	潤滑～1mmの白色砂粒を含む

試験番号	種類	グリッド	位置	取上	法重(㎊)			色調			経年調整			備考
					経高	開径	口徑	外重	内重	内径	外径	内径	内重	
27 148	互鎖	A3-SE	IIIc	345-1 (28)	灰白色	5Y7/1	灰白色	5Y7/1	灰白色	5Y7/1	面垢ナシ	面垢ナシ	ナシ	面垢~1.5mmの白色砂粒、面垢なし黒色砂粒を含む
27 149	互鎖	C3-NW	IIIc	237 (28)	灰色	5Y6/1	灰色	5Y6/1	黄色	2.5Y8/6	ナシ	ナシ	ナシ	面垢~0.5mmの白色砂粒を含む
27 150	互鎖	D2-NE	IIIc	249-2 (28)	オリーブ灰色	5Y9/1	灰白色	5Y9/1	に少し黄褐色	10YR7/3	ナシ	ナシ	ナシ	面垢~1mmの白色砂粒を含む
27 151	互鎖	D2-NE	IIIc	252-2 (3x)	灰白色	2.5Y8/1	灰白色	2.5Y8/1	灰白色	2.5Y8/1	面垢ナシ	面垢ナシ	ナシ	面垢~2mmの白色砂粒を含む
27 152	互鎖	C2-SW	IIIc	113 (3x)	灰白色	5Y9/1	灰白色	5Y9/1	灰白色	2.5Y8/1	ナシ	ナシ	ナシ	面垢~0.5mmの白色砂粒を含む
27 153	互鎖	D3-NW	IIIc	273-1 (4x)	黄灰色	2.5Y6/1	灰色	5Y5/1	灰色	5Y5/1	ナシ	ナシ	ナシ	面垢~1mmの白色砂粒を含む
27 154	互鎖	A1-SE	IIIc	300-3 (4x)	灰白色	2.5Y8/1	灰白色	2.5Y8/1	灰白色	2.5Y8/2	ナシ	ナシ	ナシ	面垢~2mmの白色砂粒を含む
27 155	互鎖	A2-SE	IIIc	310-1 (3x)	淡黄褐色	10YR8/4	淡黄褐色	10YR8/4	に少し黄褐色	10YR7/4	ナシ	ナシ	ナシ	面垢~1mmの白色砂粒、面垢~2mmの白色砂粒を含む
27 156	互鎖	A2-SE	IIIc	310-3 (5x)	暗灰色	N5/	暗灰色	N5/	暗灰色	2.5Y8/6/1	ナシ	ナシ	不明	不明
27 157	互鎖	A2-NE	IIIc	322 (3x)	暗灰色	N3/	暗灰色	N3/	明黄褐色	10YR8/6	ナシ	ナシ	不明	不明
27 158	互鎖	A2-NE	IIIc	309-2 (1x)	灰白色	10YR8/2	灰白色	10YR8/2	灰白色	2.5Y8/1	面垢ナシ	面垢ナシ	ナシ	面垢~2mmの白色砂粒、面垢なし黒色砂粒を含む
27 159	互鎖	C2-SW	V	361-2 (3x)	灰色	5Y6/1	灰色	5Y6/1	灰色	5Y6/1	面垢ナシ	面垢ナシ	ナシ	面垢~1mmの白色砂粒を含む
27 160	互鎖	A3-NE	IIIc	343-3 (1x)	淡黄褐色	2.5YR8/4	淡黄褐色	2.5YR8/4	に少し黄褐色	10YR7/4	面垢ナシ	面垢ナシ	ナシ	面垢~1mmの白色砂粒を含む
27 161	互鎖	A2-NE	IIIc	309-3 (1.3)	(5.2) 灰褐色	2.5Y7/2	灰色	5Y6/1	灰色	5Y6/1	ナシ	ナシ	ナシ	面垢~1mmの白色砂粒を含む
27 162	互鎖	B2-SW	IIIc	304-3 (1.7)	(5.5) 灰白色	10YR8/2	暗灰色	N3/	暗灰色	N3/	面垢ナシ	面垢ナシ	ナシ	面垢~3mmの白色砂粒を含む
27 163	互鎖	A3-SE	IIIc	295-2 (2x)	黄色	2.5Y8/6	灰白色	5Y6/1	灰白色	N7/	ナシ	ナシ	ナシ	面垢~1mmの白色砂粒を含む
27 164	互鎖	A3-NE	IIIc	343-2 (1x)	灰色	N5/	灰色	7.5Y4/1	灰色	7.5Y4/1	面垢ナシ	面垢ナシ	ナシ	面垢~2mmの白色砂粒を含む
27 165	互鎖	A2-NE	IIIc	309-4 (1.2)	5.7 黄褐色	2.5Y8/3	黄褐色	2.5Y8/4	黄褐色	2.5Y8/4	ナシ	ナシ	ナシ	面垢~1.5mmの白色砂粒を含む
27 166	互鎖	D2-NE	IIIc	243-3 (1.3)	6.3 灰色	7.5Y4/1	黄褐色	2.5Y6/4	黄褐色	2.5Y6/4	ナシ	ナシ	ナシ	面垢~1mmの白色砂粒を含む
27 167	互質二層	B3-NW	IIIc	275 (2.7)	灰色	5Y6/1	灰白色	2.5Y8/1	灰白色	2.5Y8/1	面垢ナシ	面垢ナシ	ナシ	面垢~2mmの黒色砂粒を含む
28 168	互質二層	A3-NE	IIIc	318-3 (5.3)	灰色	N5/	灰色	N5/	灰色	N5/	ナシ	ナシ	ナシ	面垢~5mmの白色砂粒を含む
28 169	互質二層	B1-SE	IIIb-1	175 (4.7)	灰白色	5Y7/1	灰白色	5Y7/1	灰白色	5Y7/1	ナシ	ナシ	ナシ	1mmの白色砂粒をわずかに含む
28 170	互質二層	D3-NE	IIIb	92-2 (1.6)	(8) 青灰色 リニア灰色	5Y5/1	(8) 青灰色 リニア灰色	5Y5/1	(8) 青灰色 リニア灰色	5Y5/1	面垢	面垢	面垢	面垢
28 171	青磁	D2-NW	IIIc	288-2 (2.1)	灰オリーブ色	7.5Y6/2	灰オリーブ色	7.5Y6/2	灰オリーブ色	7.5Y6/2	面垢	面垢	面垢	面垢なし黒色砂粒を含む
29 172	青磁	A1-SE	IIIc	300-2 (1.8)	(8) 青灰色 リニア灰色	2.5C7/1	(8) 青灰色 リニア灰色	2.5C7/1	(8) 青灰色 リニア灰色	10Y8/1	面垢	面垢	面垢	面垢なし砂粒を含む
29 173	青磁	A3-SE	IIIc	285-4 (2.4)	暗灰色	7.5Y6/1	暗灰色	7.5Y6/1	暗灰色	7.5Y6/1	面垢	面垢	面垢	面垢なし黒色砂粒を含む
29 174	青磁	D3-NE	IIIb	92-1 (2.4)	(8) 灰オリーブ色	9Y9/2	(8) 灰オリーブ色	9Y9/2	(8) 灰オリーブ色	5Y7/1	面垢	面垢	面垢	面垢なし黒色砂粒を含む
29 175	青磁	A3-SE	IIIc	285-1 (3.0)	オリーブ灰色	2.5Y6/1	オリーブ灰色	2.5Y6/1	オリーブ灰色	2.5Y6/1	面垢	面垢	面垢	面垢なし黒色砂粒を含む
29 176	青磁	F1	黒乱	34 (2.8)	(8) 灰オリーブ色 暗灰色	7.5Y6/2	(8) 灰オリーブ色 暗灰色	7.5Y6/2	(8) 灰オリーブ色 暗灰色	2.5Y7/1	面垢	面垢	面垢	面垢なし黒色砂粒を含む
29 177	青磁	D2-NW	IIIc	244 (3.0)	暗灰色	10Y8/1	暗灰色	10Y8/1	暗灰色	10Y8/1	面垢	面垢	面垢	面垢なし黒色砂粒を含む 面垢なし黒色砂粒を含む



棟号	階号	部材	仕様	グリッド	取上	法量	色調		設置調整		備考
							外壁	内面	外壁	内面	
30	208	壁	C4-NW	11c-1	197	(1.9)	灰白色	5Y7/1	灰白色	5Y8/1	黒色
30	209	陶器	B44-E	11b-2	178	(1.8)	灰白色	2.5Y8/2	灰白色	2.5Y8/1	黒色
30	210	陶器	E2	既取	45-3	(2.5)	黒色	2.5Y2/1	黒色	5Y2/1	黒色
30	211	陶器	O3	既取	51-2	(3.4)	(特)	5Y7/1	に灰い黄褐色	10YR7/3	黒色
30	212	陶器	B1-SE	11b-4	175	(3.0)	灰白色	5Y7/2	灰白色	5Y7/2	黒色
30	213	陶器	B1-SE	11b-3	175	(3.5)	に灰い黄褐色	5Y8/3	に灰い黄褐色	5Y8/3	黒色
30	214	陶器	B1-SE	11a	142-2	(2.1)	黒褐色	5Y8/3	黒褐色	5Y8/3	黒色
30	215	陶器	F1	1b	22	(3.3)	(特)	2.5Y8/2	灰白色	5Y8/2	黒色

棟号	階号	部材	仕様	グリッド	取上	法量	色調		設置調整	備考	
							外壁	内面			
32	217	石積	黒石列	S001東側	2	402	1.4	0.7	0.2	0.2	黒曜石
32	218	石積	黒石列	C2-NW	V	365	1.5	0.9	0.2	0.3	黒曜石
32	219	石積	二次加工製片	D2-SW	11d	273	3.0	2.3	0.5	3.1	黒曜石
32	220	石積	石積	S004	最下層	365	2.4	2.9	1.8	13.5	黒曜石
32	221	石積	石積	S001	1	350	1.4	1.8	0.4	0.9	黒曜石
32	222	石積	A3-SE	11b	81	1.9	2.0	0.4	1.1	0.4	安山岩 サマカイト系か
32	223	石積	石積	S001西側	(1)	352	2.2	1.5	0.4	1.0	黒曜石
32	224	石積	石積	C1-SW	IV	367	2.0	1.5	0.3	0.6	安山岩 金峰山系か
32	225	石積	石積	B3-SW	11c	286	1.6	1.5	0.3	0.5	安山岩 サマカイト系か
32	226	石積	石積	S001東側	2	402	1.7	1.7	0.4	0.9	黒曜石
32	227	石積	石積	S002	3,4	200	1.1	1.5	0.4	0.5	黒曜石
33	228	石積	黒石(既取)	S002	4	279	1.23	7.6	4.5	5.8	安山岩
33	229	石積	E1-SW	IVa⑤	300	130	9.4	3.7	6.95		安山岩(雄虎岩か)
33	230	石積	砂石	B2-SW	11e	342	24.2	20.0	6.9	46.60	花崗岩か

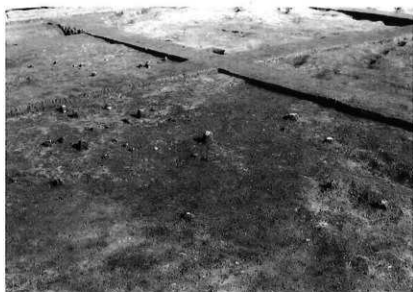
棟号	階号	部材	仕様	グリッド	取上	法量	色調		設置調整	備考						
							外壁	内面								
33	231	土製品	赤石製包圍	D2-NW	11d	269	2.69	2.69	0.2	0.38	外壁面より下にスチッチ					
33	232	土製品	不明	S001	(1)	442	4.42	5.2	1.4	0.3	7.2	サビ付著				
33	233	土製品	刀子か	D2-NW	11c	270	27.0	1.4	5.7	0.6	5.1	サビ付著				
33	234	土製品	甕形口	C3-SE	11c	287	28.7	3.2	4.4	2.8	3.0	灰白色に灰い褐色				
											5Y7/LJ.5Y8/2	灰黄色	2.5Y8/2	ナデか	ナデ	1m×1mの白色砂粒を多く含む。



## 写真図版



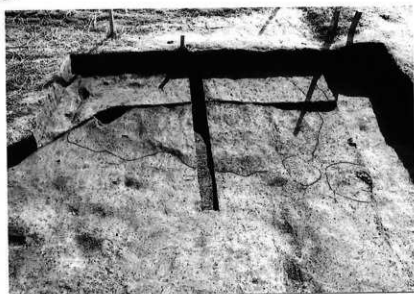
調査前状況  
(西側より築地館跡を望む)



II層遺物出土状況  
(C-3 G)



土層堆積状況  
(C-3 G)



S001 (1層)  
検出状況



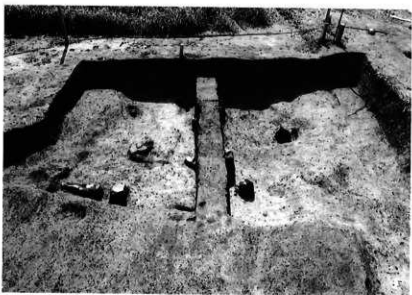
S001 (1層)  
遺物出土状況



S001 (1層)  
遺物出土状況



S001  
土層堆積状況



S001 (2層)  
遺物出土状況



S001  
完掘状況



IV層遺物出土状況  
(E-1G)



S008  
遺物出土状況



自然の落ち込み  
完掘状況

図版 5



S002  
検出状況



S002  
遺物出土状況



S002  
遺物出土状況

図版 6



S002  
遺物出土状況



S002  
土層堆積状況



S002  
完掘状況

図版 7



S004  
検出状況



S004  
土層堆積状況



S004  
完掘状況

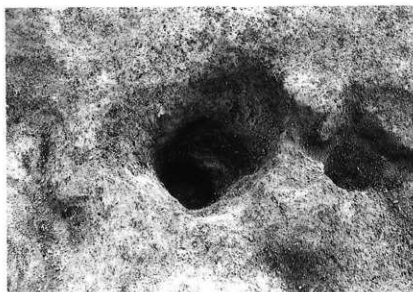




S005  
完掘状況



S004  
完掘状況

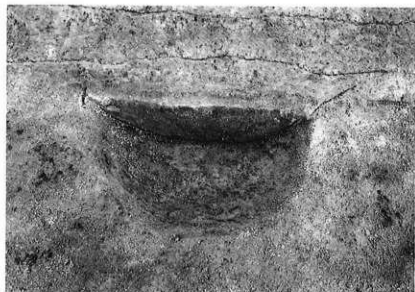


S003  
完掘状況

図版 9



S009  
検出状況



S009  
土層堆積状況



S011・S012・S013  
完掘状況



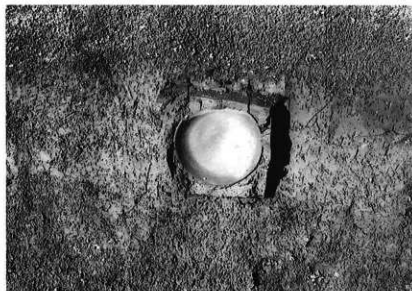
S014  
完掘状况



S017  
完掘状况



遺物出土状况  
(青磁皿)



IV層  
遺物出土状況  
(土師器環)



遺物出土状況  
(須恵器環)



V a層  
遺物出土状況  
(土師器鉢)



杭出土状況  
(南より)



調査区完掘状況  
(北東より)



調査区完掘状況  
(南西より)



1 S 001 (2層) 出土土器



2 S 001 (2層) 出土



3 S 001 (2層) 出土



4 S 001 (2層) 出土



5 S 001 (2層) 出土



6 S 001 (2層) 出土



1 S008出土



2 包含層出土 (弥生土器)



3 包含層出土 (弥生土器)



4 包含層出土 (弥生土器)



5 S001 (1層) 出土須惠器



6 包含層出土 (弥生土器)



1 S002出土土器



2 包含層出土 (中世)



3 包含層出土 (古墳時代)



4 包含層出土 (中世)



5 包含層出土 (青磁)



6 S002出土





1 S002出土土器



2 S001 (2層) 出土



3 S001 (2層) 出土



4 S001 (2層) 出土



5 S001 (2層) 出土



6 S001 (2層) 出土



1 包含層出土 (縄文土器)



2 包含層出土 (古墳時代)



3 包含層出土 (古墳時代)



4 包含層出土 (古墳時代)



5 包含層出土 (古代)



6 包含層出土 (古代)



1 包含層出土 (近世)



2 包含層出土 (滑石製鍋)



3 包含層出土 (石鐵)



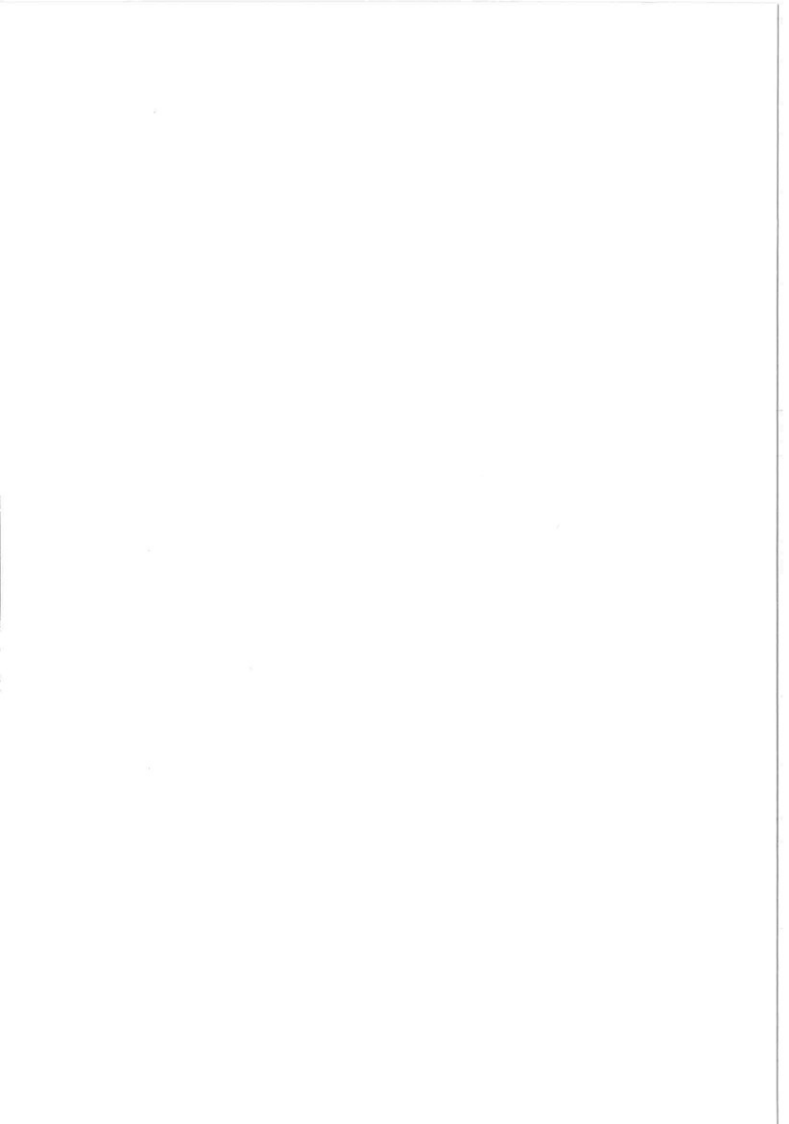
4 包含層出土 (石鐵)



5 包含層出土 (石皿・凹石)



6 包含層出土 (鉄器)



## 報告書抄録

フリガナ	ツイジケノシタイセキ							
書名	築地池下遺跡							
副書名	国道 208 号玉名バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名	玉名市文化財調査報告							
シリーズ番号	第 2 2 集							
編著者	襲父雅史 古閑敬士							
編集機関	玉名市教育委員会							
所在地	〒 869-0292 熊本県玉名市岱明町野口 2129 TEL 0 9 6 8 - 5 7 - 4 4 2 9							
発行年月日	2010 年 4 月 日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
築地池下遺跡	熊本県玉名市 築地字池下	43206		32°56'15"	130°31'52"	20	1119 m <sup>2</sup>	国道 208 号 玉名バイパス 建設事業
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
築地池下遺跡	散布地	弥生 古墳  古代 中世		竪穴住居跡  溝 土坑 ピット		弥生土器 土師器 須恵器 土師器 須恵器 青磁・白磁 瓦質土器 滑石製石鍋		

玉名市文化財調査報告 第22集

一般国道208号玉名バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

## 築地池下遺跡

---

平成22年8月30日印刷

平成22年8月31日発行

編集発行 玉名市教育委員会  
〒862-0292 玉名市岱明町野口2129

印刷 岱明印刷  
〒869-0222 玉名市岱明町野口2281-2  
TEL 0968-57-0141